

た。

この結果を來らせることに與かつた諸原因のうちには、ロオリストンの使命もあれば、タルティノオで糧食の饒多であつ事もあれば、佛蘭西軍の不活動と紀律の弛廢とに關して八方から來つ、あつた諸報告もあれば、新募兵に依つて我軍の補充された事もあれば、好天氣もあれば、露西亞兵が長く休息した爲めもあれば、休養の後では何時でも軍隊間には起つて來る、それを爲る爲めに自分等が集められた爲事を爲度くつて堪まら無くなる心持もあれば、自分等が最早長いこと見無かつた佛蘭西軍を見度いといふ好奇心もあれば、露西亞の前哨隊が、タルティノオに陣して居た佛蘭西軍の間へ突撃を行つたといふやうな勇猛の元氣もあれば、農夫等や、野武士等の集團が佛蘭西軍に對して得た勝利の報知もあれば、それで起された羨の念もあれば、佛蘭西軍が莫斯科に居る限りは誰の心にも抱かれて居た復讐の念もあつたのだが、就中、最も強かつたのは、兩軍の相對的の力が變はつて了まつて、我軍の方が優勢であるのだといふ、何の兵卒の心にも育ちつ、あつた漠然とした感であつたのだ。

兩軍の相對的の力が實際變つて居たのだ、で、進撃は何うしても避け得られ無いことに爲つた。で、直ぐ、針が字板を一巡するといふと、時計の鐘が打つて、奏し始めるのが確であるのと全く同様に、この變化は、高い連中の輪の中の輪の増し行く活動や、忙しさや、動きの裡に、反射させられたのであつた。

(三)

露西亞軍は、クツツゾフ、彼の幕僚、及び、彼得堡から皇帝に因つて、統率されて居た。莫斯科放棄の報知が未だ彼得堡へ達し無かつたうちに、全戦役に對する詳細な方略が、書きあげられて、それに依つて行動しろといふので、クツツゾフの許へ送られた。この方略は、莫斯科が未だ我軍の手に在るのだといふ假定の下に立てられたものであるに抱らず、それが、參謀部で可決されて、實行されるべき方略だとして受け容れられたのだ。

クツツゾフは、唯だ、遠方からの指令は何時も實行し難いものであることを、書いて遣つた。で、何等かの困難が起つた場合には、それを解く爲めだといふので、新たな命令が新たな人々に携さへられて、やつて來た。そして、さういふ人々の任務は、クツツゾフの舉動に注意して居て、それを報告することであつた。

さういふ新たな権能者を外にしても、露西亞軍の幕僚の將軍たちが全く變つて了まつて居た。

殺されたバグラアチオンや、怒つて退隠したバルクレネーの位地が補充されなければなら無かつた。

AがBの位地に置かるべきか、BがDの位地に置かるべきか、若くは、他方では、DがAの位地に置かるべきか、など、いふ問題が、さういふ移動がAや、Bや、Dやの満足以外何物かに影響でもあつたかのやうに、非常な真面目さで、熟考された。

自分の幕僚長のベニグセンとツウツフが仲の悪るかつたことや、皇帝の信任を得た顧問の居たことや、それから、以上のやうな新命任の爲めとで、本營に於ける諸黨派の争は、非常に複雑であつた。AはBの位地を覆へさうと爲、DはCの位地を覆へさうと爲て居るといふ風で、誰も彼も、有らゆる有り得べき結合や、錯列で、働いて居たのであつた。

さういふ相対する潮流の裡で、陰謀の目的は、大抵の場合、戦を統率しやうとすることであつたのだ。で、實際は、戦は、さういふ人々の行動とは全く無關係な避け得られ無いそれ自身の進路——さういふ人々の計畫とは決して一致し無いで、群集の裡で相互に働き合つて居る諸力の結果であるところの進路——に従がつて行きつゝあるのに、さういふ人々は、誰も彼も、自分等が戦争の進行を制馭して居るのだと、想像して居るのであつた。相互に妨げ合ひ、矛盾

し合つて居るさういふ總ての諸計策が、起るべき筈であつた事柄の正確な反射だとして、高い連中の裡では、受け容れられて居た。

「公爵ミハール・イラリヨオノヴィイチ」と、皇帝は、十月二日に書いた——その手紙は、クツウツフが、タルティノオの戦の後に受け取つたのだ——

「九月の二日から、莫斯科は敵の手にあるのだ。足下の最後の報告は二十日附である、所で、それ以來、今に至るまでも、敵に向つて行動して、古都を救はうとする企畫は少しも施されず、に、足下は、反つて、足下の最後の報告に依れば、尙遠く退却して居る。セルブウホフは、今は、敵の一枝隊の爲めに占領されて居る、で、名高い武庫があるので、我軍に取つては、非常に大切なツウツラも危険である。

將軍ウインツェンゲロオデから來た報告に依れば、十萬の兵數の敵軍が、彼得堡海道をば行進して居るといふのである。何千かの一軍が、最早既にヅミイツロフの附近に達した。第三の軍は、ヅラディミル海道を進んで居る。それから、第四の侮どるべからざる兵數の軍が、ルウザとモザアイスクとの間に駐軍して居る。ナポレオン自身は二十五日には、莫斯科に居つた。

敵の兵力が、斯ういふ諸枝隊に割られ、ナポレオン自身は、彼の親兵を率て莫斯科に居る、斯ういふ事實でありながら、足下に對峙して居る敵の兵力が、足下に攻勢を執らせ無いほど強いといふことが、有り得ることなのか？

又更に、足下は、敵の枝隊の爲めに、で無くも、高々、足下の率て居る軍に負つた軍團の爲めに、追撃されて居るのだと、思ふ者も、何うしても有りさうに、思はれるのだ。

足下は宜しく、斯ういふ諸事情に乗じて、足下の軍には兵力の甚しく劣つた敵軍を攻撃して、彼等を殲滅するか、さ無くも、彼等を退却させて、今敵軍に占領されて居る地方の大部分を吾々の手に保ち、そして、それに依つて、ツウラ及び國內の他の諸市より總ての危険の虞を除くべきでは無かつたらうか？

若し、敵が、吾々の方に於ては多數の兵をば備ふることの不可能なこの都を脅かす爲めに、彼得堡へ侮り難き兵を送り得るとしたらば、その罪は足下の當然負ふべきものである。何となれば、足下の率ゐて居る軍を以てして、熱心に、斷乎たる行動を執らば、斯の如き災厄を避くるの資は、十分足下の手中に在る筈であるからである。

記憶せよ、足下は、莫斯科の陥落に就ては、屈辱を被りたる國に對して、尙責を負はざるべ

からざることを。

予が足下に賞を與ふるに躊躇し無かつたことは、足下の既に經驗した所である。予のその躊躇せざる心は、今も尙少しも減じて居らぬ。けれども、露西亞國と予とは、足下の智力や、足下の軍事上の才能や、足下の統率せる軍隊の勇氣が吾々に對して保證するところの有らゆる精力と、決斷と、成功をば、足下に向つて、豫期する權利を有つて居るのだ』

が、兩軍の相對的の力の變化が、今では、彼得堡での意見の裡に、現はれて居ることを證明するこの手紙が、未だ途中にあるうちに、クツウゾフは、軍を抑へて居ることは能き無くなつて、戦が既に行はれて居た。

十月の二日に、哥薩克兵のシャボヴァーロフが、偵察に出て、一匹の兎を撃ち、今一匹に傷を負はせた。シャボヴァーロフは、獲物を追つ駈けるのに、氣を取られて、つい森の奥まで入り込んで行つたが、彼は、其所で、前哨をも置かずに、陣して居たミューラの軍の左翼へ行き掛つた。

その哥薩克兵は、今一步で佛蘭西人に捕虜にされる所であつたといふ物語を、大笑で、朋輩

に爲た。その物語を聞いた少尉が、又それを上官に話した。

その哥薩克兵は喚び出されて、尋かれた。哥薩克兵の將校等は、それに乗じて、佛蘭西軍から幾匹か馬を奪はうと思つた、が、そのうちの一人、軍の上長官の或る人々と親しかつたのが、總司令部の一人の將軍に、その事件を話した。

總司令部では、その頃の狀態は緊張し切つて居た。二三日前にエルモオロフは、ベニグゼンの所へ行つて、總司令官に對する彼の勢力を用ゐて、敵軍攻撃が始まるやうに爲て呉れと頼んだ。

「私が若し貴下が何ういふ人だか知ら無かつたとしたら、私は、貴下がさういふ結果を望まないので、斯う頼んでおいでなすつたのだと思つたでせう。私が殿下に一つの方針を勧めれば殿下は必定それとは反對な方針を採用されるのですから」と、ベニグゼンは、答へた。

哥薩克兵が齎らした報知は、偵察隊に依つて確められて、時機が熟して居たことを全然證明した。

張り切つて居た糸が斷れた、時針の齒車がクル／＼廻つた、そして、鐘が打ち始めた。總て彼の——持つて居ると想像されて居た——力や、彼の智力や、彼の經驗や、彼が人間といふも

のを知つて居たことなどに拘らず、クツウゾフは、皇帝へその問題に就て、自身から直接の報告を出さうとして居たベニグゼンからの書面や、その攻撃開始が何の將軍もの願望であつたことや、それが皇帝の望であると彼等が推定して居たことや、それから、哥薩克兵の齎した報知などを考量して、最早その上、その避け得られ無かつた行動を抑止して置くことは能き無かつた。で、自分では無益な有害なことだと思つて居た事件をば實行する命令を出した——即ち、實際は、最早出来あがつて居た事實に對する承認を與へたのだ。

(四)

ベニグゼンが提出した伺ひ書や、敵の左翼が何等の警戒も爲て居らぬといふ哥薩克兵の齎した報告は、進撃の合圖を爲ることの何うしても避け得られ無いことを示して居た最後の徴候に過ぎ無かつた。そして、十月の五日に進撃する手筈になつたのであつた。

四日の朝、クツウゾフは、兵の配置に署名した。トオルは、それをエルモオロフに讀んで聞かせて、それを實行することに關するそれから先の命令を統轄して呉れとエルモオロフに頼んだ。

「宜しい、宜しい、だが、今は時間が無い」と、エルモオロフは云つて、家の外へ急いで出て行つた。トオルが建てた諸隊の配置は、非常に立派なものであつた。その配置は、アウステルリッツでのやうに、書かれて居た——但、獨逸語では無かつたが——

「第一隊團は、かくくの所に進軍し、第二隊團は、此の所を占領する」といふやうな風に。紙上では、さういふ隊團は悉皆、極められて居た時間に、その豫定地點に就いて、敵を全滅した事になつて居た。何も彼も、總ての斯ういふ場合と同じやうに、綿密に前以つて考へてあつた。所が、總ての斯ういふ場合と同じやうに、一隊團も、正常な時間に、正常な場所へ達したものが無かつたのだ。

方略の寫が十分な數だけ出来るといふと、一人の將校が喚び出されて、エルモオロフが、それに従つて命令を出すやうに能ざる爲めにと、エルモオロフの許へ遣られた。

クツウヅフの附將校であつた近衛騎兵のその若い將校は、自分に托されたその任務の重要なのに大喜びになつて、エルモオロフの宿舍へと向つた。

「お居でなりませんよ」と、エルモオロフの従僕がその將校に云つた。

近衛騎兵の將校は、エルモオロフが屢く行つて居た他の將軍の宿舍へと向つた。

「いや、お居でなりません、家の將軍もお不在です」と、云はれた。

將校は再馬に乗つて、又他の將軍の許へと乗り去つた。

「いや、お居でなりません」

「遅延の爲めに、俺に責任が出来さへし無ければ宜いけれども。何うも困まつたな」と、將校は思つた。

彼は、陣地ぢうを乗り廻した。一人は、エルモオロフが他の將軍たちと一緒に馬で出掛けて居るのを見たとき、云ひ、今一人は、エルモオロフは、今頃は最早宿へ歸つて居るに違ひ無い、と云ふのであつた。

將校は、晝食を食ひに止まりも爲すに夕方六時までエルモオロフを探し廻つた。エルモオロフは、何處にも居無かつた。誰も彼が何處に居るか知つて居る者が無かつた。將校は同僚の許で、大急ぎで食事をして、ミロラアドヴィイチに逢はうと、前衛へと駆け戻つた。

ミロラアドヴィイチも、宿に居無かつた。けれども、將校は其所で、ミロラアドヴィイチは將軍キイキンの宿での舞踏會に行つて居るし、又、大抵エルモオロフも其所へ行つて居るだらうといふことを、聞いた。

「が、其は何處ですか？」

「エチキノオです、彼方」と、哥薩克兵の將校は、云つて、遠くの方にある田舎家を指して見せた。

「彼所ですか。我軍の戦線外の」

「仲間の二聯隊が、前哨へ出されて、今は、騒ぎの真最中さ、盛んな事だね。樂隊が二團と、謠歌手の三團が行つてるんです」

將校は、我軍の戦線を越へて、エチキノオへと乗つて行つた。餘程遠くから、彼は、合唱して居る兵卒の舞踏樂の賑かな音を聞いた。

「牧場で……牧場で」と、いふのが、聲々の叫びに消される笛や、糸の樂器の音と共に、聞こえた。

將校の元氣も、又、その音で、昂つた。が、彼は、自分が托されて居たその重要な使命を果たすのに其様な隙どつたのが、自分の罪にされては大變だと、甚く恐れて居た。

最早、やがて晩の九時であつた。彼は、馬を下りて、佛蘭西と露西亞の兩戦線の間で、損害を受けずに居た大きい領主館の入口へ歩いて行つた。従僕等が、玄關の室や、飲食室で、酒

や食物を持つて駆け廻つて居た。合唱隊が、窓の下に立つて居た。

將校は戸口へと案内された。と、彼は、倏忽、軍の總ての重立つた將軍たちを見た——その中に、エルモオロフの大きい、堂々とした姿も見えた。總ての將軍たちは、半圓を造つて立つて、皆制服の釦を外し、顔が赤く勢付いて、聲高く笑つて居た。部室の真中で、赤ら顔の、綺麗な背の低い將軍が、勢好く、好い姿勢でツレバクを踊つて居た。

「は、は、は。えらいぞ、ニコライ・イヴァノヴィチ。は、は……」

將校は、其様な場合へ、重要な用事を以つて、飛び込むのは、重ね々々悪いことだと感じた。で、待つて居るところであつた。が、將軍の一人が彼を見付けた、そして、来た用向を聞いて、エルモオロフに話した。エルモオロフは、顔を擧めて、將校のところへ出て来て、彼の物語を聞いて、何とも云はずに、書面を將校から取つた。

「彼の男が宿に居無かつたのは、偶然だつたと、君は思ふかね？」と、總司令部附であつたその將校の同僚が、その晩エルモオロフの物語を爲ながら、云つた。

「それは悉皆實に馬鹿々々しいことなんだ。彼事は、故意とやつたことなんだせ。コノヅニイツインを困まらせる爲めだつたんだ。見給へ、明日は餘つほど面白いことになるから」

(五)

よぼくの老人、クツウヅフは、次の日夙く起して貰つた、で、早朝、祈禱を云ひ、衣服を着、それから、自分は賛成し無い戦で命令し無ければなら無いといふ不愉快な知覚を以つて馬車に乗り、そして、タルティノオの後方五露里のレターアシエフカから、攻撃する諸隊團が集合する筈であつた場所へと、馬車を驅つた。クツウヅフは、馬車を進めながら、睡いつて、再起きた、そして、右の方の音は、砲の音だか、何うだか、戦闘が未だ始まら無いか、何うだか聞かうと、耳を澄まして居た。

が、何も彼も、未だ悶然として居た。

濕つばい、曇つた秋の日は、明けかゝつて居た。タルティノオに近づいて居るといふと、クツウヅフは、自分を通つて居る路を横ぎつて、騎兵が、川へと彼等の馬を引いて行つて居るのを認めた。クツウヅフは、その騎兵等を見て、馬車を止めて、何の聯隊の者だか、尋ねた。その騎兵等は、すつと先頭で埋伏して居るべき筈であつた隊團の者であつたのだ。

「間違かも知れん、多分」と、年取つた總司令官は思つた。が、もう少し先方へ行くといふ

と、クツウヅフは、歩兵の數聯隊が、武器を地に組み合せ、兵卒等が下袴だけになつて、粥をこしらへたり、薪料の木を取つて來たりして居るのを見た。

彼は、彼等の將校を喚びにやつた。將校は、進めといふ命令は少しも與へられて居無いのだと答へた。

「何の命令も……」と、クツウヅフは云ひ始めた、が、直ぐ言語を止めて、主任の將校を喚び出させた。

馬車から下りて、彼は、頭をうな垂れて、苦しさうな息使で、黙まつて、彼方此方と歩いて居た。彼が喚びにやつた總司令部附の將校エイチエンがやつて來るといふと、クツウヅフは、憤怒で真赤になつて、振り向いた、が、それは、その失策がその將校の罪であつたが爲めでは無く、唯だその將校が、クツウヅフがそれに向つて憤怒を漏す目的とするに足るだけの位地の者であつたが爲めなのであつた。

で、蹣跚けながら、息を切らしながら、老人は、彼が時としては狂亂の體で地面に轉がることのあるやうな憤怒の其様な烈しい状態になつて、エイチエンに跳び掛つて、拳固を振り廻し、無頼漢の使ふやうな悪口を怒號つた。其所へ出て來合せた今一人の將校、大尉プロオジンも、

少しも咎は無かつた者であつたのに、尙且同なじ運命を受けた。

「悪黨どもは、この次には何を爲るだらう？。奴等を銃殺しろ。悪漢ども奴」と、クツウツフは、聲を囁らして叫んだ。拳固を振り廻して、蹣跚けた。彼は全くの肉體上の苦痛を受けて居る状態に在つたのだ。彼、即ち、總司令官殿下たる彼、露西亞では彼が持つたやうな權力を持つた者は未だ嘗て一人も無かつたと、誰からも保證された彼その人が、此様な有様に置かれたのだ——全軍の笑柄にされたのだ。

「種々と心配し、今日のことを祈禱し、一夜夜睡す、何も彼も考へて——それが、悉皆何にもならんのだ」と、彼は自分の事に就て、さう思つた。「俺がホンの少年將校であつた時分でも誰も、此様な風には、俺を笑柄には爲得無かつたのだ……それなのに、今は」

彼は、體刑でも受けたかのやうに、肉體上の苦痛の状態に在つた。そして、その苦痛をば、怒つた苦しさうな絶叫で、云ひ表はさすには居られ無かつたのだが、直きに、彼の力が盡きた、で、四邊を見廻して、不公平なことを随分云つたことを感じて、馬車に乗つて、黙まつて歸途に就いた。

一度出し切つた彼の憤怒は、再と出ては來無かつた。で、クツウツフは、弱々しさうに瞬きを爲ながら、人々の云ひ分や、自己辯護を聞き（エルモオロフ自身は、次の日まで、影を見せ無かつた）、それから、起ら無かつた戦をば、次の日には必ずやるといふベニグセンや、コノヴニイツインやトオルの熱心な主張を聞いて居た。で、今一度クツウツフは承知し無ければなら無かつた。

(六)

次の日、諸隊は、晩方までにそれ／＼の場所へ集められて、夜前進して居た。

それは、紫色がかつた黒い雲で曇らされた空ではあつたが、雨の降る虞の無かつた秋の夜であつた。地は濕つて居たが、泥濘つては居無かつた。そして、諸隊は、砲兵から起る時々のデヤカチャカいふ少し高い音の外は、音無く進んで居た。彼等は、高い聲で話を爲ることや、烟草を飲むことや、火を打つことを、禁せられて居た。馬は嘶か無いやうにされて居た。企畫の秘密なことが、その興味を更に加へた。兵は快活に行進して居た。五六の隊團は、銃を組合せて、目的地へ達したのだと想像して、冷たい地面で横になつた。他の諸隊團(大多數)は、徹宵行進した。そして、何處だか、確に、行くべき筈の地點では無かつた場所へ、到着した。

伯爵オルロフ・デニソフが率ゐて居た哥薩克兵(軍の中の少しも主要で無かつた分隊)ばかりが、豫定の時刻に豫定の場所へ達したのであつた。この分隊は、スツロオミロヅアの村からヅミツロオフスコエに至る路にあつた森の極く端に止まつて居た。

黎明前に、その時睡いつて居た伯爵オルロフは起された。佛蘭西の陣營からの脱營者が、彼の前へ伴つて來られた。それは、ポニャトオフスキイの軍團の下士官であつた。この下士官は、自分は、佛蘭西の軍中で侮辱されたが爲めに脱營した、即ち、自分は何人よりも勇敢であつて、最早餘程前に將校に爲れるべき筈であつたのに、一向昇級させて呉れ無いので、彼等を捨て、了まつて、彼等に復讐してやらうと思つて、逃て來たのだと、波蘭語で、説明した。彼は、ミューラアが、その露西亞軍から一露里の所に、その夜は陣して居るのだから、若し、彼に百人の兵を附けて呉れば、必定ミューラアを捕虜にして見せると、云つた。

伯爵オルロフ・デニソフは、同僚と協議した。さういふ非常な誘惑的な提言は何うにも拒み得えれ無かつた。誰も彼も、行かうと騒ぎ立てた、誰も彼も、その策をやつて見ると、勧めた。多くの争論や、相談を経た後で、少將グレコフが、哥薩克兵二聯隊を率ゐて、その波蘭の脱營者と一緒に行くことに極まつた。

「こりや、覺えて居れよ」と、伯爵オルロフ・デニソフは、その波蘭の脱營者を去かせる時に、それに向つて、云つて、「若し、お前が虚偽を云つたのであつたら、お前を犬のやうに銃殺するぞ。けれども、お前の云つた事が眞實であつたら、百クラウンだぞ」

脱營者は、その言語には何とも返答し無いで、勢ひ込んだ態で、馬に乗つて、急いで集められたグレコフの兵と共に乗り去つた。

彼等は森の裡へ入つて去つて了まつた。

伯爵オルロフは、明けて行く朝の寒さで震えながら、自分だけの責任でやり出した企畫で昂奮して、グレコフと一緒に、森を出て、近寄つて來る黎明と、消えかゝつて居る燎火との物をまぎらす光の裡で今は薄り見えだして居た敵陣を熱く見始めた。

伯爵オルロフの右手の開けた森には、我軍の諸隊團が見え無ければならぬ筈であつた。伯爵オルロフはその方向を見た、が、随分遠方までも見える明るさであつたのに、さういふ隊團は一向見え無かつた。伯爵オルロフは、それ等の兵は、佛蘭西軍の陣營へと動き始めて居るのだと想像し、非常に遠視の利いた彼の副官が、確にさうだと斷言した。

「いや、勿論、後れたな」と、伯爵オルロフは、云つて、敵陣を凝視めた。

吾々が一端人を信じて、その人が目前に居無くなるといふと、その人を疑ひだすことが屢々ある通りに、伯爵オルロフには、不意に、その脱營者が自分等を欺まして居るので、彼は自分等に虚言を云ひ、そして、その二個聯隊を、何處へだか、伴れて行つて了まつて、その攻撃全體の邪魔を爲やうとして居るのに過ぎ無いことは、如何にも知れ切つた見易いことであるやうな氣がした。軍隊の彼様な群團の裡からその將帥を捕虜にするなどは、途方も無い話では無いか。

「必定、彼奴は虚言を云つたのだな、彼の悪漢は」と、伯爵は云つた。

「呼び返したら何うです」と、幕僚の一人が云つた、その男は、敵陣を眺めて居るうちに、その企畫に對して伯爵と同等なやうな疑念を感じたのだ。

「あゝ。左様だ……君等は、何う思ふね、この儘にして置かうか？。それとも？」

「では、歸れとご命令になりますか？」

「歸れ、左様だ、歸れなんだ」と、伯爵オルロフは、不意に決心して、云つて、懐時計を見つた、「最早後れた、全然明るくなつて了まつた」

で、副官が、グレコフの後を追つて、森へ駆け込んで行つた。グレコフが歸つて來るといふ

と、伯爵オルロフは、その企畫を捨て、了まつたことや、幾ら待つても歩兵の隊團の出で來ぬことや、敵軍が其様なに近いこと（彼の分隊では誰も彼も同じやうに感じて居た）などの爲めに、氣が昂つて、又攻撃しやうと決心した。

叫語で彼は命令した、「馬に乗れ」

兵は、その居場所々に就いて、十字を切つた……「神の名に於て、行け」

「萬歳」が、森の裡で轟いた、そして、哥薩克兵等は、槍を下して、宛然袋からでも射出されたかのやうに、百宛相續いて、川を渡つて、敵陣へと、勇しく、飛んで行つた。

哥薩克兵を見た一番始めの佛蘭西人の一つの絶望的な、怖れた叫聲、すると、陣營の裡の、衣服を脱いで居る、半眠の誰も彼もが、砲も、銃も、馬も棄て、了まつて、逃げ去りだした。

若し、哥薩克兵等が、佛蘭西人が自分の四方に又後方に捨て、行つた物には構はずに、佛蘭西人を追撃したのであつたら、ミユラは元より、其所に居た全體の兵を捕虜に爲ることが、できたのであつたのだ。彼等の司令將校等は勿論左様爲やうと爲たのであつたが、哥薩克兵等が、戦利品や捕虜を得てからは、最早何うにも、彼等を一寸でも動かさやうは無かつたのだ。誰も號令などは耳にも入れ無かつた。

彼等は、千五百の捕虜と、三十八門の砲と、旗と、それから、哥薩克兵等の眼には極く大切なものであつた物、即ち、馬や、鞍や、馬衣や、その他の種々な物を、取つた。彼等はさういふ總ての物を始末しやうと思つた、捕虜や、砲を確に取り、戦利品を分割し、分捕品に就て、怒號つたり、相互に腕力で奪ひ合ふことさへ、爲るのであつた。で、總てさういふ事が哥薩克兵等の注意を吸収して居た。

佛蘭西人は、その上追撃され無いのを見て、集まり始めた、彼等は隊伍を整へて、射撃し始めた。オルロフ・デニソフは未だ依然他の隊團が来るものと思つて居た、で、それから上には進撃し無かつた。

が、一方で其様なことがあつて居るうち、第一隊團は斯う進む云々といふ配置に従つてベニグセンに統率されトオルに指揮されて居る後れた諸隊團の幾つかの歩兵隊は、然るべき順序で出發して、何處かへ達した。唯だ、その何處かは、達すべき筈の場所が無かつたのみである。

で、又、例の如く、勢好く出發した兵卒等は、駐まり始めた。で、不満の吐聲があり、混亂の感があり、そして、彼等は、或る地點まで、行進し戻つた。

副官等や、將官等が、彼方此方と駆け廻り、怒號つたり、喧嘩したり、自分等は全く間違つた所へ来て、全然後れて了まつたのだと、云ひ放つたり、誰かを叱責したり、など爲たのであつた。で、到頭、衆皆絶望して、その責任は自分には無いのだと、極めて了まつて、唯だ何處か知らへ達する爲めに行進した。

「吾々は、遅かれ早かれ、何處か知らへ達し無ければなら無い」

で、勿論、彼等は、何處かへ達した、が、其所は、彼等が行つて居なければならぬ場所であつたのでは無かつたのだ。尤も、目的地へ達した隊はあるにはあつたのだが、それは、最早非常に後れてのことであつて、彼等が其所に達したのは、何の役にも立たず、唯だ無益に敵からの射撃を受けたのみであつたのだ。

この戦では、アウステルリッツの戦でのウイエロオテルの役廻であつたトオルは、不撓の精力で、戦場の一方から他方へと駆け廻つたが、何處でも、物がチグハグになつて居るのに出會つた。で、一例を挙げると、彼は、夜が明け切つてから、バゴヅットの軍團が森へ来て居るのに、出會つた、が、その軍團は、餘程前に其所へ来て、それから、オルロフ・デニソフに援助しに行つて居るべき筈のものであつたのだ。さういふ失敗に失望し、又それが爲めに、

激昂し、それから、それは誰かの咎であるに違ひ無いのだと想像して、トオルは、軍團の司令官の將軍へと駆け付けて、その將軍を嚴重に譴責して、銃殺するに足るべきものだ、云ひ放つた。

穩かな氣質の、心の確乎した老將軍バゴウツトも、又一切の遅延や、混亂や、矛盾した命令などで、ムシヤクシヤして居たので、意外にも（誰にも）、彼は、彼の性質とは全然反對な、烈しい腹の立て方を爲た。そして、トオルに向つて、餘程甚いことを云つた。

「我輩は、誰からも、我輩の義務を教へて貰はんでも宜しい、我輩は誰にも劣らず、死に面し得るのだ」と、彼は、云つた。で、一分團で前進した。

勇敢なるバゴウツトは、激昂したが爲めに、今唯つた一分團で戦闘に進むといふことが果して何かの役に立つのかどうかといふことを考ふるに違無くして、自分の部下を敵の砲火の下へ驀地に率ゐ進んだ。危険と、破裂弾と、銃弾とが、彼がその憤激の際に於いて、要した物その物であつたのだ。眞最初の銃弾の一つが、彼を殺し、他の弾が、彼の部下の多くを殺した。で、彼の分團は、何等の目的も無しに、唯だ無益に、暫時敵の砲火の下に残つて居た。

(七)

その間に、今一つの隊團が、佛蘭西軍の中央を突く筈に爲つて居た、が、この隊團はクツゾフが率ゐて居た。彼は、自分の意に反して始められたこの戦は混亂に終るのみだといふことを知つて居た。で、彼の力の及ぶ限り、自分の兵を抑へて居た。彼は動か無かつた。

クツゾフは、彼の鼠色の馬で黙まつて乗り廻りながら、攻撃を開いたらどうかといふ意見に對して氣の無い返答を爲た。

「攻撃を開始しろと云ふのは宜いが、君等は混み入つた行動を爲ることを知らんでは無いか」と、彼は、攻撃を開かせて呉れと頼んで居たミロラドヴィイチに云つた。

「吾々は朝のうちにミユアを捕虜にし得無かつたし、又、正當な時機に定め地點へ達すること能き無かつたのだ。斯うなつては、最早何うにも爲やうがあるものか」と、彼は、今一人の者に云つた。

佛蘭西軍の後衛、即ち、哥薩克兵の前の報告では何も居無いといふのであつた場所に、實際は、波蘭人が二大隊居るのだといふ報告がクツゾフの許へ齎らされるといふと、彼は、後に

居たエルモオロフを横眼でジロリと見た——彼は前の日以來その時までエルモオロフには一言も口をきか無かつたのだ。

「誰も、彼も、種々な方策を出して、攻撃を開始しろと頼むのだが、いよく爲事に掛つて見るが最期、何の用意も出来て居らんで、敵の方は、前以つて警戒されて、相當の方策に出るのだ」

エルモオロフは、眼を半睡りに爲た、そして、この言語を聞くといふと、微弱に微笑んだ。彼は、暴風雨は彼の頭上をば最早吹き過ぎて了まつて居て、クツウヅフはその當てこすりより以上には出無いのだと知つた。

「我輩を冷嘲かして凹ましたのだせ」と、エルモオロフは、低聲で云つて、自分の傍に居るラエーフスキイを膝で突つ突いた。

その直ぐ後で、エルモオロフは、クツウヅフの前へと出て行つて、恭やしく、意見を述べた——

「未だ時機は過ぎ去つて居りませんが、殿下、敵は未だ退いて了まつて居りません。攻撃の命令をお出しになつては如何でせうか？。左様でございませんと、近衛は烟を見ることが

能きすまいから」

クツウヅフは、何とも云は無かつた。が、ミラアの軍が退却して居るといふ報知が來るといふと、彼は、進撃の命令を出した。けれども、百歩毎に、四十五分休憩した。

戦は、唯だオルロフ・デニソフの哥薩克兵が爲つたもののみであつた。軍のその他の部分は、唯だ無益に二三百の兵を失つたに過ぎ無かつたのだ。

この戦の結果として、クツウヅフは、金剛石勳章を授けられ、ベニグセンも、金剛石と十萬留を以て賞せられ、それから、その他の將軍たちも、それ／＼階級に従つて、心持の好い賞に預かつた。そして、總司令部では、又新たにさまざまの移動が行はれた。

「何時でも斯ういふ風なんだ、何も彼も顛倒だね」と、露西亞の將校や將軍等がタルティノオの戦の後で云つた。それは恰度今日人々が、自分等ならば何うにか巧くやつたものを、誰か間拔けな奴があつて、何も彼も滅茶にして了まつたといふ臆断で、さういふのと同じ譯なのだ。

が、さういふ風に云ふ人々は、自分等の云つて居る事柄を十分に理解して居無いか、若くは、故意に自ら欺むいて居るのか、孰かなのだ。

何の戦でも——タルティノオでも、ポロディノオでも、アウステルリッツでも——それに對する方略を立てた人々が、さう爲やうと思つた通りには、ならぬものである。それは何うしても避け得られぬことなのだ。

戦場といふものは、人々に取つては、生死の問題であるのだから、人が戦場に於ける程自由な場合は何處でも無いのであるが、その戦場では、自由に働くさまじくの力の無数な集合が、戦の取る方向に影響を及ぼすのであつて、さういふ方向は、前以つては決して知り得られるものでは無く、又、孰れか一個の力の方向とは決して合致するものではないものなのだ。

多くの力が或る物體の上に同時に違つた方向に向つて働く場合には、その物體の運動の方向は、さういふ諸力のうちの何れの方向とも合致し無いで、何時でもその中間の方向、即ち、さういふ諸力の總括の方向を取るものだ。それを、機械學では、力の平行方形と云つて居るのである。

歴史家等、殊に佛蘭西の歴史家等の吾々に與へる叙説に於て、吾々が、戦争や戦は前以つて定めた方略通りになつて行くもの、やうだといふことを見出すにしても、吾々がその説から演繹し得る決論は唯ださういふ叙説は虚偽であるといふことに過ぎ無いのだ。

タルティノオの戦は、明白に、トオルが企畫で居た通りの目的を達し得無かつた。即ち、彼の兵の操縦法通りに軍を戦場に率へ行くことも能き無ければ、伯爵オルロフ・デニソフが持つて居たらうと思はれる目的通りにミューラを捕虜に爲ることも能き無かつたし、又、ベニグゼン其他の人々が持つて居たらしい一撃の下に敵の全軍團を全滅させやうといふ目的も達せられ無ければ、敵火の下で抜群の働を爲やうと思つて居た將校等の目的も達せられ無かつたし、それから又、自分が得たより以上の戦利品を得度がつて居た哥薩克兵の目的も達せられ無かつたのだ。

が、實際それに依つて成し就げられたものとして、又、總ての露西亞人の願望であつた事(露西亞國內から佛蘭西軍を追ひ出す事及びその軍を全滅させる事)として、その戦の目的を考へるとすれば、タルティノオの戦は、全くその筈なものであつたが爲めに、恰度戦役のその時期に必要であつたものであつたことは、全く明白なことであるのだ。その戦の實際の結果より以上に前に云つた目的に協ふその戦の何様な結果をも想像することは、困難であるか、若くは、不可能であるかである。非常な混亂に拘らず、全く最少の努力で、そして、最も僅な損害で以つて、その全戦役中での最も重要な結果が得られたのだ——即ち、この戦に依

つて、退却から攻撃へと變り、佛蘭西軍の弱さが顯はれ、それから、ナポレオンの軍を逃逃させるのに必要であつた撃動が與へられたのであつた。

(一八)

ナポレオンは、所謂莫斯科川の花々しい勝利で莫斯科へ入る、佛蘭西軍が戰場を領有して居るのだから、その勝利であつたことには、更に疑點が無いのだ。

露西亞軍は、退却して、莫斯科——糧食や、武器や、諸機具や、無量の富の具つた莫斯科——をナポレオンの手に委して了まう。

佛蘭西軍の兵力の半分しきや無い露西亞軍は全く一月の間更に攻撃しやうとし無い。

ナポレオンの位地は實に華々しいものである。二倍の兵力の軍で、露西亞軍を襲つて、それを全滅し、そして、有利な平和を結ぶことも、若くは、その平和の談判が拒絶されれば、彼得堡へ向けて脅迫的な進軍を爲、又若し、それが失敗すれば、スモレンスクかヴィルナへ歸るか、それとも、莫斯科に居るかして、要するに、佛蘭西軍が今有して居る光榮ある位地を維持して居ることも、さういふことを爲るのには、別に太した天才の要るのでは無かつたのだ。

さういふ事を爲るのには、極く單純な、極く容易な方法を取りさへすればそれで宜かつたのだ、即ち、兵卒に掠奪を爲せ無いやうに爲るとか、冬の衣服(莫斯科でのその供給は、全軍に對して十分有り餘る程であつた)を用意するとか、それから、糧食——これも、莫斯科での供給が、佛蘭西の歴史家等の示めて居るところでは、全軍を六個月間養ふに足りたといふのだから——それを規則正しく集めるとか、先づさういふ事を爲さへすれば、それで宜かつたのだ。

所が、歴史家等の確言する所に依れば軍に對して絶對の權力を持つて居たといふ、總ての軍事上の天才のうちの最も豪い人であつたナポレオンは、さういふことを寸毫も爲ら無かつた。左様いふことを寸毫でも爲るどころでは無く、彼は、彼が自由に執り得た總ての種々な方針のうちから、一番馬鹿々々しい、一番有害な方針を選ぶやうに、自分の權力を用ゐたのだ。ナポレオンが爲し得た總ての種々な事の中で——即ち、莫斯科で冬籠を爲るとか、彼得堡へ行くとか、ニイジニイ・ノゾゴロッドへ行くとか、クツヅフがその後取つた路に依つて、今少し北か南かへ戻るとか、總てさういふことの中で——ナポレオンが實際採つたもの以上に、彼の軍に取つて(その結果が證明した通り)不幸な方針は、誰にも到底想像し得られ無いのだ——

即ち、それは、十月まで莫斯科に止まつて居て、軍隊をして町を劫掠するに委して置いて、それから、思ひ切り悪く、守兵を後に残して置いて、莫斯科から行進し出て、クツウヅフと會戦しやうとして行きながら、而も戦を開かずに、右方へ轉じて、マレエ・ヤロスラヴヅツまで行き、其所で再戦をやつて見るのを嫌つて、到頭、クツウヅフが取つた路では無く、モザイスクに出で、スモレンスク海道に依つて、荒された地方を通つて退却するに至つたまでの方針なのだ。

ナポレオンの目的が彼の軍を全滅させるのにあつたと假定して置いて、最も熟練な軍略家をして、露西亞軍が取り得る如何なる方法をも全く別にして、ナポレオンが取つた方針程確に佛蘭西軍全體を殲滅させ得るやうな行動の如何なる連續でもを考案させて見るが宜い。それは、到底ナポレオンのやつたやうに巧く行く氣遣は無いのだ。

その通りに、ナポレオンは爲つたのだ。が、ナポレオンが、さう爲度かつたので、若くは、彼が鈍漢であつたので、自分の軍を覆滅させたのだと云ふことの不當なことは、ナポレオンが、莫斯科へ彼の軍隊を入れやうと思つたので、莫斯科へ兵を入れたのだとか、彼は極く精巧な、偉大な天才であつたが爲めに、さう爲たのだとか云ふことの不當と同一なものである。

両方の場合とも、個人たる彼の活動は、一兵卒の個人的活動以上の力は更に無いのであつて、それは單に事件を決定する法則と合働したに過ぎ無いのであつた。

ナポレオンの諸能力が、莫斯科に遲滞して居たと、歴史家等が云つて居るのだが、それは全く間違である（歴史家が左様いふ説を立てたのは、單に、ナポレオンの行爲が、後の結果で見ると、一向それだけの効力が無かつたからに過ぎ無いのだ）。

その以前、及び、その後の千八百十三年ちうと全く同様なやうに、ナポレオンは、自分並に自分の軍の爲めに、彼の有らゆる權力及び有らゆる能力を以つて盡した、ナポレオンの此の時の活動は、埃及の時にも、伊太利の時にも、埃地利の時にも、又、普魯西亞の時にも、少しも劣らず驚嘆すべきものであつたのだ。

埃及でのナポレオンの大功績なるものは、唯だ佛蘭西人に依つて吾々に傳へられて居るのみであるから、所謂四十の世紀が彼の偉大を見下して居た埃及でのナポレオンの天才なるものが何れまで實際のものであつたのか、吾々には確には更に知りやうが無い。

吾々は又、埃地利や、普魯西亞でのナポレオンの働に就ての物語は佛蘭西と獨逸との根源から引き出され無ければなら無いのであるから、その兩國でのナポレオンの天才に就ても確な

判断を下すことが能き無い。で、戦はずに、兵の幾軍團もが、理由も無く降服したとか、攻圍も無くして、幾つもの城塞が理由も無く開城したとか、いふことが、獨逸で行はれた戦争の唯一の説明として、ナポレオンの天才といふことを持ち出させるやうに、獨逸人をさせるのに違ひ無いのだ。

けれども、吾々は、有り難いことに、ナポレオンを天才だと主張して、吾々の耻辱を隠す必要を少しも持た無い。吾々は、事實をば率直に面も背けずに見る権利を得る爲めには可なり犠牲を拂つて居る、で、その権利は、吾々は何うしても棄て無いのだ。

莫斯科でのナポレオンの活動は、他の何處でもの場合と同等に驚くべく、又同様に天才に満ちて居たものであつた。命令は命令に續き、方略は方略に續いて、ナポレオンが莫斯科へ入つた時から其所を去る時に至るまで、絶えずナポレオンから出たのであつた。市民の居無いことも、その代表者の來無かつたことも、それから、莫斯科の焼けたことさへも、ナポレオンを屈せしめることは能き無かつた。彼は、一刻の間も、自分の軍の安寧とか、敵軍の行動とか、露西亞の人民の安寧とか、巴里に於ける政治上の處分とか、平和の條件に對する外交的の談判とかいふことを、少しも忘れて居はし無かつたのだ。

(九)

軍事の方で云へば、ナポレオンは、莫斯科へ入ると直ぐ、露西亞軍の行動に注目して居れといふ嚴重な命令を將軍セバステヤニに與へ、各海道へ分遣隊を遣り、それから、クツウゾフの所在を發見することをミユアラに命任する。それからして、ナポレオンは、クレムリンに設營することに就ての綿密な命令を與へ、又、それから、露西亞の地圖全體に涉つて、その後の戰役に對する方略を定める、全くそれは天才の爲事であつたのだ。

外交の方面で云へば、ナポレオンは、莫斯科で所有物を盗られて了まつて、乞食のやうにされ、何うしても莫斯科を出られ無かつた大尉ヤコヴレフを、自分の前へ喚び出して、彼に向つて、自分の政略や、寛大の意志を詳細に説明し、それから、皇帝アレクサンドルに宛て、ラストオプチンの莫斯科に於ての職務の盡くし方は甚だ悪いものであつたことを自分の友たり且兄弟たるアレクサンドルに知らせるのが自分の義務だと思ふといふ手紙を書いてから、その手紙を持たせて、彼得堡へと、ヤコヴレフを遣る。

彼は、又、同様な詳密で自分の意見と、寛大の意志とをツウトルミンに説明して、平

和談判を開く爲めに、その老人を彼得堡へ遣る。

司法の方面で云へば、火事が起つた後直ぐに、犯人等を發見して處刑しろといふ命令が出された。それから、悪黨のラストオプチンを罰する爲めに、彼の家を焼いて了まへといふ命令が出た。

行政の方面では、莫斯科には憲法が與へられた。市會が組織され、そして、次のやうな宣言が出された――

『莫斯科の市民等よ。』

爾等の災厄は残酷なものであつた、然れども、皇帝にして王なる陛下は、その災厄を止ましめんことを欲せられる。

如何に、陛下が、犯罪と、規律の違犯を罰せらるゝかといふことに就ては、恐るべき實例が、爾等に教へる所があつた。嚴重な處分が、紊亂の状態を止め、一般の安寧を恢復する爲めに施されたのである。

爾等の中より選ばるゝ長老的會議が、爾等の自治制度、即ち市會を組織するであらう。それ

が、爾等の爲めに注意し、爾等の必要、爾等の利害の爲めに、盡くすであらう。

その議員は、徽章として、赤き平紐を肩より懸くべく、市長はその上に、飾帶を帶ぶることにする。

然れども、職務執行の際以外は、彼等は左腕に赤き平紐を着けるのみである。

市警察は、前日の根據の上に設けられる、而して、彼等は、既に秩序の恢復に着手して居る。

政府は二人の總司、即ち、二人の警務長と、二十人の司官、即ち、警視を命任して、後者をして、市の各部に駐勤せしめて居る。その徽章は、彼等が左腕に帶ぶる白き平紐である。

種々の名稱の五六の寺院開かれ、而して、禮拜の式は、障礙無く其所にて行なはれて居る。

爾等の同市民は、日を追ふて、續々各自の住家に歸り來りつゝあり、而して、彼等をして其所に於て、災厄の爲めに必要となつた救助と保護とを得せしむるやうにせよといふ命令が出で居る。

これ等が、政府が、秩序を恢復し、爾等の窮苦を輕からしめん爲めに取つた處分である、然れども、その目的を達せんが爲めには、爾等は、是非共、政府と協力し、能き得るならば、爾等が罹りたる災厄を忘れ、その如く残酷ならざる運命の來るを希望を以つて待ち、又、爾等の

身體若しくは爾等の棄て、去りたる財産に對して、暴力を振ふ罪を犯す者をば、耻辱多き死が
必らず待つことを信じ、従つて、爾等の身體及び財産を保護するは、君主中の最も偉大にして
最も公平なる陛下の意志なるを以つて、それ等のもの、保護さるゝことには、決して疑を挾
まずに居らなければならぬ。

兵士等及び市民等よ、爾等は、如何なる國民に屬するを問はず、國家の繁榮の根源たる公共
の安心を恢復せよ、兄弟の如く生活し、以つて相互に相扶助し、相保護せよ、悪心ある者の計
策を混亂せしむるやう協力せよ、而して、文武の官憲の命を守るべし、しかせば、やがて爾等
の涙も流れざるに至るのである』

兵站の方では、ナポレオンは、總ての軍隊に順々に、掠奪的に便宜糧食其他を徵發する爲め
に、莫斯科へ入り込み、其方法に依つて、軍が將來の供給品を供へらるゝやうにせよといふ命
令を出した。

宗教の方では、ナポレオンは、僧等に歸つて來させて、禮拜式が再び寺院で行なはるゝやう
にと、命じた。

商業を獎勵し、軍隊に對する供給品を備ふる目的で、次のやうな布告が各所に貼り出され
た――

『布告』

爾等、動亂の爲めに市外に逐はれたる莫斯科の平和なる住民等、職人等、労働者等、及び、
爾等、今尙根據無き恐怖の爲めに野を出づる能はざる地の散在せる耕作者等よ、聞け。

平穩がこの都に返りつゝある、秩序がその中で恢復されつゝある。

爾等の同國人は、彼等が尊敬を以て取り扱はるゝを見て、今や、大膽に各自隠れ所より歸
り來たりつゝある。

彼等の身體若しくは財産に對する暴行は如何なるものにも速に罰せらるゝ。

皇帝にして王なる陛下は、彼等を保護し、且、陛下は、彼の命令に背く徒輩の外は、彼等の
うちの何人をも、彼の敵とせらるゝことは無い。

陛下は、爾等の窮困を止ましめ、爾等をして、爾等の家及び家族へ歸らしむることを欲せら
れて居る。

陛下の仁愛なる企畫に協力せよ、而して、恐虞無く吾々に來れよ。
市民等よ。

安堵して、爾等の住所に歸れよ、爾等は、各自の缺乏を満足さする手段を速に發見するであらう。

職工等及び勤勉なる手工等よ。

爾等の職に歸れよ、家も、店も、將爾等を保護する爲めに番兵も、爾等の歸るを待ちつゝある、而して、爾等各自の勞力に對する正當なる報酬を受け得られる。

而して、又、爾等、農民等よ、爾等が曩に怖れて隠れたる森より出で來り、保護を得ることには十分に信頼して、各自の小舎に歸れよ。

農民等が、各自の餘分の貯藏及び田園の産物を持ち來り得る市場が、市のうちに開かれた。

政府は、彼等農民に對して售賣の自由を確めん爲めに次の如き方法を設けた――

(一) 今日より以後、農民、耕作者等、及び莫斯科郊外の住民等は、何等の危険無く、如何なる種類の物品をも、二個の指定市場――即ち、モホヅアヤ及びオホトニイ・リヤアド――へ持ち來り得られる。

(二) 物品は、賣方及び買方が雙方一致し得るやうなる價に於て、彼等より買ふべし、然れども、若し、賣方が、正當なる價として請ふところのものを得られざる場合には、彼が、その物品を村へ持ち歸ることは、全く自由であつて、何人も、如何なる辭柄の下にも、それを妨たげることとは能きぬ。

(三) 毎日曜及び水曜をば、毎週の市日と定める、その爲めとして、軍隊の相當なる數が、入り來る荷馬車を保護し得るやうなる市からの距離に於て、總ての公道に沿ふて、水曜及び土曜には、駐屯せしめられる。

(四) 荷馬車及び馬を以て農民が、何等の障碍無く、歸路に就き得べきやう、前項同様の處置が施されるべし。

(五) 普通の店舗を再興する爲めの處置も時を移さず施されるであらう。
市及び田園の住民等、及び如何なる國籍に屬するにもせよ、爾等勞働者、手工等よ。
爾等は、皇帝にして王なる陛下の仁愛なる企畫を實行せざるべからず、而して、爾等は公安を維持せんが爲めに陛下に協力し無ければならぬ。

爾等の尊敬と信任を陛下の足下に致せよ、而して、遲滞無く吾等に合同せよ』

軍隊及び人民の元氣を維持しやうといふ積りで、閱兵式が絶えず行なはれ、そして、褒美が分配された。

皇帝は街々を乗り廻つて、住民を面白がらせた。そして、國事で絶えず心を占領されて居たのに拘らず、自分の命令で起した劇場へ親臨んだ。

又、慈善事業——征服者の榮冠中での最も美しい寶石——に關しても、ナポレオンは、彼の権内で能き有ゆることを爲た。

慈善事業の建物には、『我母之家』といふ銘を掲げさせるやうに命じた。即ち、それに依つて君主としての壯大なる徳へ持つて行つて、如何にも殊勝な孝心の情緒を合一させたのであつた。

彼は、孤兒院——ヴォスピタアテルニイ・ドム——を見舞つた。そして、彼が救つた孤兒等に自分の白い手に接吻させながら、ツウトルミンと優渥な物語を爲た。

それから、ティエールが雄辯に物語つて居る通りに、彼は、自分の偽造した賈の露西亞の紙幣で、兵士等の給料を分配させることを、命じた——

『彼及び佛蘭西軍に應適しき行爲に依つて、これ等の方法の効力を援助して、彼は、火災の

爲めに損害を受けたる徒輩に對して救助を分配せしめた。けれども、糧食は、大部分敵であつたところの外國人に與ふるには餘り貴重であつたので、ナポレオンは、外より彼等に物が供給され得るやうにと、金錢を彼等に供給することに爲た。そして、彼等の間へ紙幣の留を分配させるやうに命じた』

軍の中に規律を維持する目的で、命令が、軍務の怠慢を嚴重に罰する爲め、及び、劫掠を止める爲めに、絶えず出されて居た。

(十)

が、不思議なことには、斯ういふ一切の處置、斯ういふ努力、斯ういふ方略は、それまでの同なじやうな場合にやつたものと寸毫も劣つたものでは無かつたに拘はらず、事件の根底に更に觸れ得無かつた。それ等のものは、機械から離された時計の字板の上の針のやうに、齒車には掛らずに、當ても無しに、不規則に廻つて居たのだ。

戰役方略、即ち、所謂天才の爲事——それに就ては、ティエールが、ナポレオンの天才は、

未だ嘗て、それよりも甚深な、それよりも巧妙な、それよりも賞嘆すべき、何物をも爲無かつたのだと云ひ、又、モシウ・ファンと激烈な論戦をやつた際には、天才のこの爲事の構成は、十月の四日では無く、十五日のたと見無ければ不可ぬといふことを、證明したのだが——その方略は、一度も實行され無かつたし、又、實行し得られるものでも無かつたのだ。何故だと云へば、それは、當時の状態の實際の事實と何等共通の點が無かつたからなのだ。

内廊の設堡を爲るのには、回教寺（ナポレオンは、ヴァシイリ・ブラジエンニイをさう呼んだのだ）を是非とも取り崩さなければなら無かつたのだが、その築城は全く無益なものであつた。内廊に地雷装置を爲ることは、唯だナポレオン一個の希望を實行するだけの用しきやし無かつた。ナポレオンは、自分が轉んで身體を痛くした床を打つ小兒のやうに、内廊を爆裂させると、莫斯科を去る時に命じたのだ。

ナポレオンが非常に重く見て居た露西亞軍を追撃することは、未聞の結果に立ち到つた。佛蘭西の將軍たちは、六萬の露西亞軍を見失つて了まつたのだ。そして、それが失した留針でもあるかのやうに、六萬の軍を艱然見出し得たのは、ミテアの熟練と、又、何うもその天才との、お蔭だといふのである——ティエールの言辭に従へば。

外交の方面では、ツウトルミン並にヤコヴレフ（後者は重に自分の着る大外套の工面や、旅行に對する車馬を得ることに心を注いで居た）に對してナポレオンが爲つた寛大と公平の一切の説明は、何の効も無いことに爲つた。

アレクサンドルは、さういふ使者等を受け付け無かつた。そして、その使者等が齎した使命に對して何の返答も爲無かつた。

法の方面、治安の方面では、放火犯だと想像された者どもが處刑された後で、莫斯科の餘の半分が焼けて了まつた。

市會の開設が、掠奪を防ぎ得無かつた、そして、誰の益にも爲ら無つた。唯だ、その議員になつた數人が、秩序を保つといふ辭柄の下に、各自勝手に莫斯科を掠奪するとか、或は、各自の財産の掠奪を免がれるとか、であつたばかりであつた。

宗教の方面では、埃及では、問題が、ナポレオンが回教寺を訪問したことのみで、解決されたのであつたが、それが此所では、同なじ處置が、更に何の結果にも達し無かつた。莫斯科で見付けられた二三人の僧は、ナポレオンの望みを實行しやうと爲たには爲た。が、そのうちの一人は、禮拜式をやつて居る最中に、佛蘭西の兵卒に顔を殴りつけられた。それで、今一人に

對しては、次のやうな報告が佛蘭西の官吏から出た――

「私が、見付けて、祈禱を云ふことを開始する爲めに伴つて来た僧は、寺院を掃除して閉めて了まつた。夜になると、彼等は再、内部へ侵入する爲めにやつて来て、錠を破毀し、書籍を破ぶり、その他の亂暴を爲た」

商業の奨励の方はといふと、「勤勉なる職人及び農民」に對する布告には、更に何の答も無かつた。勤勉なる職人は、莫斯科には最早一人も無かつた。農民は、その布告を携つて市から餘り遠方へ出過ぎるやうなことを爲た使者等を襲つて、それを殺した。

演劇で、人民や、兵士を樂ませやうといふ企畫も同じく不成功であつた。内廊やボズニヤアコフの邸でやり出した演劇は、再直きに止まつて了まつた。それは、俳優や女優がその衣装、所有物等を、兵卒等の爲めに、奪はれて了まつたからであつた。

慈善事業さへ、所期の結果を齎さ無かつた。莫斯科は眞實ともに紙幣が非常に多かつたで、札は少しも價が無かつた。分捕品を貯へて居る佛蘭西人は、唯だ黄金ばかり奪つて行つた。ナポレオンが彼れ程惜し氣無く不幸な者等に遣つた賈札は、何の價も無かつた。それから、銀さへ、黄金に比べてその標準價以下に下落した。

が、官憲がやつた總ての努力の無効力であつたことを見せる最も著しき實例は、掠奪を止め、規律を維持しやうとするナポレオンの盡力の無益であつたことなのだ。

軍事の方の官憲からは、斯ういふ報告が出た――

「掠奪は、それを止めろといふ命令に拘らず、市で依然行はれて居る。秩序は未だ恢復されぬ。そして、正當な風で商賣を營む商人が一人も居無い。けれども、酒保等が、掠奪の獲得を賣るやうなことを爲て居る」

「私の管區の一部は、第三軍團の兵士の掠奪の犠牲に始終爲つて居る、その兵士等は、地下室へ逃げ込んで暮して居る極くくの貧民等から、彼等の僅に残して居る物を強奪するばかりに満足せずに、私が目撃した五六の實例に依れば、彼等を劍で斬るまでの獐猛の行爲をすらし居る」

「別事無し、唯だ、兵等は盜取と掠奪に耽り居るのみ。十月九日」

「盜取と掠奪は依然行はれて居る。吾等の管區には強盜の一隊横行す、これを捕縛するには、強き番兵を要す。十月十一日」

「皇帝は、掠奪を止めよといふ命令に拘らず、近衛より出でたる掠奪者の隊が、絶えず内廓へ来りつゝあるのを、非常に怒り居らる。古親兵衛では、無秩序と掠奪とが、昨夜より本日に掛けて、益々烈しくなつて居る。皇帝は、陛下御自身を守護する爲めの、他の模範となるべき筈の選抜兵が、軍の爲めに設けてある地下室や、貯蔵所へ亂入する程までに規律を失つて了まつたことを、遺憾とせられて居る。他の諸兵は、哨兵及びその將校の命を聴かず、彼を罵しり、彼等を毆打するまでに、墮落して了まつた」

「式部長官は、禁止の旨の繰り返して達せられたのに拘らず、兵士等が、依然、何處の前庭でも、而かも、皇帝のお居室の窓の前でさへ、喧しく騒いで居ることに、甚どく困却して居る」

軍は、野性に立ち戻つた家畜の群のやうになり、そして、飢餓から自分等を助け得る糧秣を蹂躪つて、散々になりだし、莫斯科に居るうちに、毎日々々自分等の破滅へと近づきつゝあつた。

が、軍は動か無かつた。

それは、スモレンスク海道で、輜重の奪られたこと、タルティノオの戦とで、狼狽的な

恐怖に襲れるといふと、始めて駆け出し始めたのだ。

タルティノオの戦の報知は、閔兵の最中に於て、思ひも掛けず、ナポレオンに達した。そして、彼の心に——ティエールの、吾々に告げる所では——露西亞人を罰しやうといふ意志を喚び起した、で、彼は、全軍がやれと騒ぎ立て、居た處分を執れといふ命令を下した。

莫斯科からの逃走に於て、兵卒等は、彼等が集めて居た總ての掠奪物を携つて行つた。

ナポレオンさへ、彼自身の寶を携つて行つた。軍の掠奪物を積んだ荷馬車の大きい列を見て、ナポレオンは驚いた(さうティエールは吾々に告げて居る)が、彼の軍事上の経験に依つて、彼は、莫斯科への途中で或る元帥の荷物を焼たやうには、物品を積んだ總ての不必要な荷馬車を焼くことを命じはし無かつた。彼は、兵卒等の一杯乗つたさういふ荷馬車及び乗用馬車を眺めた。そして、それは結構であつて、さういふ乗り物は、糧食や、病人や、負傷者等に役に立つやうになるだらうと云つた。

軍の陥つて居た窮境は、自分の死ぬる時が近よつて居るのを感じて、自分が何を爲て居るのか解らずに居る負傷の獸の窮境であつたのだ。

莫斯科へ入つた時から、その軍の破滅の時に至るまでの、ナポレオンの複雑なる運動と方略

を研究することは、致命傷を受けた獣の死際の奮闘ともがきとを見て居るのに餘程似て居る。負傷の獣は屢く、そよぎを聞くと、獵人の弾に出會うやうに突進し、前方へ駆け、又後へ戻り、そして、我からと自分の最期を速める。

ナポレオンは、彼の軍の要求の下に、それと同一じやうなことを爲た。

タルティノオの戦の風説で狼狽させられて、野獸のやうに、軍は、彈の方へと突進し、獵人に達し、そして、再駆け返つた、で、到頭、有らゆる野獸のするやうに、自分に取つては一番悪い、一番不幸な路であつた前から慣れて居た路を執つたのだ。

吾々から見れば、斯ういふ總ての運動に於ける統率者としてのナポレオンは、船の進路を導びく力があるのだと、野蠻人が思ふ船首の木像と同一じなのだ。總て斯の時分の活動に於けるナポレオンは、馬車の裡に乗つて居て、その内にある紐を引張るのみで居ながら、それで、自分がその馬車を駆けさせて居るのだと想像する小兒と同一じであつたのだ。

(十一)

十月の六日の朝早く、ビエールは、小舎の外へ出た、それから、再返つて、戸口に立つて、

長い彎脚の、紫が、つた鼠色の犬の、自分の周圍に飛び跳ねて居るのを、相手にして居た。

この犬は、俘虜等のその小舎に居て、カラタアエフの傍に寝るのであつたが、それでも、時には、自分で町へ行つて、再歸つて來るのであつた。

それは、誰の犬でも無いしあつた。今は飼主も無く、名も無かつた。佛蘭西人はそれをアゾールと呼んだ、物語をするのが好きであつた兵卒は、それをフェムガルカと呼んだ、カラタアエフは、それを『鼠色』と呼んだり、『跳ね者』と呼んだりした。

飼主の無いことも、名の無いことにも、何種とも云ひやうの無いことにも、いや、その外極まつた色の無いことにさへも、紫が、つた鼠色の犬は更に困まつては居無かつた。その綿毛の後尾は、飾羽毛のやうに、圓くツツと立つて居た、その彎つた脚は、實に善く利いて、度度、四脚で歩くのを嫌ひでするかやうに、形好く後脚一本で立つて、三本脚だけで、極く速く、巧く駆けるのであつた。何様な物でも、彼に取つては、満足の源であつた。或る時は、嬉しがつて吠え、その次には、夢みるやうな、考へ込んだ態で、日向ぼつこを爲し、又その次ぎには、木の切や、葉を玩にして、跳り廻るのであつた。

ビエールの服装は、今は、彼の前からの服装のなかの唯だ一つの残り物であるところの汚れ

た襦袢になつた襦袢や、裾の所をばカタタアエフの勸言で脚首の周囲へ紐で縛り付けた兵卒の下袴や、農夫の大外套や、農夫の帽子から、成り立つて居た。

外形的には、ビエールは此時分の中に、甚く變はつて了まつた。彼は、ベズウホフ家の者の特質である所のガツリしたごと、力の強いことの様子は依然持つて居たが、最早肥つて居るやうには見え無かつた。彼の顔の下の部分には、口鬚や、顎髯が一杯生えて居た。虱のうちやうちや生いて居た彼の長いもつれた髪は、額の上で、捲髪の編んだ蘆を成して居た。彼の眼には、これ迄ビエールの顔では決して見られ無かつたやうな、確乎したこと、落着と、少しも油断せぬ様子が表はれて居た。それ迄は彼の眼の裡にさへ表はれて居た彼のグズグズした態は、全然、今は、直ぐ實行や、抵抗に取りかゝらうといふ力強い、勢込んだ様子に變つて了まつた。彼の足は跣であつた。

ビエールは、その朝荷馬車や、馬上の人々などの通つて居る牧場を見渡し、それから、河の、彼方の遠くの方を見、それから、本気で彼に噛み付かうとするかのやうにして居る犬を見、それから又、自分の跣の足を見た。所で、その足をば、彼は、汚れた、厚い大きい足指を動かしながら、嬉しさうに、互ひちがひに踏み代へて居たのであつた。で、彼が自分の跣の足を見る

度毎に、熱心な満足の微笑が、彼の顔の面をチラ／＼通つた。さういふ跣の足を見るといふと、彼の心には、彼がその頃遭遇つて知つた總ての事柄が、憶ひ起されるのであつた。そして、その考案が、彼に取つては、非常に好い心持であつた。

天氣は、その五六日といふもの、朝薄い霜が降りて居たのみで、静で、麗かであつた——即ち、「祖母さんの夏」なるものであつた。

戸外でも、日向は暖であつた。そして、その暖さは、朝の霜の身體を引き締めるやうな清爽さが未だ空氣の裡に残つて居るので、殊に好い心持であつた。

何物の上にも、近い、遠い、總ての物の上に、秋のその時分が無ければ何うしても見られ無い彼の魔術的な、水晶のやうに澄み渡つた麗かさが横たはつて居た。遠方には、雀丘が、村や、寺や、大きい白い家と共に、見えて居た。それから、葉の無い樹々や、砂や、石や、家の屋根や、寺の青い塔や、遠方の白い家の角などが、悉皆、澄み渡つた空氣の裡で、不思議な程瞭然とした非常に精妙な輪廓で浮き出て居た。

直ぐ傍に、佛蘭西の兵卒等に占領されて居た半焼の邸の見慣れた破れかゝりがあつて、その柵の傍に未だ濃緑のライラックの灌木叢があつた。所が、天氣の悪い時には、甚く心持悪く

見えたこの焼け焦げた、破れかゝつた家が、今は、澄み渡つた静な麗かさの裡では、人の心を慰め落ち着かせるやうな小奇麗な風を持つて居た。

喫煙帽を着、樂々と上衣の釦を外して、短い煙管を啣へた佛蘭西の伍長が、小舎の角から出て来て、親し氣な胸を爲て、ビエールへと近寄つて来た。

「好い天氣だね、もし、モシユウ・キリイル？」(ビエールのことをば、佛蘭西の兵卒等は誰も、斯う呼んで居たのだ)。「宛然春のやうだね」

で、伍長は戸に凭かゝつて、ビエールに自分の煙管をさし出した、彼は何時でもビエールに向つて左様するのであつたが、ビエールは何時でもそれを斷つたのだ。

「斯様な天氣に行軍するのだつたら」と、伍長は云ひ始めた。

ビエールは、伍長が佛蘭西人の出發に就て何ういふことを聞いて居るのか、それを尋ねた。すると、伍長は、殆ど軍隊全部が、出發しかけて居て、この日に、俘虜に關する命令が出る筈であるといふことを、ビエールに話した。

ビエールが居る小舎では、ソコロフといふ露西亞兵の一人が、危篤であつた。で、ビエールは、その兵卒に對して何とか爲て遣るべきであることを、伍長に話した。

伍長は、左様いふ病者に對しては、行旅的の病院もあれば、駐定的病院もあつて、實際、何ういふ場合に對しても、當局ではその備が爲てあるのだから、安心して居るやうにと、ビエールに話した。

「それに、モシユウ・キリイル、貴下は、大尉に一語話なさりやア宜いんだ、ね。え、彼の人は、決して何様なことでも忘れ無い人なんですからね。巡回して来た時に、大尉にお話しなさい、左様すりやア、彼の人が貴下の爲めに、何でも爲て呉れませアね」

伍長が云つたその大尉といふのは、屢々何時もビエールと長談話を爲るのであつて、ビエールの爲めに、種々親切に爲て居たのであつた。

「何うだ、サン・トマス」と、彼の人は、先日私に云ひましたね、「キリイルは、佛蘭西語の話せる教育のある男なんだ、彼の男は、露西亞の貴族でありながら、今は彼様な災難にかゝつて居るんだ、けれども、彼の男は眞正に男なんだ。だから、彼の男は解つて居る……何か欲しい物があるやうならば、それを聞いて呉れ、何でもやつてやるからな。誰でも學問を爲た者は、教育を好くんだ。ね、身分の良い人々を好くものなんだ」と、斯う云つたんです。私は、貴下の益になるやうにとこの話を爲るんですせ、モシユウ・キリイル。先日の彼の一件の時、貴下が

居なさら無かつたら、随分甚い事になつたらうと思つて居ます」

(伍長は、二三日前にあつた露西亞の俘虜と佛蘭西の兵卒等との喧嘩のことを云つて居たのだ、その時には、ビエールが自分の朋輩を静めたのであつた)。それからもう少時饒舌つて居てから、伍長は去つて了まつた。

俘虜のうちの五六人が、ビエールが伍長と話して居るのを聞いて居た、で、彼等は、伍長が何を云つて居たのか尋く爲めに、直ぐやつて來た。ビエールが、莫斯科からの出發に就ての伍長の物語を、朋輩に話して居るうちに、瘡せた、顔の蒼い、襤褸の服の佛蘭西の兵卒が、小舎の戸口へとやつて來た。

敬禮するやうな風で、耻しさうな、速い手付で、彼は額へ指を着け、そして、ビエールに向つて、自分の襯衣をこしらへて呉れて居るブラトオシといふ兵卒が、その小舎に居るか、尋いた。

佛蘭西の兵卒等は、一週間に、麻布と皮を渡された、で、自分等の靴や襯衣をこしらへて呉れるやうにと、材料を露西亞の俘虜に渡したのであつた。

「出來てる、若い者、出來てる」と、カラタアエフは、云つて、丁寧に疊んである襯衣を携

つて出て來た。

熱くもあつたし、又働き易くする爲めもあつて、カラタアエフは下袴と、地のやうに黒いぼろぼろの襯衣との外、何にも着て居無かつた。彼は、職人が爲るやうに、髪の周圍へ木皮の細い片を結んで居た。そして、圓い顔がますます圓く、ますます機嫌好ささうに見えた。

「約束を違へ無いことが、良い商賣の兄弟だ。私は金曜日には出來ると云つた、で、私は、その通りやつて置いた」と、ブラアトンは云つて、微笑みながら、自分がこしらへて置いた襯衣を廣げた。

佛蘭西人は、不安さうに四邊を見た、そして、幾らかの躊躇に打勝つて居るかのやうに、手早く制服を脱いで、襯衣を着た。彼は、制服の下には襯衣を着ては居無かつた。唯だ、彼の裸の、黄色い、瘡せた肌へ直接に、長い、脂染みた、花模様様の絹の直衣を着て居たのみであつた。

佛蘭西人は、自分を見て居る俘虜等が、自分を笑ひはしまいかと虞れて居たらしかつた、で、彼は、大急ぎで、襯衣の裡へ頭を入れた。俘虜は誰一人として何とも云は無かつた。

「全く、キツチリ適ふね」と、ブラアトンは言葉を挾れて、襯衣を引き下した。佛蘭西人は、頭と腕を通してから後で、襯衣を見下し、そして、眼を擧げずに、縫ひ目を調べた。

「ねえ、若い衆、此所は裁縫師では無いんだ。ねえ、だから、チャンとした裁縫道具も無いんだ、チャンとした道具が無ければ、正式には虱も殺せ無いと、云ふぢやア無いかね」と、カラタアエフは、云つて、依然、自分のこしらへた物を賞で、見て居た。

「結構だ、有り難う、だが、布が幾許か残つて居たらう……」と、佛蘭西人が云つた。

「お前さんの身體に馴れ、ばますく心持好くなる」と、カラタアエフは、依然、自分の作品を賞でながら、云つた。「さア、お前さんは、心持が好からう」

「有り難う、有り難う、老爺さん、でも残餘は……？」と、佛蘭西人は、紙幣をカラタアエフに渡して、云つた。「残つてる布片をお呉れよ」

ビエールは、ブラアトンには、佛蘭西人の云つて居る事を解しやうと爲る氣の無かつたことを見た。で、彼は、語を挾れずに傍觀して居た。カラタアエフは、一留に對して、佛蘭西人に禮を云つた。そして、依然自分の作品を賞で、居た。佛蘭西人は、依然、残つて居る物を呉れと言ひ張つた。そして、自分の云つたことを通譯して呉れと、ビエールに頼んだ。

「布片を何うしやうといふんだらう？」と、カラタアエフが、云つた。「俺には、立派な脚絆が出来るんだがなア。うゝん、爲方が無い、持つてけ」

で、急に、銷沈つて、陰氣になつて、カラタアエフは懐から残り布の束を取り出し、そして、それを、先方の顔を見ずに、佛蘭西人に渡した。「あゝあ」と、彼は叫んだ、そして、歩み去つた。

佛蘭西人は、麻の布を見た、彼は躊躇し、ビエールを尋くやうに見、そして、ビエールの眼が彼に何事かを告げたかのやうに――

「おい、ブラトオシ」と、彼は、不意に赤くなつて、甲走つた聲で叫んだ。「これを取つて置けよ」と、彼は云つた、そして、ブラアトンに残り布を渡して、向き返つて、出て去つた。

「おい、何うだ」と、カラタアエフは、云つて、頭を振つた。「人はよく奴等は基督教徒で無いと云ふんだが、奴等だつて靈魂はあるんだ。老人たちの屢く云つたことは眞實だなア、汗を出して居る手は、物を惜まぬ手だが、汗の出無い手は、握つた拳だといふのは、彼の男は自分の背部が裸であるのに、それでも、俺にこれを呉れたんだ」カラタアエフは、一寸と止まつて、夢みるやうに微笑んで、麻布の小片を見て居た。

「だが、これで、俺には上等な脚絆が出来らア、お前」と、彼は、小舎へ引返しながら、云ひ足した。

(十二)

ビエールが捕虜になつてから、最早四週間経つた。佛蘭西人たちは、普通の俘虜の小舎から將校の小舎へ移してやらうと云ふのであつたけれども、ビエールは、それを断つて、依然最初通り小舎に残つて居た。

火事と掠奪とで荒されて了まつた莫斯科で、ビエールは、人間が堪え得る缺乏の殆ど最極限までの困苦を経た。けれども、彼の身體の非常に健全であつたこと、體格の好かつたこと、(彼は、その時までは、さういふ事には寸毫も氣が付かずに居たのだ)のお陰で、それから又、尙一層、さういふ缺乏が、何時始まつたのだとは何うしても云ひ得無い程徐々と彼の上へ來たといふ事實の爲めに、彼は、平氣なばかりでは無く、尙又全く嬉しい心持で、自分の位地に堪え得たのだ。

で、彼が、それを得やうと思つて幾ら努めても駄目であつたその平和と、自分に對する満足とを得ることができたのは、全くこの時であつた。彼の生涯の長い年の間、彼は、自分がポロディノオでの兵卒等の間でそれを見て驚かされたやうなその平和、その自分との調和をば、さで、彼が、それを得やうと思つて幾ら努めても駄目であつたその平和と、自分に對する満足とを得ることができたのは、全くこの時であつた。彼の生涯の長い年の間、彼は、自分がポロディノオでの兵卒等の間でそれを見て驚かされたやうなその平和、その自分との調和をば、さまざまな方面に索めたのであつた。彼は、それをば、慈善事業の裡に索めた。共済組合の裡に索めた、交際社會の遊蕩の裡に索めた、酒の裡に索めた、自己を犠牲にする勇者の働きの裡に索めた、ナタアシヤに對するロオマンティックな戀愛の裡に索めた、彼は、それをば、思想の路に依つて索めたのであつた。が、彼の總ての探究、總ての努力が悉く無効であつたのだ。

所が、今は、自分自身の方では何の考想も無くして、彼は、その平和と、自分との調和とをば、唯だ、死の恐怖のお陰で、困苦のお陰で、それから、彼がカラタアエフのうちで見た事のお陰で、得たのだ。

彼が處刑の間経た彼の恐しい刹那が、云はば、嘗ては彼に取つて非常に重要な物に見えて居た心を亂す思想や感情をば、彼の想像及び記憶の裡から、常に洗ひ去つて了まつたのだ。露西亞に就ても、戦争に就いても、政治に就ても、ナポレオンに就ても、何の考想も彼には起ら無かつた。總てさういふ物は、自分には何の交渉の無い物であつて、自分は、總てさういふ物を判断する義務は無いのだから、それを判断することが能き無いのだといふことが、如何にも當然なこと、彼には思はれた。

『露西亞と夏とは、何うしても仲好く能きぬ』

彼は、カタタアエフのその言辭を繰り返した、そして、その言辭が不思議な風に彼の心を慰めた。

ナボレオンを殺さうといふ彼の計畫や、密教的の数の計算や、黙示録の獸の計算などが、今は、不意に、全く解し難い、全く可笑しいものに思はれた。妻に對する彼の憤怒や、自分の名が妻の爲めに汚されては大變だといふ恐怖などは、彼に取つては、實に下ら無いことで、可笑しいことのやうに思はれた。その女が自分を離れて何處かでその女自身の趣味に適ふやうな生活を爲て居たところで、それが自分に何の關する所があらう？ 佛蘭西人等が、彼等の俘虜の名が伯爵ベズウホフであることを發見しやうが、しまいが、それが、誰に取つても——殊に、彼に取つては——何であらう？

ビエールは、今、公爵アンドレーと談したことを度々考へた、そして、彼は、その談話に少し異つた解釋を加へて居たけれども、その朋友の言語を全く道理だと思つたのであつた。

公爵アンドレーは、幸福といふものは消極的なものだ、と云ひもし、又さう思つて居た、が、彼は、絶望した様子と、皮肉な態とで、それを云つたのであつた。それは、宛然、彼はさう云つて居ながら、反つて、今一つ他の考想——即ち、積極的な幸福を得やうとする吾々の總

ての努力は、吾々には生れながらにしてあるもののだが、それは悉く吾々を苦しめ惱ます爲めにのみ吾々に與へられて居るのだといふ考想——を、云つて居るかのやうであつたのだ。

が、ビエールは、さういふ下流になつて居る感情には氣が付かずに、表面の考想が眞理であることを認めたのだ。苦みの無いことや、缺乏を満たすことや、それに續いて、爲事を選ぶ自由、即ち、生活の方法を選ぶ自由を有することなどが、ビエールには、人間の最高の、そして、最も確かな幸福だと思はれたのだ。

此の場所で、そして、今、生涯始めて、ビエールは、自分が飢て居る時に食ふことの樂、渴して居る時に飲む樂、眠い時に眠る樂、寒い時に暖になる樂、人と話を爲たり、人の聲を聞き度く思ふ時に人間と話を爲る樂を、十分に認めたのだ。自分の缺乏を満たすこと——即ち、良い食物や、清潔や、自由——は、自分が今さういふ物を奪れて居て見ると、ビエールには、全くの幸福のやうに思はれた。そして、爲事を選ぶ自由、即ち、生活の爲事を選ぶ自由は、その選擇の自由がそれ程制限されて居て見れば、彼に取つて非常に容易な事柄であるやうに思はれた。即ち、彼がさう思つたが爲めに、人生に於ける種々な便利な物の餘分にあることは、物質的缺乏を満たすことから得られる總ての幸福を無くしてしまふものであるのと共に、爲事を選

擇する自由の多いこと、即ち、教育や、富や、社會上の位置が自分に與へるその自由の多いことは、爲事の選擇をば非常に難しいものにして、爲事を得やうといふ願望その者をさへ無くならせ、爲事の有り得るといふ事をも無くならせて了まうものだといふことを、彼は忘れた程であつた。

ビエールの總ての夢は、今は、彼が俘虜の境遇から釋放される時の方へと向いて居た。が、それでも、後年には始終、ビエールは、拘禁されて居たその一月のことや、決して又と再び感じるこの能き無かつたそれ等の甚深な、嬉しい感覺のことや、殊に、その十分な精神的平和のことや、彼がその時分になつて始めて経験したその完全な心内の自由のことなどをば、熱心に話したのであつた。

最初の日に、朝早く起きて、小舎から、薄明の裡へと出て来て、暗い裡に静に立つて居る聖母の新修道院の圓屋蓋や、十字架を見、長い草の上に下りて居る白い霜を見、雀の丘の坂を見、紫の遠方へ消へて行つて居る曲りくねつた川の木の茂つた岸を見た時に、それから、彼が新鮮な空氣との接觸を感じ、莫斯科から野を横断つて飛んで行く自嘴鴉の羽音を聞いた時に、それから又、光の閃きが東から不意に輝き出、そして、太陽の縁が雲の蔭から勢よく浮び

出て、圓屋蓋や、十字架や、白霜や、地平線や、川が、喜ばしさうな光で、キラ／＼した時に、ビエールは、彼がそれ迄は一度も経験したことの無いやうな、人生に於ける喜悅と強さの新たな感を感じたのであつた。

で、その感は、彼の拘禁の全期間彼を離れ無かつたのみならず、反つて、彼の位地の苦しみが増すに随つて、彼の心の裡でますます發達して行つたのであつた。

その感——即ち、何事をも直ちに爲し得る感、精神的敏速の感——が、彼が小舎へ入つてから直ぐに、彼の朋輩等から非常に尊敬されたが爲めに、ビエールの心の裡で、強められたのだ。外國語を彼が知つて居ることや、佛蘭西人から彼が尊敬を表されることや、請はれる物は何でも他人に遣る彼の人の好いことや、(彼は、俘虜の中の將校に與へられる一週三留の手當を貰つて居たのだ)、それから、壁へ釘を打ち込むので示した彼の力の強さや、朋輩に對する彼の舉作の溫和なことや、何にも爲すに、ピリツとも動かすに坐つて、考慮に沈んで居る——朋輩等には實に不可思議に見えたところの——彼の能力、總てさういふ事が、彼をば、自分等よりも莫然高い階級のなか／＼不思議な人間なのだ、兵卒等に思はせたのであつた。

彼が往時生活して居た社會では、煩悶の源では無いにしても、當惑の源であつたその性質——

「即ち、彼の力や、人生の便利な物に對する彼の侮蔑や、彼の放心や、彼の人の好いこと——さへ、此所では、斯ういふ人々の間では、殆ど勇者のやうな主權をば、彼に與へた。ビエールは、自分がさう見られて居るが爲めに、自分にはそれに對する義務が生じたことを、感じた。」

(十三)

十月六日の夜、退却する佛蘭西軍の行進が始まつた。炊事場や、假小舎が取り崩され、荷馬車に荷物が捆げられ、そして、軍隊や、輜重の列が動き始めた。

朝の七時に、軍帽を着、銃を持ち、背囊を負ひ、大きい袋を携つた行軍状態の佛蘭西兵の護送隊が、小舎の前に立つた。そして、怒號り聲の混つた熱心な佛蘭西語の談話の盛な交換が、隊列中に亘つて續けられて居た。

小舎の裡では、人々は、衣服を着、帯を占め、靴を穿いて、全然支度を爲て、唯だ號令のかかるのを待つて居るばかりであつた。

顔の蒼い、瘡せた、眼の周圍に青い圈の出來て居る病兵のソコオロフは、靴も穿かず、戶外衣も無しで、彼の居場所に一人で坐つて居た。顔の瘡て居るが爲めに、飛び出して居るやうに

見えた彼の眼は、彼などには一向構ひ付けずに居る彼の朋輩たちをば、尋くやうに見詰めて居た。そして、規則正しい間を置いて、低い呻吟聲を出して居た。彼がさう呻いたのは、確に、病苦——彼は痲痺で惱んで居た——の爲めといふよりは、寧ろ、捨て、行かれる恐怖と悲痛との爲めであつたのらしかつた。

ビエールは、上靴を穿いて居たが、それは、カラタアエフが、佛蘭西人が自分の長靴の底にして呉れろと云つて、彼の所へ持つて來た茶箱の皮蓋から、ビエールの爲めに造つて呉れたのであつた。帯の代りに紐で胸を結めたといふ態で、ビエールは病兵の所へ行つた。そして、その傍に蹲んだ。

「さア、ソコオロフ、衆皆去つて了まうのぢやア無いぢやア無いか。此所に病院があるんだ。吾々よりか、お前の方が、必定、宜いことになるだらうからね」と、ビエールは云つた。

「あゝあ。私はそれぢやア死んぢまうんだね。あゝあ」と、兵卒は一層高い聲で呻いた。

「いや、今直ぐ今一度尋いてやるから」と、ビエールは云つた、そして、起つて、小舎の戸口へ行つた。

ビエールが戸口へと向つて居るうちに、前の日ビエールに煙管をさし出したその同なじ伍長

が、兵卒を二人率ゐて外方から入つて来た。伍長も兵卒も、背囊を負ひ、軍帽を冠り、革紐の釦を締めて、行軍支度であつたが、それが、何時も見慣れて居る彼等の顔を異つたやうに見せた。伍長は、自分に與へられた命令に従つて、戸を閉めやうと、戸口へ来たのであつた。俘虜等を出て去かせる前に、その數を數へる筈であつた。

「伍長、病人を何うしたら宜からうかね？」と、ビエールは、云ひ始めた。が、彼は、自分がさう云つたその刹那に、それは、彼が知つて居る伍長なのか、それとも、誰か見ず知らずの人なのか、何方だかと疑つた。伍長は、その刹那には、更にその人らしい所が無かつたのだ。その上に、ビエールが物を云ひ出した途端に、太鼓の音が不意に兩側でしだした。

伍長は、ビエールの言語を聞くと顔を顰めた、そして、何だか分らぬ罵り聲を出して、戸を叩き付けるやうにドンと閉めた。

今は、小舎の裡は薄暗かつた、太鼓が兩側で、急調の點呼の調子を打ち立て、病人の呻吟が消されて了まつた。

「また彼物が来た……また彼物だな……」と、ビエールは一人云つた、そして、我にもあらぬ戦慄が背部を走り降つた。

伍長の變つた顔のうちに、彼の聲の響のうちに、太鼓の人の心を刺戟する、耳を聳する音のうちに、ビエールは、人間をば、その意志に反して、同人類を殺させるやうにさせる所のその神秘的な無同情の力を認めた。ビエールは、その力の効果をば、前の處刑の時に見たのであつた。その力を恐れ、その力を避けやうと爲ることや、その力の道具となつて居る人々に向つて懇願や説得で訴へることは、全く無益なことであつた。

それをビエールは今知つた。唯だ、辛抱して待つて居るより他爲方が無いのであつた。

ビエールは、それからは、病人の所へ行か無かつた。彼はその方を見返ら無かつた。彼は、黙まつて、顔を顰めて、戸口に立つて居た。

小舎の戸が開けられて、俘虜等が羊の群のやうに相互に犇と團まつて、入口で群れて居た時に、ビエールはその間を推し分けて、眞先に出て、伍長の話では、ビエールの爲めなら何様なことでも爲て呉れるといふのであつたその大尉の傍へ行つた。

大尉は、行軍支度であつた、そして、その顔からも又、ビエールが伍長の言語のうちや、太鼓の音のうちで認めたその同な「彼物」が覗き出して居た。

「行け、行け」と、大尉は、酷しさうに顔を顰め、そして、身邊に群れて居る俘虜等を見な

がら、云つて居た。

ビエールは、自分の骨折は無益であらうと知つて居た。が、それでも、彼は大尉の傍へ行つた。

「え、何だ？」と、將校は云つて、ビエールをばその人を認め無いかのやうに冷然としてツクツク見た。ビエールは病氣の俘虜のことを話した。

「歩いたら宜いんだ、箆棒な奴だな」と、將校は云つた。

「行け、行け」と、彼は、ビエールを見ずに、依然云つて居た。

「いや、彼者は苦しんで居る……」と、ビエールは、云ひ始めた。

「黙まれ……」と、大尉は、意地悪るさうに、顔を顰めて、怒號つた。

「ツラム……ダ……ダ……ダ……ダ……ダ……ダ……ダ……」と、太鼓が鳴つた。と、ビエールは、その不可思議な力が最早それ等の人々の心を全く占領してしまつたことを知り、そして、その上何を云つたつて最早無効だといふことを知つた。

俘虜の間の將校等は兵卒等から分けられた、そして、先頭を進むやうに命せられた。

將校の数は——その中にビエールをも加へて——三十人であつた。兵卒は三百人であつた。

他の小舎々々から出て來た將校等は、衆皆ビエールには見ず知らずの人々であつた。そして、彼等はビエールより莫然良い服装であつた。彼等は、異様な脚絆を穿いて居るビエールを、蔑視すやうな、疑うやうな眼で、見て居た。

ビエールから餘まり離れて居無い所を、肥つた、蒼い、短氣さうな顔容の少佐が歩いて居た。その男は、亞麻の帯布を帯にして、カザン長上衣を着て居て、朋輩の俘虜たちから誰からも尊敬されて居るらしかつた。彼は、懐へ押し込んである烟草嚢を隻手で抑へ、今一つの手では、烟管の柄を握つて居た。この少佐は、フウ／＼喘ぎながら、誰に向つても、彼に觸りもせぬのに、彼を推したと云つて、口小言を云ひ、急ぐ必要も無いのに無闇に急ぎ、何にも驚ろく程の事も無いのに驚いて居た。

今一人の、瘠た小さい將校は、誰にも話を爲かけて、自分たちが何處へ伴れて行かれるとか、その日は何處まで行くとかいふ、推量を爲て居た。

粗毛布の長靴で、兵站部員の制服を着た一人の文官は、莫斯科の火事の結果を善く見やうと彼方此方と駆け廻つて、何ういふ所が焼けたのだといふことに就て、聲高く意見を述べ、それから見えて來るに従つて、其所が市の何處だとか彼處だとか、云つて居た。

説で見ると波蘭生れらしい第三の將校は、兵站官と議論を爲て、莫斯科の種々な焼跡が何處だとか彼處だとかいふ兵站官の認定は間違が多いといふことを、兵站官に對して證明しやうと爲て居た。

「何故、議論するんだい？」と、少佐は腹立しうに云つた。「それが、聖ニコラだらうが、ズラスだらうが、何方でも構はんぢやないか。見ろ、何も彼も焼けて居るんだ、唯だそれだけぢやアないか……おい、何故左様押すんだ、路は廣いちやアないか？」と、彼は、腹立しうに後の人に向いて云つた。が、その人は唯だ少佐の後を歩いて居たのみで、寸毫も彼を押しはし無かつたのだ。

「あゝ、あゝ、あゝ、酷いことを爲やアがつたぢやアないか？」と、俘虜たちが、焼けた區域を見るといふと、諸方で叫ぶ聲々が聞えた。

「ザモスクヴォリエチエー(向ふ河岸)も、ズウボツォも、それから、内廊も……」

「見ろ、半分も残つちやア居らん」

「おい、ザモスクヴォリエチエー全體が無くなつたと君に云つたぢやアないか、見給へ、全くその通りだ」

「おい、焼けたのは分つて居るぢやアないか、では、何故、それを議論するんだ？」と、少佐が云つた。

ハモオヴニキイ(莫斯科で焼け残つた僅かな地区の一つ)の寺院の傍を通つて居るうちに、俘虜の群は、不意に片側へ推し圍まつた、そして、恐怖と厭惡の叫聲が聞こえた。

「悪黨ども。邪教徒ども。左様だ、死人だ、死人だ、左様だ……奴等は何物かで、顔を塗り汚しやがつた」

ビエールも又、さういふ叫聲を呼び起した物の有つた所の寺院へと近寄つた、と、彼は、寺院の地面の柵へ凭り掛つて居る何物かを漠乎と識別けた。彼よりも善く物が見えた彼の朋輩等の言語に依つて、彼は、それが、柵へ立つた姿勢で凭せかけてある、煤で顔を塗り汚した男の屍體であることを、知つたのだ。

「行け、やい、畜生。行け、野郎ども」……と、彼等は、護送兵等が怒號るのを聞いた、そして、佛蘭西の兵卒等は、急に腹を立て、、死人を見やうとグズついて居た俘虜等を追つ立てやうと、劍の平を用ゐた。

(十四)

ハモオヴニキイの横町をば、俘虜等は、護送隊と共に進み、護送隊の兵卒等のものであつた小荷馬車や、大荷馬車の列がその後から續いた。が、彼等が食料の店々のある所へ出て来るといふと、艱然と動いて、私有の輜重馬車と混じつて居た砲兵の長い列の真中へ何時の間にか入つて了まつて居た。

橋の所では、全群集が止まつて、最先頭の越してしまふのを待った。橋からは、俘虜等は、前面及び背後の輜重馬車の断れ目の無い列を見ることができた。

右の方、カルウガ海道がネエクウチニ園の傍を曲つて居る所では、軍隊や荷馬車の断れ目の無い列が、遠方へと伸びて居た。それは、何の隊よりも前に出發したボオアルネエの軍團であつた。

後方は、河岸に沿ひ、カアメンニイ橋を越えて、ネエの軍團の兵と輜重とが延びて居た。

俘虜等が屬して居たダヴウの兵は、クリミヤ渡頭を渡つて居て、その一部は最早カルウガ街に入つて居た。が、輜重の列は非常に長くつて、ネエの兵の前衛が最早ボルシヤアヤ・オルディ

インカから出て居るのに、ボオアルネエの軍團の最後の荷馬車は未だ莫斯科からカルウガ街へ出て居無いといふ位であつたのだ。

クリミヤ渡頭を越してから、俘虜等は二三歩づゝ動いて、直ぐ止まり、やがて又前へと動いた、そして、車や人間の群集が八方でだん／＼甚くなつて来た。橋をカルウガ街から別つて居る二三百歩の場所を通るのに一時間の餘もかゝり、それから、ザモスクヴォリエチエーの街々がかウルガ街へ合して居る所まで行つて、俘虜等は、ギッチリ止まつて居る群集の裡へ閉ぢ込められて了まつて、十字街で數時間立たされて了まつた。

八方で、海の號叫のやうな、轟く車輪や、踏む軍隊や、怒と聲高い悪口の絶間の無い叫などの、止み間の無い音がして居た。ビエールは、焼け焦げた家の壁へ押し付けられて立つて、さういふ音に聞き入つて居たが、さういふ音は、彼の想像の裡では、太鼓の音へと溶け込むのであつた。

露西亞の將校のなかの五六人が、四方をもつと善く見やうと思つて、ビエールが立つて居る傍の焼けた家の壁へかき登つた。

「混雑だな。何といふ群集だらう」……「砲へまで物を積んでるせ。見ろ、大數な毛皮ちや

「ア無いか……」と、彼等は、云つて居た。「やア、毒蟲奴等、奴等は掠奪をやつて居たんだせ」……「彼奴が後の、荷馬車の上に載せてる物を見ろよ」……「やア、彼等やア聖像だせ、實に何うも」……

「彼奴等は獨逸人に違ひ無いせ」……「や、露西亞の農夫だ、實に何うも」……

「あゝ、惡黨奴等」……「見ろ、彼の背負込んで居ることつたら、艱然動いて居るんだせ。

あ、おい、小馬車だ、彼様な物まで奪りやアがつたんだせ」……

「見ろ、彼女は箱の上に乗つて居る。何うも實に」……「や、喧嘩を始めた」……

「左様だ、左様だ、顔を殴ぐれ」……

「此様な風ぢやア夕方になら無ければ此所を出られはし無からうせ」……

「見ろ、見ろ……や、彼りやア確にナポレオンに違ひ無いせ。何うだ彼の馬どもは。組合文字と王冠が附いてるせ」……

「彼物は携帶自由な家と云つて宜い位だね」……「あ、見ろ、彼奴は囊を落として、氣が付

かずに居るせ」……

「再、喧嘩だ」……「幼兒を抱いた女だ、なか／＼別嬪だせ」……

「左様だ、何うも、お前たちを通さ無いのは此様なことの爲めなんだ」……

「見ろ、おい、間斷無しだせ、露西亞の賣女ども奴、確に左様なんだ」……

「見ろ、奴等の馬車の裡に樂々として居やがることつたら」……

再、一般の好奇心の波が、ハモオヴニキイの寺院の傍でのやうに、路の方へ俘虜等全體を前

方へと運び去つた、で、ビエールは、自分の背の高いお蔭で、他の人々の頭を越へて、俘虜等

の好奇心を引き付けた物を見た。

馬車が三輛彈藥車の間に挟まつて止まつて居た、そして、その裡に、燃え立つやうな色の服

装で飾られた、顔を赤く化粧した女が幾人か、一緒に推し詰められて坐つて居て、金切り聲で

何か叫んで居た。

ビエールが彼の不可思議な力の表現を認めた刹那から、何様な物も、彼には、異様にも、恐

しくも、見え無くなつたのだ、冗談に顔を煤で塗られて居た屍骸も、急いで行くさういふ女等

も、莫斯科の焼け跡も、彼に取つては、最早何でも無かつたのだ。ビエールが見たさういふ總

ての物は、今は、最早彼の心には何の印象も與へ無かつた——それは、宛然、彼の心が、烈し

い奮闘に對して用意されて居るが爲めに、それを弱めるやうな印象は何ういふものでも受け取

るのを拒むのであるかのやうであつた。

女どもの馬車は、傍を通り過ぎて了まつた。その後には、小荷馬車、兵卒、大荷馬車、兵卒、乗用馬車、彈藥車、それから又、兵卒、そして、時たまに女ども、といふ風に續いて来た。

ビエールは、人々を別々に見はし無かつた、彼は、唯だ全體の動きを見たのみであつた。

總てさういふ人間や馬どもは、云はゞ、或る見え無い力の爲めに追ひ立てられて居るやうであつた。ビエールが彼等を見守つて居る時の間、彼等は悉皆能きるだけ速く先方へ行かうといふ誰も彼も同なじの唯だそれだけの希欲で以つて、諸方の街から拂ひ去られて居た。彼等は悉皆、誰も同なじに、他の者の爲めに止められたので、怒つて、喧嘩を爲だしたのだ。同なじ罵言が何處でも彼處でも交換され、白い歯が燦めき、それから、睨み付ける何の顔も、その朝、太鼓が鳴つて居る間に、伍長の顔の裡でビエールを驚かした向ふ見すの決心と冷たい殘酷との同なじ様子を、帯びて居た。

護送隊の司令の將校が部下の兵を集めて、叫聲や、怒號聲で、輜重車の列の裡を無理やりに推し分けて出たのは、最早殆ど晩方になつてからであつた、で、俘虜たちは、八方を圍まれてカルウガ海道へ出て来た。

彼等は、止まらずに、非常に速く行進して、日が落ち出してから、始めて止まつた。輜重馬車は、相互に近接き合つて動いた、で、人々は夜に對する支度を爲た。誰も彼も不機嫌で不満足らしかつた。罵り聲や、怒號聲や、喧嘩が、深更まで、聞こえて居た。護送隊の後から隨いて来た一個の乗用馬車は、荷馬車の一個へ乗り掛けて、それへ車轅を突き込んで了まつた。五六人の兵卒が八方から荷馬車へと駆け付けた、或る者は、乗用馬車の馬を傍へ引き向けながらその頭を撃ち、他の者は相互に殴り合つた。そして、ビエールは、劍の平打を受けて頭に甚い傷を負つた一人の獨逸人を見た。

秋の夕方の寒い黄昏の裡で、廣々とした田舎の真中で、止まつた今、總てさういふ人々は、出發の時に彼等總てを運び去つた只管前方へ行かうといふ急ぎと熱心な衝動とから覺醒する不愉快な同なじ感情を経験しつゝあるかのやうであつた。今、止まつて了まうといふと、誰も彼も、自分等が何處へ行きつゝあるのか知ら無いといふこと、及び、その行旅には自分等に取つて、その先非常な骨折と困苦があるといふことを、覺つたやうであつた。

この駐止所で、俘虜等は、護送隊から、出發の時よりも尙一層手荒く取り扱はれた、彼等は、その時始めて馬肉を與へられた。

將校から最下級の兵卒に至るまで、護送隊の誰もの中に、俘虜のうちの誰にも對して個人的憎悪を持つて居る様子が表はれて居た。そして、その様子は、前に雙方の間に存在して居た親密な關係に對しては、著しい對照を爲して居た。

この憎悪は、俘虜の數を勘定すると、莫斯科から出る混雜の裡で、一人の露西亞兵が、痲痛に罹つたと云ひ立て、巧く逃げ遂せて了まつたことが、發見されるといふと、一層烈しくなつた。

ビエールは、路を餘り遠く離れたが爲めに一人の露西亞の兵卒を無慘に毆つて居る佛蘭西人を見た。それから、自分の朋友であつた大尉が、俘虜が逃たことに對して下士を譴責して、軍法會議へ廻すと嚇して居るのを聞いた。

その俘虜は病氣で、歩け無かつたのだと、下士が辯明するといふと、將校は、自分等に下された命令は、ぐず付いて後れる者どもは銃殺しろといふのだ、と云つた。

ビエールは、處刑の時に自分を押し潰し、それから、自分の拘禁の間は殆ど見え無くなつて居た彼の人の生命を支配する力が、今は再自分の存在を支配したことを感じた。

彼は恐れた、が、彼は、それと同時に、その定業的な力が自分を押し潰さうと骨折るに從

つて、自分の心の裡には、その力から獨立した生の力が、だん／＼生長して、力を加へて來つた。つあるのを感じた。

ビエールは、ライ麥の粉と馬肉との肉汁で晩食を終つた、そして、自分の朋輩等と少許談話を爲た。

ビエールも、朋輩のうちの誰でも、自分等が莫斯科で見た事柄や、佛蘭西人から受けた手荒い取り扱ひのことや、自分等に向つて公言された自分等を銃殺するといふ命令のことなどは一切話さ無かつた。自分等の一層銷沈した状態に反動して居るかのやうに、誰も彼も、悉皆、勢ひ好く、快活であつた。彼等は、各自の一己の追懷や、行進中に自分等が見た可笑しい事件などの話を爲て、自分等の現在の状態に言ひ及ぶことを避けて居た。

日は最早餘程前に入つて居た、星が、空の彼方此方で燦めいて居た、満月が登らうとして居た所には、地平線の上の大火のそのやうな、赤い明るみがあつた。そして、大きい赤い球が、灰色の闇の裡で異様に震えて居るやうに見えた。最早全く明るかつた。夕方は過ぎて居たが、夜はまだ始まつて居無かつたのだ。

ビエールは新たに朋輩等の傍を離れて、燎火の間を、普通の俘虜等が居ると聞いた道路の彼

方側へと、歩いて行つた。彼は、その俘虜等と談話を爲やうと思つたのだ。道路で、佛蘭西の哨兵が、ビエールを止めて、彼を後方へ歸らせた。

ビエールは、後方へは歸ら無かつた。彼の朋輩等が居た燎火の所へは歸らずに、誰も居無かつた馬の附いて居無い荷馬車へ行つた。足を身體の下へ折り込み、頭を下げて、彼は、荷馬車の輪に凭りかゝつて、冷たい地面に坐つた、そして、長い間、靜然として、考へながら、居た。

一時間餘過ぎた。誰もビエールの邪魔を爲無かつた。

不意に、彼は、肥つた、機嫌の好い、哄笑の高い聲で噴飯だした。その聲が餘り高つたので、人々が、諸方から、その不思議な、確に一人らしい哄笑声の方を、驚いて見返つた位であつた。

『は、は、は』と、ビエールは笑つた。彼は、大きい聲で獨語を云つた。「彼の兵卒が俺を通さ無かつた。奴等が俺を捉まへて——俺を拘禁した。奴等は俺を俘虜にして置くんだ。「俺」は何だらう？。俺？。俺——俺の不朽の靈魂だ。は、は、は……は、は、は……」と、彼は、涙が眼に出るまで、笑つた。

一人の男が、立ち上つて、一體何を、この奇異な大きい男が一人で笑つて居るのかと、やつて来た。ビエールは、突ふのを止めた、立ち上つて、そして、その穿鑿したがる闖入者から歩き去つて、四邊を見廻した。

パチ／＼いふ火や、人々の話す音に満ちて居たその大きい、極限の無い野營は、安眠に入つて居た。赤い燎火が低く朦朧と燃えて居た。頭上高く、澄み渡つた空には、満月が懸つて居た。それまでは野營の彼方には見られ無かつた幾つもの森や野が、今は、遠方で見えだしたり、そして、さういふ野や森の彼方に、キラ／＼した、形の變はる、人の眼を迷すやうな、際涯の無い、遠方が見えて居た。

ビエールは、空を仰ぎ、極く遠方で燦めいて居る幾個もの星を見た。

『で、俺の物である總ての物、俺のうちにある總ての物、それから、俺である所の總ての物』と、ビエールは思つた。『で、斯ういふ總ての物を奴等は捉まへて、板で圍つた小舎の裡へ閉ぢ込めたんだ』

彼は、微笑んだ、そして、朋輩等の側で眠やうと、横になつた。

(十五)

十月の初時分に、又一人の使節が、平和に對する提言と、手紙を以つて、ナポレオンの許から、クツウヅフの所へよこされた。その使節は、莫斯科から來たと云つて居たが、それは、僞言で、實際は、ナポレオンは、舊カルウガ海道でクツウヅフよりも前方に居たのであつた。クツウヅフは、この手紙に對しても、ロオリストンが持つて來た最初の手紙に對したと同様の返答を爲た、彼は、平和などは思ひも寄らぬことなのだ、云つたのであつた。

その直ぐ後で、タルティノオの左方を動いて居たドロオホフの不正規兵が、佛蘭西の軍隊がフォミンスコエに現はれたが、その隊はブルウシエーの分團であつて、それは、軍の他の部分からは離れて居るのだから、容易に全滅させ得るのだ、といふ報告をよこした。

兵卒等も、將校等も、是非戦闘を開き度いと騒ぎ立てた。タルティノオの容易な勝利で勢ひ付いて居た總司令部の將官等は、ドロオホフの意見を採用するようにと、クツウヅフに切りに勧めた。

クツウヅフは、何様な戦闘をも必要だと認め無かつた。が、何うしても避け得られ無かつた中間の方針を執つた。小さい枝隊がブルウシエーを攻撃する爲めに、フォミンスコエへ送られたのだ。

不思議な偶然の機會で、後になつて最も困難な、最も重要なものになつたこの任務が、その最も眼に立たない少い將軍のドフツウロフに命せられた。ドフツウロフのことは、これまで、戦役の方略を立て、居たとか、諸聯隊の先頭に立つて突進して居たとか、砲壘の周圍へ勳章を撒いたとか、先さう云つたやうなことを爲て居たとは、誰も云は無かつた。彼は、人々からは、決斷も洞察力も無い者のやうに云はれて居たのだ。が、實際は、アウステルリッツから、千八百十三年に至るまでの、佛蘭西人との露西亞人の諸戦に於て、吾々は、位地が最も困難であつた場所には、必らず何時でも彼が司令の位地に在るのを見るのだ。

アウステルリッツでは、總てが敗走で、破滅であつて、後衛には一人も將官で残つて居る者が無かつたのに、彼一人アウゲストの渡頭に止まつて、諸聯隊を糾合して、能き限りのものを助けたのであつた。

熱病に罹つて居ながら、彼は、ナポレオンの全軍に對して、スモレエンスクを守る爲めに、僅に二萬の兵を率ゐて、その市へと進んだ。スモレエンスクでは、熱病が非常に烈くなつて、

マラフォーフスキイ門で、眠たばかりの所で、スモレエンスクの砲撃で眼を覺まされ、そして、スモレエンスクは全一日守り遂げられた。

ポロディノオでは、バグラアチオンが殺され、我左翼の兵の十分の九が殺され、佛蘭西の全砲兵の砲火がその上へ向けられた時に、クツウゾフは、間違つて差遣した將官を急いで喚び返し、その代りに、人々からは、決断も洞察力も無いやうに云はれて居たドフツウロフその人を遣つたのだ。で、少しも誇ら無い小さいドフツウロフは其所へ行つた。すると、ポロディノオが、露西亞の軍隊の最も大なる光榮となつたのだ。で、その戦の多くの勇士は、歌や文で名高くされたのだが、ドフツウロフに就ては一言も云はれ無い。

再、ドフツウロフは、フォミンスコエへ遣られ、其所からは再、マレエ・ヤロスラアヴェツツへと遣られた。其所は、佛蘭西人との最後の戦が戦れ、そして、佛蘭西軍の最後の滅亡が實際に始まりだしたことの明瞭な場所であつたのだ。で、再、多くの勇士等や、天才の人々のことが、戦役のその時期の物語の中で話されるのだが、ドフツウロフのことは、何とも云はれ無いか、で無くも、疑はしい賛辭が唯二三言云はれるのみなのだ。ドフツウロフに就てのこの沈黙は、ドフツウロフの功績に對する最も明白な證據なのだ。

機械の働きの解ら無い人が、その機械の働いて居るのを見ろといふと、偶然にそれから落ち、或は、その中でピラ／＼廻りながら、機械の働きを邪魔するところの、削屑が、機械の最も重要な部分だと思ふのが、自然である。誰でも、機械の構造を解さ無い人には、その削屑は、機械の運轉を妨げるばかりのものであつて、音も無く廻つて居る小さい齒車の方が、その機械の一番大切な部分の一であるといふことは、覺り得られ無いのだ。

十月の十日に、ドフツウロフは、フォミンスコエへの半路程の所まで進んで、アリストゾオの村で止まつて、自分に與へられた命令をば、キツチリその通りに實行する爲めの有らゆる準備を爲しつゝあつたのだ。その同なし日に、佛蘭西の全軍は、戦を開く積りらしい風で、ミユラアの陣地の所まで、痙攣的な突進で達してから、不意に、別に何の原因も無いらしいのに、左方へ、新カルウガ海道へと轉じた、そして、それまでは、ブルウシエーばかり居たフォミンスコエへと行進し始めた。

ドフツウロフが、その時率ゐて居たのは、ドロオホフの隊と、それから、フィグネルとセラアヴィンの小さい二枝隊ばかりであつた。

十月の十一日に、セラアヴィンは、佛蘭西の親兵で捕虜になつた一人の兵を伴れて、アリ

ストゾオに居る將官の所へ来た。その捕虜は、その日フォミニスコエに達した軍隊は、全軍の前衛なのであつて、ナポレオンが居るのだが、全軍は五日前に莫斯科を出たのだ、と云つた。

その同なじ晩方に、ポロオフスクから来た家内の隸僕は、自分が、非常に大きい軍がその市へ入つて居るのを見たといふ言辭を齎した。

ドロオホフの哥薩克兵等は、佛蘭西の親兵等が、ポロオフスクへの海道を行進して居るのを見た、報告した。

總てさういふ情報で見るといふと、今までは唯だ一分團だけだと思つて居た所に、今は、莫斯科から、意外な方向——舊カルウガ海道——に依つて行進して居る佛蘭西の全軍が居るのだといふことが、明瞭であつた。

ドフツウロフは、今自分の任務は何ういふのであるのか明白で無かつたので、何等の行動をも執ることを欲し無かつた。彼は、フォミニスコエを攻撃しろといふ命令を受けて居たのだ。

が、その時はフォミニスコエにはブルウシエばかりであつたのだが、今、其所には、佛蘭西の全軍が居るのだ。

エルモオロフは自分だけの判断で行動しやうと思つた、が、ドフツウロフは、總司令官殿下

からの命令を仰が無ければなら無いと言ひ張つた。で、總司令部へ報告を出すことに決した。この目的に向つて、有爲な將校ボルホヴィテイノフが選み出された、彼は、文書になつた報告を携つて行く上に、尙口頭で一切の事を説明することになつて居た。眞夜半に、ボルホヴィテイノフは、急書と口頭の命令を受けて、代へ馬を引いた一人の哥薩克兵を従へて、總司令部へと駆け去つた。

(十六)

それは、暗の、暖な、秋の夜であつた。雨が、その四日以來降つて居た。馬を二度代へて、ボルホヴィテイノフは、一時間半で、泥濘つた、滑る道路をば三十露里駆けた。彼は、夜の一時にレタアシエーフカの村に達した。網代垣の上に、「總司令部」と書き出してある小舎の所で馬を下り、そして、馬を放して、暗い入口へと歩み込んだ。

「當番の將官へ、直ぐに。非常な重大事件だ」と、彼は、跳び起きて暗闇で喘いで居る誰かに、叫んだ。

「副官殿は、夕方から、甚くご病氣なんだ、この三晩といふものお眠みなさら無いんだから」

と、口を挟めた従卒の聲が叫び出した。「先へ大尉を起さ無きやア不可ないんです」

「將軍ドフツウロフからの重大な報告なんだ」と、ボルホヴィタイノフは云つて、開いて居る戸を手探つて、内へ入つた。

従卒は、先きに立つて、入つて行つて、誰かを起し始めた。「貴下、貴下、急使です」

「何だ？。何だ？。誰からだ？」と、眠むさうな聲が云つた。

「ドフツウロフと、アレクセエ・ベエツロヴィイチとからです。ナポレオンがフォミンスコエに居るんです」と、ボルホヴィタイノフは、真闇なので先の人を見ることができずに、その聲だけで、それがコノヅニイツインであらうと思つて、云つた。

起された男は、欠伸をして、身體を伸した。「將軍を起すのは、不可な」と、彼は云つて、何か手探ぐつた。「病氣なんだから。風説だけでも知れ無いちやア無いか」

「報告は此です」と、ボルホヴィタイノフが云つた。「私は、當番の將官に直ぐ渡せといふ命令を受けて來たんです」

「寸時待つてください、火を打つから。物を何う爲たんだ、痴漢奴」と、眠むさうな聲が、従卒に向つて、云つた。さう云つた男は、コノヅニイツインの副官のシチエルビイニンであつ

た。「あ、在つた、在つた」と、彼は云ひ足した。

従卒は火を打つた、シチエルビイニンは蠟燭立をと手探つた。

「あ、厭な獸類ども」と、彼は、さも厭さうに、云つた。

火絨箱の火花の光で、ボルホヴィタイノフは、シチエルビイニンの若い顔をチラリと見るこ

とができた。と、隅に今一人眠て居る者があつた。これがコノヅニイツインであつた。火絨は、最初は、蒼い、次には、赤い燭に燃えだした、シチエルビイニンは牛脂蠟燭を點火した——それを嚙つて居た油蝋は八方へ逃げ散つた——そして、彼は使者を見た。

ボルホヴィタイノフは、泥だらけになつて居た、そして、袖で顔を拭いたので、顔までも泥だらけにしてしまつて居た。

「だが、誰がさういふ情報を持つて來たんですか？」と、シチエルビイニンは、云つて、封状を取つた。

「情報は確です」と、ボルホヴィタイノフは云つた。「捕虜ども、哥薩克兵等も、間諜ども、悉皆同なじ事を云ふんです」

「うん、では、爲方が無い、起さ無きやア」と、シチエルビイニンは、云つて、起つて、夜

帽を冠つて、軍用外套に纏まつて眠て居る人の傍へ行つた。

「ビ・オトル・ペエツロヴィイチ」と、彼は云つた。

コノヅニイツインは、身動きも爲無かつた。

「總司令部からの喚び出します」と、シチエルビイニンは、さう云へば、必定起きるのだと知つて居たので、微笑みながら、云つた。と、成る程、夜帽を冠つて居る頭が、直ぐ擧げられた。コノヅニイツインの、熱病で頬部の膨れた、強い、奇麗な顔は、未だ寸時は、遠方を見て居るやうな、夢みて居る顔を帯びて居た、が、彼は、不意にハツと氣が付いた、そして、顔が、沈着と力との平常の表情に戻つた。

「うん、何だね？。誰からだ？」と、彼は、直ぐに尋いた、が、未だ、急ぎは爲すに、燈光に向いて、眩しさうに瞬して居た。

將校が話すべき事を云ふのを聞いて、コノヅニイツインは、封状を開けて、それを讀んだ。彼は、それを讀んで了まうか、了まは無いうちに、手編みの毛糸の靴足袋を穿いて居た兩足を地の床へ下した、そして、長靴を穿きだした。それから、彼は、夜帽を脱つて、髪を梳いて、略帽を冠つた。

「君は急いで此所へ來たのかね？。殿下の所へ行かう」

コノヅニイツインは、その報告は極く重大なものであつて、少しも猶豫して居られ無いことを、直ぐ理解した。それが、好い報告であつたのか、悪いものであつたのか、といふやうなことに就いては、彼は、何等の意見も無かつたし、又、自分に向つて、さういふ事を尋きさへも爲無かつた。さういふ問題は彼の關する所では無かつた。彼は、戦争といふ全問題をば、自分の智力を以つてでは無く、自分の理性を以つてでは無く、それとは全く異つた何物かで、見て居たのだ、彼は、自分の心の裡で、總てが結局は大丈夫であるのだが、さう信じてはいけず、又さう、云つては尙いけずして、自分は唯だ自分の任務を盡して居無ければなら無いのだ、といふ動か無い確信を持つて居た。で、彼は、全力を注いで、自分の任務を盡くして居たのだ。

ビ・オトル・ペエツロヴィイチ・コノヅニイツインは、ドフツウロフと同名じやうに、唯だ形式的に、バルクレエーとか、ラエーフスキイとか、エルモオロフとか、ミロラアドヴィイチとか、いふやうな連中と一緒に所謂千八百十二年の勇士等の間へ加へられて居るのだ。ドフツウロフと同名じに、彼も、又、極く能の少くない、學識の乏しい人間だといふ評判であつた。そして、ドフツウロフと同名じに、彼も決して、戦役の方略を建言し無かつたが、尙且、それでも、

一番難かしい位地には何時でも居るのであつた。總司令官附の將官に任命されてからは、ズツと何時でも、戸を開けたまゝで、眠て、何様な使者が來ても起せといふ命令を出した。戦では、彼は、何時でも敵火の下に居た、で、クツウゾフが、彼のさう爲るのを叱つて、戦線へ彼を遣り度から無かつたのだ。ドフツウロフと同名に、彼も、又、キイとも云はず、ガラとも音を立てずに、動いて居ながら、機械の一番大切な部分を成して居るさういふ眼立た無い齒車の一つであつたのだ。

小舎から、濕つた、暗夜の裡へ出るといふと、コノヅニイツインは顔を擧めた。それは、一つは、頭痛が烈く爲つた爲めでもあつたのだが、又一つには、この報告が、總司令部の有力者等の巢ちうに騒ぎを起させるだらうといふ事や、特にこの報告が、タルティノオの戦以來クツウゾフとは敵同士のやうになつて居たベニグセンに及ぼす影響や、それから、この報告の爲めに、種々な想像、議論、命令、反對の命令が、出るだらうといふ事などに、思ひ至ると、非常に厭な氣持が爲て來たからであつたのだ。で、總てさういふ事の豫覺が、彼はさういふ事は何うしても避け得られ無いことだと知つて居たに拘らず、彼には氣持が悪かつたのだ。彼が報告を傳へに行つたトオルは、果して、自分と同居して居た將官に向つて、直ぐその事

態に對する自分の意見を説き出し始めた。で、コノヅニイツインは、退屈さうに黙まつて、それを聞いて居てから、殿下の所へ行か無ければなるまいと、トオルに注意した。

(十七)

總ての老人のやうに、クツウゾフは、夜は少許しきや眠無かつた。彼は、晝間、不意に一寸一寸眠むつて了まうのであつて、夜は、衣服を脱すに、寢臺の上に横になつて、大抵は、眠すに、何か考へて居るのであつた。

彼は、その時も、さういふ風で、彼の寢床の上で、大きい、重い、傷痕だらけの頭を、肥つた手に凭せて、臥て居た。彼は、隻眼を廣く見張つて、暗闇を見詰めながら、考へ込んで居た。皇帝と直接に交渉して居て、總司令部の誰よりも勢力のあつたベニグセンが、クツウゾフを避けるやうになつてからといふものは、クツウゾフは無理やりに無益な攻撃的行動に兵を率ゐて行か無ければならぬやうにされることの無くなつたといふ點だけでは、大きに樂に爲つて居た。クツウゾフは、彼の心に苦痛を與へる記憶であつたところの、タルティノオの戦及びその戦の翌日の教訓が、兵等にも又その効果を持つたに違ひ無いと、思つて居たのだ。

「攻勢を執れば唯だ損をするばかりだといふことを、奴等は承認して居無ければ不可。時と忍耐、この二つが俺の爲めの勇士なのだ」と、クツウヅフは思った。

彼は、林檎は青いうちにちぎつては不可ぬといふことを知つて居た。熟さへすれば、それは自然に落ちるのだが、若し、それを青いうちにちぎれば、實も駄目になれば、樹も駄目になつて、慄へあがる程酸ばい目に逢ふものなのだ。

功を経た獵人のやうに、彼は、獸が傷を負つて居た、即ち、露西亞の全力を以てしたのみ傷を負はし得るのであつたやうに傷を負はされて居たことを、知つて居た。が、それが致命傷であつたか、否は、未だ決し無い問題であつた。

今は、ロオリストンやベルテミイをよこしたことやら、不正規兵が齎した報告やらで、クツウヅフは、その負傷が致命のものであることは、殆ど確實だと思つたのだ。けれども、もつと證據が欲しかつた、彼は待たざるを得無かつた。

「奴等は、駆け出して行つて、敵に何れ程傷を負はせ得たのか見度がつて居るのだ。まあ今少し待つて居れ、直きに分るから。何時も、機動とか、攻撃とか、いふことはかり云つて居ると、彼は思つた。一體何の爲めなのか？ 自分等が拔群な功を立て得るやうな機會ばかり覘つ

て居るのだ。戦が面白半分でやれることでありでもするかのやうに。奴等は、自分等が何れだけ善く殴り合ひが能きるか他人に見せ度くて堪まら無い小兒等のやうなもので、道理の通つたことは、何も云ひ得無いのだ。けれども、其様なことは、今の場合何うでも宜いことなのだ。随分巧妙な種々な方略を奴等は建言するものだなア。奴等は僅に二つ三つの偶發事項を考へ付くといふと（クツウヅフは、彼得堡から來る一般方略のことを憶ひ起したのだ）奴等は最早それで有らゆる偶發事項が残らず考へ付けたのだと思ふのだ。けれども、偶發事項などいふものに限りがあつて堪まるものか」

ポロデイノオで敵に與へた負傷は致命のものであつたか、何うだらうかといふ問題は、未解決のまゝで、全一月といふもの、クツウヅフの頭上に懸つて居た。一方では、佛蘭西軍が莫斯科を占領して了まつた。けれども、他方では、クツウヅフは、自分が、總ての露西亞人と一緒に全力を擧げて敵に蒙むらせた恐るべき打撃が、致命のものであつたに違ひ無いといふことを、有らゆる疑念を超えて、彼の全人格に於て、感じたのだ。

が、何れにしても、證據が必要であつた、で、彼は、一月の間それを待つて居た、が、時が經ち行くまゝに、彼はだん／＼ぢれ出した。

幾晩もの寝られ無い夜ちう、寢床に横になつて居ながら、彼は、若い將官等の爲たと同なじ事、即ち、彼が非難して居たその同なじ事を、爲たのであつた。彼は、若い時代の人々と全く同なじに、有らゆる有り得べき偶發事項を想像したのだが、然し、若い人々と違つて居たことには、彼の方は、さういふ想像を基礎としては何等の結論をも爲無かつたし、又、さういふ偶發事項をば、二つ三つ限りのものとしては見ずに、數千あるものとして見たのであつた。

彼が考へれば考へる程、さういふ偶發事項はますます多くなるのであつた。彼は、ナポレオンの軍の全體としてやる場合及びその一部分がやる場合の、有ゆる行動を、想像して見た、即ち、ナポレオンが、彼得堡へ向ふだらうかとか、クツウゾフ自身の方へ向つて来るだらうかとか、クツウゾフ自身の軍を包圍して了まうだらうか(それがクツウゾフには一番可怖かつたのだ)いふやうなことを、想像し、それから又、ナポレオンがクツウゾフ自身の武器でクツウゾフに向つて戦ふことになる、即ち、ナポレオンが莫斯科に止まつて居て、クツウゾフが其所へ進撃するのを待つて居ることになりはしまいかといふことも、想像したのであつた。

クツウゾフは、ナポレオンの軍がメデイン及びユウノフへ逆進するかも知れぬとさへ想像したので。が、彼が豫想することが能き無かつたのは、實際起つた事柄——ナポレオンの軍が、

莫斯科から出た最初十一日間の、狂亂的な烈しい驚走——であつた。さういふ驚走は、クツウゾフがそれ迄は未だ考へることさへ敢てし得無かつた事柄、即ち、佛蘭西軍の全くの全滅といふことをば、有り得ることに爲たのであつた。

ブルウシエーの分團に就てのドロオホフの報告や、不正規兵等が持つて来たナポレオン軍の困苦に關する情報や、莫斯科を出やうと支度中だといふ風説など、總てさういふものが、悉く、佛蘭西軍が、負けて、今逃走しやうと爲て居るのだといふ想像を確實にしたのであつた。が、總てそれは、唯だ想像に過ぎ無かつた。で、それは、若い人々に取つては、重みのあること、やうに、思はれたのだが、クツウゾフに取つては、決してさうでは無かつた。

六十年の経験で、彼は、風説といふものに何れだけの重みの置き得べきものかといふことを知つて居た。彼は、又、人は、何物もさうあり度いと思ふ時には、そのさうあるのだといふことに爲るやうに、總ての證據をば、都合の宜い方へ振り向けて了まうやうに直ぐ爲るものだと、いふことを、知つて居た。それから又、彼は、さういふ場合には、人は、反對の意義を持つて居る總ての物をば、一向心に留めずに、通り過ぎさせて了まひ勝なものであるといふことをも知つて居た。

で、クツウゾフは、この想像が的中することを欲すれば欲するほど、ますます自分が、それが的中つて居ると信ずることを、自ら許さ無かつたのだ。この問題が、彼の精神上的の全精力を吸収した。それ以外の事は、悉皆残らず、彼に取つては、人生の日常事の唯の常例的遂行に過ぎ無かつたのだ。即ち、幕僚の將官たちとの談話や、彼がタルティノオから出したマダム・スタエルへの手紙や、彼の佛蘭西の小説や、賞の分配や、彼得堡との文通などが、さういふ日常事の常例的執行及び遵守であつた。

が、唯彼一人のみが先見して居た佛蘭西軍の覆滅といふことが、彼の心の底からの唯一の願望であつた。

十月十一日の夜、彼は、頭を手に凭たせて、横になつて、その事を考へて居たのだ。

次の間に人の氣配が爲た、そして、トオル、コノヅニイツイン、及びボルホヰティイノフの足音が、クツウゾフに聞こえた。

「やア、誰だ？。お入り、お入り。何事か有つたかね？」と、總司令官は三人に聲を掛けた。従僕が蠟燭に火を點けて居るうちに、トオルは情報の要項を話した。

「誰がその情報を持つて来たかね？」と、クツウゾフは、尋いたが、蠟燭が點けられた時に

は、その顔の動か無き嚴格さが、トオルに強い印象を與へた。

「それには、少しも疑がありません、殿下」

「その男を呼べ、その男を此所へ呼べ」

クツウゾフは、一脚を寢臺の外へ出し、彼の重い肥つた身體を、下へ曲げた今一つの脚の上へ凭せて、坐つて居た。彼は、使者の顔の裡で、自分が知り度いと思つて居た事柄を讀まうと思ふかのやうに、使者の顔を十分に熟く見やうと、彼の見える方の眼を見張つた。

「話して呉れ、話して呉れ、君」と、彼は、低い、年取つた聲で、ボルホヰティイノフに云つて、彼の胸の所で開いて来た襯衣の襟元をかき合した。「此所へ來なさい、もつとすつと此方へおいで、君が持つて來た情報は何ういふのかね？。えゝ？。ナポレオンが莫斯科から出たのかね？。それは眞實の話かね？。えゝ？」

ボルホヰティイノフは、自分が命せられて居た使の趣を詳しく繰り返し始めた。

「早く云つて呉れ、急げ、私を苦しめる勿」と、クツウゾフは、ボルホヰティイノフを遮ぎつた。

ボルホヰティイノフは、悉皆クツウゾフに話した、で、止まつて、命令を待つて居た、トオ

ルが何か云はうと爲だした、が、クツウヅフは、彼を止めた。クツウヅフは、何か云はうと爲た、が、不意に、彼の顔が、動きだし、響められた。トオルに向けて手を振つて、彼は、彼方へ、聖畫で黒く見えて居る小舎の隅へと、振り向いた。

「主よ、造物主よ。貴方は、吾々の祈禱をお聞きくださいました……」と、彼は、震える聲で云つて、指を組み合せた。「露西亞は救はれました。貴方に感謝いたしまする、お、主よ」で、彼はハラ／＼と涙を滾した。

(十八)

その時からして、戦役の終局に至るまで、クツウヅフの總ての活動が、權威の行使を以てするのには勿論、なだめることや、懇請で以て、露西亞軍をして、死に行く敵に對して無益な攻撃、機動、及び小衝突などを爲せ無いやうに爲ることはかりに限られたのであつた。

ドフツウロフは、マレエ・ヤロスラアヴェツツへと行進した、が、クツウヅフは、本軍を以て、ぐす／＼して居た、そして、カルツガを開け渡す命令を出した。即ち、その市の彼方への退却がクツウヅフには一番至當だと思はれたのだ。

何處でも、クツウヅフは退却した、が、敵は、クツウヅフが退却するのを待たずに、反對の方向へ飛ぶやうに逃げて行くのであつた。

ナポレオンの歴史家等は、タルティノオや、マレエ・ヤロスラアヴェツツでの彼の巧妙な軍の操縦を、吾々に語り、そして、若しナポレオンが、南方の富裕な土地へ入り得たのであつたら、何う爲つたらうといふことを論じて居る。

が、ナポレオンが若しさういふ南方の諸縣に進まうと思つたのなら、ナポレオンがさうするのには何の障礙も無かつた（露西亞軍はその路を全く開けて居たのだから）といふ事實は云はぬこと、にしても、歴史家等は、ナポレオンの軍は、それ自身の裡に、破滅の避け難き萌芽を、その時には、持つて居たのだから、何様なことを爲しても助かりやうの無かつたことを忘れて居るのだ。

莫斯科で、饒多な糧食を見出しながら、それを貯へて置くことが能き無いで、それを脚下に蹂躪つて了まつたやうな軍、それから又、スモレンスクに入つた時に、糧食を貯へて置き得ずに、それを無暗に掠奪して了まつたやうな軍、何うしてさういふやうな軍が、住民が莫斯科と同じ露西亞人であり、火事も、火を放つた物を同じやうに焼き得る場所であること

ろのカルウガへ入つて、それ自身を助け得られるものか。

ナポレオンの軍は、何様なことでも、それ自身を恢復させることは能き無かつたのだ。ポロ
ディノオの戦及び莫斯科の掠奪以後、それは、それ自身の裡に、云はゞ、溶潰の化學的諸要
素を持つて居たのだ。

嘗ては軍を成して居た人々が、自分等の將帥たちと一緒に、何處へ行きつゝあるとも知らず
に、唯だ只管に逃げて行つた。上はナポレオンよりして、下は一兵卒に至るまで、誰も彼も、
唯だ一つの願望で心を満たされて居た。即ち、彼等は皆、誰もか臆氣には覺つて居たその望の
絶えた位地から能きだけ早く、自分が、遁れて了まはうと希つて居たのだ。

マレエ・ヤロスラヴツツでの會議で、佛蘭西の將軍たちが、熟考して居るやうな態を装つ
て、その後何うすべきかに就て、種々な意見を出して居た時に、率直な軍人ムウトンが、能き
だけ速く退くより外に爲やうは無いいふ意見を出すと、それが、その時誰でもが腹の
裡では思つて居た事柄なので、それで、誰もか口が噤ませられて了まつた。そして、誰も、ナ
ポレオンでさへ、誰もか認めて居たその眞理に反對しては何にも云ひ得無かつた。

が、誰もか、自分等が去ら無ければなら無いと、知つて居ながらも、遁げ無ければならぬ

といふことを承認するのには、未だ其所に耻辱の感情が残つて居た。で、その愧耻に打ち勝つ
は、外形上の激動が、何か一つ必要であつた。所で、さういふ激動が、丁度その切要な場
合に、やつて來た。それは、佛蘭西人の所謂ル・フウラ・ド・ラムベリウール(皇帝の伏兵)であ
つたのだ。

會議の翌日、軍隊及び過去や將來の戰場を視察するといふ辭柄の下に、ナポレオンは、朝早
く、幕僚の元帥等や、護衛兵を随へて、自分の軍の戦線の真中へ乗り出た。

掠奪物を索して居た哥薩克兵等が皇帝を襲つた、そして、今少しでナポレオンを捕虜に爲る
ところであつた。

その日、ナポレオンを哥薩克兵等から救つたのは、佛蘭西軍の破滅を來した恰度その物、
即ち、掠奪物であつたのだ。哥薩克兵等は、此所でも、タルティノオでとなりに、掠奪物に
眼がくれて、大切の贅を取り逃して了まつたのだ。ナポレオンには少しも眼を着けずに、彼等
は、掠奪物へと突進して行つた。で、ナポレオンは逃げる事ができたのであつた。

レザンファン・デ・ドン——ドン河地方の兒等——が、皇帝の軍の最中で皇帝其人を確に捕虜
に爲得るのだとなつて見るといふと、最早、一番近い熟路に依つて能きだけの大急ぎで逃げ

出すより外、何うにも爲やうの無いことは、明瞭であつた。

最早四十歳代の、肥り切つて居たナポレオンは、往時のやうには計策に富んで居ず、又その時分ほどの勇氣も無かつた。で、彼は、その事件の暗示を直ちに受け容れた、哥薩克兵等から與へられた恐怖の爲めに動かれて、ナポレオンは、直ぐムウトンの意見に同じた。で、歴史家等が吾々に告げるところでは、スモレンスク海道に依つて退却することの命令を出したのであつた。

ナポレオンが、ムウトンの意見に同じたといふ事實や、軍がスモレンスク海道の方へは退却し無かつたといふ事實は、彼の命令がその退却を決定したのでは無くして、全軍の上に働かかけて、モザアイスク海道に附いてその軍を追つ立て、居た諸力が、又同時にナポレオンを動して居たのであることを、證明して居るのだ。

(十九)

人が、或る運動のうちに自己自身を見出すといふと、彼は何時でもその運動の終局點を發明するものなのだ。千露里を歩かうと爲るには、人は、その千露里の彼方に何か善い物があるの

だと信じ無ければ不可い。彼は、進んで行く力を持つ爲めには、望みの國の幻覺を持た無ければ不可いのだ。

佛蘭西人の露西亞への進軍の場合の望みの國は莫斯科であつた、彼等の退却の時には、それが、彼等の本國であつたのだ。が、彼等の本國は餘り遠過ぎた。で、千露里を歩く人は何うしても、その最後の目的地は先づ措いて置いて、毎日、自分が宿まり得る驛まで四十露里歩くのは、宜いのだと、自分に向つて云は無ければなら無いのだ。で、最初の宿泊地に達し無いうちは、その休止驛が最後の目的地を蓋ひ隠して居て、總ての希望も願望も皆その休止驛の上に集中するものである。

個人の場合に表はれる總ての諸衝動は、何時でも、群集の場合には非常に増大されるものなのだ。

舊スモレンスク海道に依つて背進して居た佛蘭西軍に取つては、彼等の最後の目的地、即ち、彼等の本國は、餘り遠過ぎた、で、群集の勢力の爲めに非常に強められて居た總ての希望や、願望が集中して居たもつと近い目的地は、スモレンスクであつた。

兵士等が——他の者よりは善く事情を知つて居た者と、さうで無かつた者とを問はず、皆自

分等自身を欺いて、望みの國へかのやうに、スモレンスクへ突進したのは、彼等が、スモレンスクに糧食が饒多であるとか、増援軍が来て居るとか、思つて居た爲めでも無ければ、又、彼等がさう云ひ聞かされて居た爲めでも無くして（その反對に、將軍等も、ナポレオン自身も、スモレンスクには、糧食は乏しかつたことを知つて居たのだ）、それは、それが、彼等の現在の困苦を忍んで動いて行く力を彼等に與へ得た唯一の物であつたからなのだ。

北海道へ出るといふと、佛蘭西人は、異常な精力と未聞の速度で、その想像した終局地へと逃げて行つた。

佛蘭西人の群集をば、一つ全體に纏らせ、そして、彼等に或る動力を與へた共通の衝動以外に、其所には、今一つ、彼等を一緒に引き纏めて居た原因があつた。その原因といふのは、彼等の數であつた。

引力の物理上の法則に於けるやうに、彼等の非常な大集團が、別々の少分子をば、その方へ引き付けたのだ。彼等は何十萬といふ大集團を成して、一國家のやうに、動いたのであつた。

さういふ大集團のなかの誰もが、唯だ一つの事——即ち、降服して、捕虜になり、そして、各自の現在の位地の總ての恐ろしさや苦しきから遁れやうといふ事——を一生懸命に希つて居

た。が、一方では、スモレンスクへと向ふ共通の衝動の動力が各個人をば同なじ方向へと引き付けて居た。

同時に、他方では、一軍團が一中隊に降服するなどは思ひも寄らぬことであるし、又、佛蘭西人は、有ゆる都合の好い機會に乗じて、落伍して、何れ程一寸としたものでも辭柄さへあれば直ぐ捕虜になるやうに爲て居たのであるが、さういふ機會が何時でもあるといふ譯には行か無かつた。

彼等のさう數の多かつたことや、左様な密集團になつて非常な速度で動いて居た事が、左様いふ機會に彼等を遭せ無いやうに爲たし、又、一方では、それが、露西亞人に對して、その大集團の全精力が投せられたその動きをば、止めることを、困難なものに爲たところでは無く、全く不可能なものに爲て了まつたのだ。

物體を割く如何なる機械的方法も、その物體の裡に行はれて居る溶潰の進行をば、或る度を越えては、速めることは能き無いものなのだ。

雪の塊團は直ぐには解けさす譯には行か無い。それが解けるには、一定の時の限りがあつて、それが経たぬうちは、何れ程熱を加へても、雪を溶かすことは能き無いのだ。反つて、熱が強

ければ強い程、残る雪は一層堅くなるものなのだ。

露西亞の將軍等のなかで、クツウヅフより外には、この道理を解して居る者は一人も無かつた。佛蘭西軍の逃走が、スモレエンスク海道に附いて、その最後の方向を取つた時に、その時に、クツウヅフが十月十一日の夜先見した事柄が實際に起つて來たのであつた。

露西亞軍の總ての將官や將校等は、各自自分自身を抜んで度がり、敵の退路を扼するとか、佛蘭西軍に追及し、それを擒へ、それを襲ふとかいふやうな事を一生懸命に望んだ。そして、衆皆戦闘を開き度がつてソイ／＼騒ぎ立つた。

クツウヅフのみが（一體總司令官なるもの、權力といふものは餘り大きいものでは無いに拘らず）唯だ一人、自分の有らゆる権力を用ゐて、攻撃を求めざるさういふ騒ぎに反對した。

彼は、吾々が今日云ひ得る事柄を彼等に話すことは能き無かつた。彼は、敵軍の三分の一が莫斯科とヴィヤズマとの間で、戦も無くして、自然に溶け去つて了まつた位であるのに、何の目的で、戦ひ、路を閉ぎ、吾軍の兵を失ひ、それから、無慈悲にも敵の惑むべき奴等を苦しめるのかと、人々に問ふことは能き無かつた。が、彼は、自分の老年の智慧の貯蔵の裡から、人の理解し得るやうなものを引き出して、彼等に黄金の橋のことを云つた。（譯者註——「彼等をして黄金の橋を渡らし

めよ」とは、「彼等をして、自滅の有らむ」で、彼等は、クツウヅフを嘲弄し、彼を誹謗して、負傷の隙にゆる機會を持たしめよ」といふに同じ）で、彼等は、クツウヅフを嘲弄し、彼を誹謗して、負傷の隙に對して大喜悅になつて、前へ推し進み、前へ突進したのであつた。

ヴィヤズマ附近で、エルモオロフや、ミロラアドヴィイチや、ブラアトフや、その他の連中は、佛蘭西軍が直ぐ傍に居ることを知つたので、彼等を遮ぎつて、佛蘭西の二軍團を襲はうといふ願望に堪えられ無くなつた。自分等の計畫を、クツウヅフに通知する場合に、彼等は、急書の代りに、一枚の白紙をば、封筒の裡へ落し込んだのであつた。

で、軍を制止して置かうとするクツウヅフの努力に拘らず、吾兵士等は、佛蘭西軍を攻撃して、その路を止めやうと爲たのだ。吾々の聞いた所では、歩兵の諸聯隊は、音楽を奏し、太鼓を打つて、敵を攻撃しに進んで、そして、何千といふ數で殺したり殺されたりしたといふのだ。が、敵の退路を遮ぎるといふ事の方は——何の軍も遮ぎられもせず、又、外方へ向けられも爲無かつたのだ。危険の爲めに尙一層結合を堅くならせられた佛蘭西軍は、進むに随がつて、溶潰して行きながらも尙且スモレエンスクへのそのの不運な路をば續けて行くのであつた。

第三章

(一)

莫斯科の占領及び、戦無しにその後で起つた佛蘭西軍の遁走に依つて續かれたポロディノオの戦は、歴史上の最も教訓的な現象の一つである。

國家及び人民の争闘の場合の外面的活動が、表はれて戦争になるのだといふことや、國家及び人民の政治上の力は、戦争の成功なり敗北なりに随がつて増減するものだといふことは、何の歴史家も皆一致して居るところである。

或る王なり、皇帝なりが、今一人の王なり、皇帝なりと、喧嘩して、軍隊を募つて、敵の軍と戦を爲、勝利を得、三千とか、五千とか、一萬とかの人間を殺すといふと、それで以つて、何百萬といふ數から成つて居る國家及び全人民を征服して了まうことを吾々に告げる歴史上の叙述は、吾々に取つては實に奇異の感がする。それから、人民の全力の百分の一に過ぎ無い一軍の敗北が、その人民全體を屈服せざるを得ざらしめるといふことが、何うしても解らぬこと

に、思はれるのだ。けれども、歴史上の總ての事實が（吾々が知つて居る限りでは）國民の軍の成功若くは敗北が、一國民の力の消長の原因、少くともその常例徴候であるといふ記述が眞實であることを、證明して居るのだ。

軍が勝利を得ると、直ぐ勝つた方の人民の権利が増して、負けた方の者の権利が損はれて了まう。軍が敗れると、直ぐ、その人民は、敗北の大きさに比例してその権利を失ひ、そして、若しその軍が全く敗北して了まうといふと、その人民は全く征服して了まはれるのだ。それは（歴史に依れば）極く往昔から今日まで左様であるのだ。ナポレオンの初の時分の戦争が悉皆この規則の實例になり得る。

輿地利の諸軍が敗れるといふと、輿地利はその諸權利を失つて、佛蘭西の諸權利及び力が増した。

エナ及びアウエルスタアトでの佛蘭西軍の勝利が、普魯西の獨立的存在を破却して了まつた。が、不意に、千八百十二年に、佛蘭西人は莫斯科の前面で勝利を得た。莫斯科が取られた、が、その結果として、その後は一つの戦も無くして、露西亞では無く、六十萬の佛蘭西軍の方が無くなつて了まひ、で、それから、ナポレオンの佛蘭西が無くなつて了まつた。

歴史上の法則に當てはまるやうに事實を曲げて、ポロディノオの戦場は露西亞軍の手に残つて居たとか、又は、莫斯科放棄の後で、ナポレオン軍を覆滅させたやうな諸戦があつたとか主張することは——全く不可能なのだ。

ポロディノオの佛蘭西軍の勝利の後では、總戦闘は一つも無く、又、少しでも重要な小衝突も一つも無かつた。が、それであるのに、佛蘭西軍は無くなつて了まつたのだ。

これは、何うしたことなのだ？

若し、これが支那歴史からの一例であつたのなら、それは歴史的事實では無い（自分等の法則に當てはまら無い物がある時に、何時でも歴史家が取る方法）と云ひ得るだらう。又、若し、それが、少規模の争闘で、僅に少數の兵のみが加つてやつたものであるであつたら、吾々はそれを例外とも見たかも知れぬのだ。

けれども、總てこれは、吾々の父祖の眼前で起つた事で、それ等の人々に取つては、その事件が生死の問題であつたのだ、そして、その戦争は吾々が知つて居る何の戦争よりも大規模のものであつたのだ。

千八百十二年の戦役の後半——即ち、ポロディノオに始まつて、佛蘭西軍の最後の驅逐に至る

での事件——は、勝利といふものが、何時でも、征服の原因であるのでも無く、又常例の徴候でさへあるのでも無いことを、證明して居るのだ。それは、人民の運命を決定する力は、軍の將帥の手にあるのでも無く、軍にも、戦にもあるのでは無くして、何かそれより他の物の裡にあるのだといふことを、證明して居るのだ。

莫斯科から出だす前の佛蘭西軍の状態を記述して居る佛蘭西の歴史家等は、大佛軍では、騎兵、砲兵、輜重を除き、それから、馬や牛に對する秣料が少しも無かつたことを除いては、何も彼も、整頓して居たことを、確言して居る。この欠缺に對しては、何うにも爲やうが無かつたのだ。それは、周圍の地方の農夫等が、佛蘭西軍の手に渡すよりはといふので、自分等の干草を焼いて了まつたからなのだ。

勝利は、その常例の結果を齎さ無かつた。それは、カルブとかヴラスとかいふやうな（佛蘭西軍が莫斯科を放棄して了まつてから後で、莫斯科を掠奪しにと荷馬車を持つて急いでやつて來たのだから）少しも勇者的な人間では無かつた農夫等や、その他の者どもの非常な多勢が、何れ程高い價格で買つてやらうと云はれても、莫斯科へ持つて行くよりはといふので、自分等の干草を焼いて了まつたからなのだ。

今假りに、こゝに二人の人があつて、剣法の有ゆる法則に従つて、剣で決闘を爲したと爲て見やう。剣法通りの戦が暫時續いて居た。不意に、争闘者の一人が、自分が傷を負つたことを感じ、それは最早決して冗談事では無くして、自分に取つては生死の問題であることを、覺つて、剣を投げ捨て、手に當つた最初の手頃の棒を取り上げて、それを振り廻し始める。所で、今假りに、それ程伶俐に、自分の目的を達するのにも最も良い最も簡単な方法を用ゐたその争闘者が、武士道の傳説に動されて、争闘の眞の原因を隠さうと思ひだして、自分は、剣法の諸法則に少しも外れずに、決闘に勝つたのだと主張し續けたとして見る。さうなつた場合には、その男の決闘の物語からは、實に非常な混雑と曖昧が起ることだらうと思はれるでは無いか。

剣法家の原則通りに、決闘が行はれたのだと主張して居る決闘者は、佛蘭西軍だ、そして、剣を投げ捨て、棒を取り上げた敵手の方は、露西亞人が爲たと同なじ事を爲たのだ。それから、その決闘が剣法の法則に背かすに行はれたのだと話さうと爲て居るのは、その戦争の歴史家なのだ。

スモレエンスクの焼けた時から、戦争の舊傳説の孰にも従は無かつたやうな一種の戦が始まつた。

町や村を焼いたこと、何の戦の後でもの退却、ポロデノオで與へた打撃、その後の退却、莫斯科の焼けたこと、掠奪隊の捕獲、輜重の占領——それから、不正規戦の全體などが、悉皆、法則外れのものであつたのだ。

ナポレオンは、それに氣が付て居た。で、勝つた剣法家の正規の姿勢で莫斯科で待つて居て、敵手の剣の代りに、棒が自分に向つて振り上られて居るのを見た時から、彼は一度も、クツツゾフ及び皇帝アレクサンドルに對して、戦争が、戦争の法則に全く背いた方法で行はれて居るといふ抗議を云ひ込むことを止め無かつた。(人間を殺すのに何か法則が有りでもしたかのやうに)。

法則外れだと云ふ佛蘭西人の抗議も何のその、最も高い位地の露西亞人たちが、棒で戦ふことには耻ぢ入つて、突き受けの成規の姿勢を守り、巧妙な突きを入れ、守りを爲すなど、いふ風に爲度がつて居た事實も何のその、民衆戦の棒は、その總ての物凄、壯大な力で、擧げられた。そして、何人の法則に對する趣味の問題にも構まはず、上品な區別などには少しも構はず、極く間の抜けた率直さで、全く續けざまに、その棒が擧り、打ち下され、そして、全侵

入軍が逐ひ出されて了まうまで、佛蘭西人を散々に打ちのめしたのであつた。
千八百十三年に、佛蘭西人が爲たやうに、法則通りに敵手に敬禮して、寛大な勝利者へ、上品に、静に劔の柄をさしたすやうなことを爲無かつた露西亞國民は幸なるかな。國難の刹那に於て、他の者どもならば、左様いふ場合に、公認された法則通りに行動するだらうか何うだらうかといふやうな間を少しも出さずに、平氣で素速く手に當つた最初の手頃の棒をば取り上げて、憤怒と復讐の念が侮蔑と憫愍に變つて了まうまで、それで打ちまくつたといふ國民は幸なるかな。

(二)

所謂の戦争の諸法則なるものに對する最も著しい、且最も有利な違反は、集團に一緒に團まつて居る人間に向つて、他の者が別々に働く獨立の行動なのだ。

さういふ獨立の活動は、國民的の性質を帯びる戰には、何時でも見られる。この種の戰では、群集を攻撃する爲めに、群集を爲さずに、人々が小さい集團に別れて、單獨に攻撃し、若し非常に優勢な兵力に攻撃されれば、直ぐ逃げ、又、好い機會が出来て來れば、直ぐ攻撃するのだ。

さういふのが西班牙の諸不規則の戰法であり、コウカサスの山間民族の戰法であり、千八百十二年の露西亞人の戰法であつたのだ。

この種の戰は、少黨戰と呼ばれ來たつて居るのだが、それは、この名稱がその特殊な意義を定義し得るのだといふ想像に由つたものであるのだ。

けれども、この種の戰は、戦争の如何なる法則にも遵は無いで、決して間違ふことの無いものだと思せられて居る戰術の善く知られて居る法則とは全く正反對なものなのだ。その法則の定めた所に據れば、攻撃軍は、擲闘の刹那に於て、敵軍よりも強くある爲めに、兵力を集中して居無ければならぬのである。

少黨戰（歴史の證明するところでは、何時でも成功して居るのだ）は、この法則とは正反對な行動を爲るのだ。

軍學は、兵力の關係的の強さは、雙方の数の大きさと同なじだといふことを、假定して居る。軍學は、兵の数が多いだけ、力も大きいと主張して居る。即ち、「大なる大隊が何時でも宜い」といふのだ。

が、さういふ事を云ふのは、宛然、機械學で、人が、動いて居る二物體の大きさが等しいとか、不等だとかで、力が、等しいとか、不等だとかいふことになるのだといふのと同じなのだ。

力(即ち、運動の量)は、物體の質量に速度を乗じたものであるのだ。

戦に於ては、軍の力は、質量へ何か他の物、即ち、未知數を乗じたものなのだ。

軍學は、軍の大きさがその力とは合致し無きことの實例や、小さい數のものが大きい數のものに勝つた實例の、非常な饒多を、歴史上で見て、臆氣ながら、この未知の因子の存在を認

めて、時には、軍隊の或る配置の裡に、時には、武器の優良の裡に、そして、最も屢々將帥等の

天才の裡に、それをば、發見しやうと試みるのだ。

けれども、さういふ因子の孰もが、歴史的事實に一致するやうな結果をば、造り出さ無い。

この未知量を發見しやうといふには、戦に於ての歴史上の勇者の活動を豪いものにしてしま

う間違つた意見を投げ捨てるより外、爲方が無いのだ。

これは、軍の元氣である、即ち、軍を構成して居る人間の方に於ての、戦を爲し及び危険を冒

さうといふ願望の多少をいふのだ。そして、これは、彼等が天才の將帥の下で戦つて居るとか、

さうで無いとか、棒で戦つて居るとか、一分に三十回發砲し得る鐵砲で戦つて居るとか、いふやうな問題とは一向關係の無いことなのだ。

戦はうといふ願望の多い方の人々は、又、戦うのにより多く有利な地位に自ら就くものなのだ。

軍の元氣は、それに軍の大きさを乗する時は、兵力の積を與へるところの因子なのだ。軍の元氣といふ此の未知の因子の意義を定義して、それを云ひ表はすのが、科學の問題なのだ。

この問題は、吾々が、獨斷的に、その未知量に向つて、兵力が表現される諸状態、即ち、將帥の方略とか、兵の武装の如何とかいふやうなことを、代用することを止めて了まつて、戦はうといふ且危険を冒さうといふ願望の多少として、その未知の因子をば、その全體に於て、認める時に至つて、始めて、解決せられるのだ。

で、或る知れて居る歴史上の事實をば方程式で表はせば、この未知の因子の關係的の價値を比較する事で以つて、吾々は、その定義に近づき得るのだ。

十の人、大隊、若くは、分團が、十五の人、大隊、若くは、分團と戦つて勝つた、即ち、彼等が、自分等の方では四だけを失つたのみで、一方の方の全體を殺し、又は、捕虜にした。

即ち、損害が、一方では四であるのに、他方ではそれが十五であるといふ案配になつたとする。さうすると、一方の四は、他方の十五と等しいことになるのだ。

故に、

$$4x = 15y$$

故に、

$$x : y = 15 : 4$$

この方程式は未知の諸因子の價値を與へはし無いが、それでも、その價値の間の比は與へて居る。で、種々な歴史上の諸單位(戰、戰役、戰の期間)を斯ういふ方程式に爲ることに因つて、數の一連續が得られるのだが、その連續の中で、歴史的法則が見出され無ければならぬし、又見出し得られもするのだ。

軍は、攻勢を執る場合には、大集團に爲つて行動し無ければならず、退却するには、小さい集團に分れ無ければならぬといふ戰術上の原則は、知らずく、軍の力はその元氣に據つて居るものだといふことの眞理を證明して居るのだ。人を敵火の下に伴れて行くのは、攻撃された時に自己防衛に向つて要せられるより以上の規律(それは、大集團に爲つて行進することに

依つてのみ得られることなのだ)を要するものである。

けれども、軍の元氣といふものを眼中に置か無この法則は、何時も不確實であり、殊に、軍の元氣に非常な上り下りがある場合の總ての國民的戰爭での實行の時には著るしく當てはまら無いのだ。

千八百十二年の退却の時には、佛蘭西軍は、その戰術的法則の通りならば、別々の小集團に爲つて防衛すべき筈であつたのに、群集になつて團まつて居た、が、それは、兵の元氣が、彼等の數の多いことのみが、彼等を弱り切り切らずに置き得たのであつた位に、低く落ちて居たからであつたのだ。

露西亞人は、その反對で、戰術上のその法則に従へば、大集團になつて佛蘭西軍を攻撃すべき筈であつたのに、實際は反つて、別々の小分隊になつて攻撃した、が、それは、兵の元氣が、個人々々が、命令を俟たずに、佛蘭西人を攻撃し、且、困苦や危険を冒さしめるのに何の強制をも要さ無い位までに、高く昂つて居たからなのだ。

(三)

所謂「少黨」戦は、敵軍がスモレンスクへ入ると共に、始まつて居た。

不正規戦が我政府に依つて公式に認められる前に、敵の兵卒の何千もが——落伍者、掠奪者、若しくは、徴發隊が——哥薩克兵等や農夫等の爲めに殺されて居たのだ、さういふ者どもは、それ等の佛蘭西兵をば、迷つた狂犬に向けられた犬どものやうに、本能的に殺したのであつた。

デニス・ダヴィイドフが、彼の露西亞人の本能で、佛蘭西人を打ちのめし、兵術の禮式などは少しも顧み無かつたその恐ろしい棒の價値をば、感じた最初の人であつた、で、彼にまで、この戦法を認める方へ最初の歩を取つたことの功が歸するのだ。

不正規兵の最初の分隊——ダヴィイドフの隊——は、八月の二十四日に編成され、そして、他の隊が直ぐそれに續いた。戦役の終末に近くなるに隨つて、さういふ分隊が、だん／＼數多くなつたのだ。

不正規兵が、大佛軍をば、粉々に破壊して了まつた。彼等は、枯れ掛かつて居る樹から自然に落ちて居た落葉をば、掃き去り、時には、樹その者をも搖つたのだ。

佛蘭西軍がスモレンスクへと逃げて行きつゝあつた十月には、數や、性質の相互に非常に異つたさういふ分隊の數百が在つた。或る者は、軍隊の總ての常例に従つて、歩兵、砲兵、參

謀を持ち、生活の總ての便利品を持つて居た分隊であつた。或る者は、哥薩克兵や、馬に乗つた者どもで、成り立つて居た。他の者は、徒歩や、馬に乗つた人々の小さい隊であつた。或る者は、農夫、若しくは、地主及びその隸農で、成り立つて居て、何ういふ人々であつたか、知れずに居た。

さういふ隊の頭には、補祭の居るのがあつて、それが、一月のうちに數百人の捕虜を取つた。それから又、村長の妻のヴァシイリサといふのが居て、それが、佛蘭西人を數百人殺した。

十月の末頃が、この不正規戦がその絶頂に達した時であつた。不正規兵等が、自分等の大膽さに我ながら果れ返へり、何時佛蘭西人に圍まれて捉へられるかも知れぬと刻々怖れて居て、決して、鞍を下さず、殆ど馬から下りずに、森の裡に隠れて、刻々追撃を怖れて居たといふやうな、この戦の時期は、最早過ぎて了まつた。

不正規戦は、今では、最早極つた形を取つて了まつた。總ての不正規兵にまで、自分等が佛蘭西人に對しては、何ういふことは爲し得られるとか、何ういふことは爲し得られ無いかいふことが、瞭乎と分つて了まつた。

今では、多くのことが能き無いと思つて居たのは、法則通りに、幕僚等を伴れて、佛蘭西軍

から遠く離れて進軍して居た諸分隊の司令等のみであつた。最早長いこと働いて居、そして、佛蘭西人と接觸して居た不正規兵の小さい隊は、大きい隊の頭領たちが、爲やうと思ふことさへ敢てし得無かつたやうな事が、能き得ることであるのを見出したのだ。

佛蘭西軍の間へ度々忍び込んだことのある哥薩克兵等や、農夫等は、今は何様なことでも能き無いことは無いと思つて居た。

十月の二十二日に、不正規兵の一隊の長であつたデニソフは、この不正規戦の常例的な行動に熱心にかゝつて居た。早朝から、彼は、往還に沿うた森の裡を、兵を率ゐて、動き廻つて、騎兵の輜重と、露西亞の俘虜等の、大きい護送隊の行動に注目して居た。その護送隊は、他の佛蘭西の軍隊より後れて了まつて、強い護衛兵の下に——デニソフが、自分の斥候や捕虜等から聞いたのでは——スモレンスクへと向つて行きつゝあるのであつた。

その護送隊の存在を知つて居たのは、デニソフやドロオホフ（彼も同なじ地方で働いて居る小さい隊の長であつたのだ）ばかりでは無かつた。又參謀をも持つて居た或る大きい分隊の司令の或る將官等が、この護送隊のことを知つて居て、デニソフの云つた通り、口から涎を垂らして、それを取り度がつて居た。

さういふ二人の將官——一人は波蘭人で、今一人は、獨逸人であつた——は、雙方殆ど同時に、デニソフの所へ使をよこして、各自自分の分隊に合併して、護送隊を攻撃し無いかと、勧誘したのであつた。

『いや、朋友、俺は昨日生まれたのでは無いせ』と、デニソフは、さういふ書面を讀んで、云つた。で、彼は、自分はさういふ名聲赫々たる將官の下で働き度いといふ願は熱烈であるに拘らず、自分は最早既に波蘭の將官の麾下に屬して了まつたので、残念ながら、その幸福を辭さざるを得無いのだと、その獨逸人へ書いて遣つた。

波蘭人に向けては、彼は、自分は最早既に獨逸人の幕下に隨つて居るのだからと云つて、同なじ事を書いて遣つた。

さういふ風に、その難關を切り抜けて了まつて、デニソフは、上官へその問題に就て何等の照會も爲すに、デニソフと共に、自分自身の小さい兵力限りで、その輜重を攻撃して、それを取つて了まはうと、企てたのだ。

その輜重は、十月二十二日には、ミクウリノの村から、シャムシェーヴォの村へと、行きつゝあつた。ミクウリノとシャムシェーヴォとの間の道路の左側に大きい森があつて、それが或る所

では道路に沿ひ、或る所では、道路から一露里以上も離れて居た。

デニイソフは、随従者の小さい一團と共に、終日さういふ森の中を乗り廻つて、或る時は、その中心へ入り込み、或る時は、縁へ出て来たのであつたが、決して、動いて居る佛蘭西人から眼を離さ無かつた。

朝になつて、ミクウリノから遠く無い、森が道路に極く近くなつて居る所で、デニイソフの隊の哥薩克兵等が、泥濘へ吸い込まれて居た鞍を積んだ佛蘭西の馬車二輛を襲つて、そして、それを森へ引つ張り込んで了まつた。

その時から晩まで、始終彼等は、佛蘭西人を攻撃は爲無いで、その行動に注目して居た。彼等は、佛蘭西人を恐れさせ無いやうに爲て、シヤムシエーヴォまで穩に行かせて置いて、其所で、ドロオホフ（彼等と共に働する爲めに、その晩、シヤムシエーヴォから一露里の森の裡の集合所へ来る筈であつた）と合併して、黎明に、兩側から、佛蘭西人の頭上へ大雪崩のやうに落か、つて、一撃の下に、彼等に打ち勝ち、彼等を悉く取つて了まはうと、思つて居た。

六人の哥薩克兵が、ミクウリノから二露里の、森が道路に沿うて居る所へ、殘して置かれた。彼等は、佛蘭西人の何様な新たな隊團でもが現はれたらば、直ぐ報告する筈であつた。

シヤムシエーヴォの前面でも、デニイソフは、同なじやうに、何様な距離に他の佛蘭西の軍隊が居るのか、知る爲めに、道路を監視して居る筈であつた。

輸送隊には、千人居ると想像されて居た。デニイソフは二百人持つて居、ドロオホフがもうそれだけ持つて居た。が、敵の数の優勢は、デニイソフに取つては、少しも障碍では無かつた。が、彼がまだその上には是非知つて置き度いことが唯だ一つあつた。それは、何ういふ兵が其所に居るのかといふことであつた。で、その目的に向つて、デニイソフは「舌」(即ち、敵のその隊に屬して居る人間の誰れか)を是非捉へ度いと思つた。朝荷馬車を攻撃した時には、何も彼も非常な急ぎをやつたので、荷馬車の護衛に當つて居た佛蘭西の兵卒を悉皆殺して了まつて、唯だ、自分の聯隊から落伍して居た鼓手の少年を生擒つたのみであつた。所が、その鼓手は、その隊を成して居た兵に就ては、何等の確なことも、云ひ得無かつた。

佛蘭西人を今一度襲うのは、デニイソフの考慮では、全隊を驚かす危険を伴うものであつた。で、彼は、前衛から、責めて、給養係を一人生擒つて來ることが能き無いか何うか、やつて見させやうと、ティフォン・シチエルバアトフといふ農夫を、シヤムシエーヴォへと前方へ遣つた。

(四)

暖な、雨の降る、秋の日であつた。空も地平線も悉く泥水の一様な色であつた。時には、霧が降りて来るやうに見え、又、時には、烈しい、横降りの雨が、不意に、降り注ぐのであつた。デニソフは、水の流れ落ちる長い雨外套と高い毛皮帽で、瘡せた、締め細められたやうな、純種馬に乗つて居た。頭を傾げ、自分の馬と同なじやうに、耳を突つ立て、彼は、降り注ぐ雨に對して顔を擧めて、心配さうに、前方を見て居た。瘡せて、濃い、短い、黒い鬚だらけになつて居た彼の顔は怫然として居るやうに見えた。

デニソフの側に、又長い雨外套と高い帽子で、細そりした、強い、ドン馬に跨がつて、エソオル、即ち、哥薩克兵の小頭——その計畫に於けるデニソフの加擔者——が乗つて居た。

第三の男、又雨外套と高い帽子の、小頭、ロヅアイスキイは、板のやうな平つたい、背の高い、蒼い顔の、亚麻色の髪、細い薄色の眼の、顔にも態度にも落ち着た、自信の表情のある男であつた。小頭とデニソフを唯だ一瞥見たばかりでは、何ういふ所が、乗者と馬の特質であるのか、それを云ふのは到底能きることでは無かつたのだが、それでも、デニソフは、濡れ

て居て、心持が悪さうであつて、デニソフは、馬に乗つて居る人であつたのだが、小頭の方は、常時のやうに、落ち着て、平氣であつて、馬に乗つて居る人では無くして、馬と一緒に一體を成して居る人間——即ち、二つの者の力で大きくされた唯だ一つの者——であることは、明瞭であつた。

彼等の先方に、鼠色の大外套と、白い帽子の、グシヨ濡れの案内者の農夫が歩いて居た。

その少し後に、流れるやうな尾と鬚で、血が口へポツ／＼出て居る瘡せた、脆弱さうな、キルギイス馬に跨つて、青い佛蘭西の軍用外套を着た若い將校が乗つて居た。

その側に、襤褸になつた佛蘭西の軍服と青い帽子の少年を尻馬に乗らせて、一人の驃騎兵が乗つて居た。その少年は、寒さで赤くなつた手で、驃騎兵にかじり付き、裸の足を絶えず動かして、暖く爲やうと爲て居ながら、眉を擧げて、不思議さうに四邊を見廻して居た。これが、その朝捕虜になつた佛蘭西の鼓手であつた。

狭い、泥濘つた、踏みたくられた森のなかの路を辿つて、一時に三人四人宛驃騎兵がやつて來、その後から哥薩克兵がやつて來た。或る者は、雨外套、或る者は、佛蘭西の外套を着、他の者は、馬衣を引冠つて居た。馬は、栗毛斑でも、栗毛でも、悉皆残らず、雨にグシヨ濡れに

なつて居るので、黒馬のやうに見えた。

馬どもの頸は、鬣がヅブ濡れになつて居るので異様に見え、そして、湯気が雲になつて、身体から立ち登つて居た。衣服も、鞍も、手綱も、湿氣の爲めに、土や、路に散つて居る落葉と同なじに、ネバ／＼とくっ付き、そして、膨れて居た。人はゴチャ／＼と寄り團まつて、最早自分等の肌へ透つて居た水を暖にして置かうとするかのやうに、成るべく動か無いやうに爲やうと爲、又、自分等の座の何處かへ、又は、膝とか、頸とかへ、冷たい雨の新たな流を滴らせぬやうに爲やうと爲て居た。

哥薩克兵の伍列の真中に、佛蘭西の馬と、前へ繋がれて居る哥薩克兵の乗用馬とに轆れた二つの荷馬車が、樹の根株や、枯枝の上を、ゴロ／＼と轉がつて、水の一杯な溝の上をバチャ／＼と通つて居た。

デニソフの馬は、路の水溜を避けやうと爲て、乗者の膝を樹にぶつ付けた。

「ヤア、畜生」と、デニソフが腹立たしさうに怒號つた、で、齒を剥き出して、鞭で三度馬を打つて、自分にも、朋輩等にも、泥を潑ねかした。デニソフは、機嫌が悪かつたのだが、それは、雨の爲めであり、又空腹（朝以來、誰も何にも食は無かつたのだ）の爲めであつたが、

就中、ドロオホフから何の情報も無かつた爲め、及び、敵情を知り得るやうな捕虜が一人も捉まら無かつた爲めであつたのだ。

「今日のやうに輜重隊を襲ふことの能きる機會は、最早又とは決してあるまい。俺だけで攻撃するのは少し危険い、所で、他の日に爲るとなると——大きい隊の長の誰か、俺たちの鼻先から獲物を奪つて去つちまうだらう」と、デニソフは、思つて、絶えず前方を見て、待ち受けて居るドロオホフからの使者がやつて来るのが見えるやうな氣がして居た。

右の方を少し遠方まで見渡せるやうになつて居た明地へ出て來るといふと、デニソフは止まつた。

「誰か彼方から來た」と、彼は云つた。

「二人來て居ます——將校と哥薩克兵です。必定、大佐ご自身だと、豫想します」と、小頭が云つた。この男は、哥薩克兵の使ひ慣れ無い語を使ふのが好きであつたのだ。

二人の姿は、下り坂を乗つたので、見え無く爲つたが、又二三分経つと、見えて來た。眞先の者は、髪のクシャ／＼になつた、ヅブ濡になつて居て、下袴を膝の上までたくし上げて居る將校であつた。彼は、馬を打つて、ぐす／＼した驅足にさせて居た。その後、續いて、哥薩克

兵が、鎧を踏張つて立つて、速足で乗つて居た。横平たい、薔薇色の顔の、鋭い、快活な眼の、まだホンの少年であつたこの將校は、デニイソフへと駆け付けて来て、グツシヨリになつて居る封状を渡した。

「將軍からです」と、彼は云つた。「乾いて居無いで相済まんですが……」

デニイソフは、顔を顰めて、封状を受け取つて、それを開けた。

「いや、衆皆は危険だ危険だばかり云つて居たね」と、將校は、デニイソフが手紙を讀んで居るうちに、小頭に振り向いた。「だが、コマアロフと」——で、彼は、哥薩克兵に指しした——「僕は用意して居たね。吾々は兩人とも二つ短……いや、それは何だ？」と、彼は、佛蘭西の鼓手の少年を見て、尋いた。「捕虜かね？。君等は最早戦をやつたかね？。其奴と話を爲て宜いかね」

「ロストオフ。ベエティヤ」と、その途端に、渡された封状の裡へ眼を走らせながら、デニイソフが、叫んだ。「おい、何故、お前が誰だか云は無かつたのだ？」で、デニイソフは、笑顔で振り向いて、將校へと手をさし出した。この將校はベエティヤ・ロストオフであつた。

ベエティヤは、デニイソフに向つては、往時の知り合ひのことは何にも云はずに、成人で、將

校である者が爲べき通りに、舉作はうと、途上用意して來たのであつた。

が、デニイソフが、彼に向いて微笑むや否や、ベエティヤは、直ぐ顔を晴々とさせ、嬉しさで赤くなり、保つて居やうと思つた鹿爪らしい舉作などは全然忘れて了まつて、自分が佛蘭西人の傍を乗り通つた事だの、この使の任務を命せられたのが非常に嬉しいといふ事だの、自分は最早ヴィヤズマで戦に出た事だの、或る驃騎兵がその戦で立派な手柄を爲た事だのを、話し始めた。

「やア、君に逢つたのは嬉しい」と、デニイソフはベエティヤの言辭を過ぎつた、そして、デニイソフの顔が再心配さうに見えだした。

「ミハイイル・フコクリイテイイチ」と、彼は小頭に云つて、「これは、又獨逸人からやつて來たんだ、なア。此男は」(ベエティヤ)「彼奴の幕僚なんだ」

で、デニイソフは、今持つて來られた手紙は、自分と合同して、輜重隊を攻撃しろといふ獨逸人の將軍の要求を繰り返したものであることを、小頭に話した。「若し、吾々が明日までのうちに攻撃し無ければ、奴は吾々の鼻先から、彼物を奪つて去つちまうだらうせ」と、彼は結論した。

デニイツフが、小頭に話を爲て居るうちに、ベエティヤは、デニイツフの冷い調子に顛動させられて、その調子は、自分の袴の状態から起つたものだらうと、想像して、顔を曇めて、外套の下へそれを竊然と引つ込めて、能きだけ軍人らしい態を爲て居やうと骨折つて居た。

「閣下から何かご命令がございますませうか？」と、ベエティヤは、帽子の楣へ手を附けて、自分が行る積りで用意して来て居た副官と將軍の喜劇へと立ち戻つて、デニイツフに云つて、「それとも、私は閣下の所に居りますませうか？」

「命令……」と、デニイツフは、憤然して云つた。「いや、君は明日まで居ることが能きのかね？」

「え、何卒……貴下の所に居てはいけませんか？」と、ベエティヤは叫んだ。

「で、君の將軍から君は何ういふ命令を受けて来て居るね——直ぐ歸れといふのかね？」と、デニイツフは、尋いた。

ベエティヤは顔を赤めた。

「いや、何の命令も無かつたんです。居て宜いと思ひますが？」と、彼は、尋くやうに、云つた。

「宜しい、それでは」と、デニイツフは云つた。で、自分の部下に振り向いて、そのうちの一隊を休止所と極めてあつた森の中の小舎へ行くやうにと指圖し、それから、キルギイス馬に乗つて居る將校（この將校は副官の役目をやつて居たのだ）には、ドロオホフを探しに出て、何處に彼が居るか、晩には何處へ来るのか、確めて來いと、命令した。

デニイツフ自身は、小頭とベエティヤを伴れて、佛蘭西人の陣地——即ち、次の日攻撃すべき地點——を見て置く爲めに、シヤムシエーゾの附近の森の縁まで乗つて行かうと爲たのであつた。

「さア、老爺さん」と、彼は嚮導の農夫に云つて、「シヤムシエーゾへ伴れて行つて呉れ」デニイツフと、ベエティヤと、小頭は、二三人の哥薩克兵と、捕虜を尻馬に乗せた驃騎兵とを伴れて、左方へ轉じて、森の縁の方へと、溪を横斷つた。

(五)

雨は止んだ、が、霧が降りて來、そして、水が樹の枝々から滴り下つて居た。

デニイツフと、小頭と、ベエティヤは、黙まつて、頭の尖つた帽子を冠つた農夫の後へ隨いて

行つた、農夫は、樹の根や、濕つた落葉の上を、木皮靴で、軽く音をさせずに歩いて、森の縁へとデニソフたちを伴れて行つた。

路へ出て来ると、農夫は、止まつて、四邊を見廻し、樹立の薄くなつて居る方へと、向いた。彼は、未だ葉の一杯ある大きい櫛の所で、ビタリと立ち止まつて、如何にも竊然と、デニソフたちに手招き爲た。

デニソフとベエティヤは、農夫の傍へ乗つて行つた。農夫の立つて居た所からは、佛蘭西人等が見えた。直ぐ森の外から、春の穀物の野が、急坂を爲して、下へ走つて居た。右方には、険しい溪を超えた、彼方に、小さい村と、破れた屋根の領主館が見えた。その村の中にも、家の中にも、庭の高地ちうにも、塀に沿ひ、池に沿ひ、それから、橋から村へと上つて行く坂路の上全體に、五百馬とは隔たらぬ彼方に、人の群集が、移つて行く霧の裡で見えた。デニソフたちには、坂を輻重を轆き上げて居る馬に叫ぶ外國語の聲や、相互に呼び合ふ叫聲が聞こえた。

『捕虜を此所へ伴れて来いよ』と、デニソフが、一度も佛蘭西人等から眼を離さずに居て、低い聲で、云つた。

一人の哥薩克兵が、馬から下りて、少年を抱き下ろし、そして、デニソフの所へ伴れて来た。デニソフは、佛蘭西人等に指して、何ういふ隊で彼等があるのか、少年に尋いた。少年は、冷た兩手を衣囊へ突つ込み、眉を擧げて、オヅ／＼とデニソフを見た。で、自分が知つて居る事柄は何も彼も云つて了まはうと爲て居るのは明瞭であつたに拘らず、顛動つて了まつて返答に迷ひ、唯だデニソフの間ばかり繰り返して居た。デニソフは、顔を擧めて、他方を向いて了まひ、小頭に話し掛けて、その事項に對する自分自身の意見を小頭に話した。

ベエティヤは、速く頭を振り向けて、鼓手からデニソフへ、小頭から村や路に居る佛蘭西人等へと見廻して、重要な事項は何一つ見落すまいと骨折つて居た。

『ドロオホフが来ても來無くても、吾々は、彼物を奪ら無きやア不可……え、？』と、デニソフは、眼を快活に輝らせて、云つた。

『都合の好い地點ですな』と、小頭が云つた。

『沼の傍から、下へ歩兵を遣らう』と、デニソフは、言葉を續けた。『奴等は庭まで忍び進み、お前は、彼所から、哥薩克兵を率ゐて突び込んで行く』、デニソフは、村から彼方の森へと指し爲た——『で、俺は、此所から、驃騎兵を伴れて行く。で、一發で……』

「低地から行かうと爲たつて駄目です、彼は泥沼です」と、小頭が云つた。「馬が潜り込んでしまひます、もつと左方を廻らなければなりません……」

彼等が低聲で話して居るうちに、下の池の傍の低地で、銃の音が聞え、白い煙が一つポツと見え、丘の中腹で、佛蘭西人の何百人もの聲々が、大愉快の合唱でもあるかのやうに、轟き渡る叫聲になつて、立ち登つた。

最初には、デニイソフと小頭は跳び歸つた。自分等が餘り近い所まで出て居たので、自分等が、その銃聲や、さういふ叫聲を起させたのだといふ氣がしたのであつた。

が、デニイソフ等は、それには一向關係が無かつたのだ。何か赤い物を着た男が、下の沼地の間を駆けて居た。確に佛蘭西人等は、それに銃を打ちかけて、叫んで居るのであつた。

「やア、彼者は、吾々のティフォンだ」と、小頭が云つた。

「左様だ。左様だ」

「悪黨奴」と、デニイソフが云つた。

「逃げ遂せませ」と、小頭は、眼を見張つて、云つた。

彼等がティフォンと呼んだ男は、小さい川まで駆けて行つて、それへ、水が身體の周圍でパチャ

リと潑ね飛ぶまで、跳び込み、少時見え無くなり、水から黒く見えて、四つ這になつて這ひあがり、そして、駆け出した。

彼を追つ掛けて居た佛蘭西人等は止まつた。

「いや、何うも敏捷い奴だな」と、小頭が云つた。

「獸類奴」と、デニイソフが、同なじやうな焦れ込みの明亮な態で、云つた。「今まで何を爲て居やがつたのかなア？」

「何ういふ人間です？」と、ペエティヤが尋いた。

「吾々の斥候なんだ。舌」を捉まへる爲めに私が出してやつたんだ」

「あゝ、成る程」と、ペエティヤは、その事は何も彼も知つて居たかのやうに、デニイソフの最初の言語に對して、頷いて、云つたのだが、その癖、一語も解つては居無かつたのだ。

ティフォン・シチエルバアトフは、デニイソフの部下のうちの最も役に立つ人間であつた。彼は、グサアトの附近のボクロオフスコエの村の農夫であつた。

デニイソフは、不正規戰の指揮者としての彼の働きの當初の時に、ボクロオフスコエの村へ

来た、そして、何時も爲るのであつたやうに、村長を喚び出して、佛蘭西人に就てその村長が知つて居ることを尋ねた。

その村長は、總ての村長が何時も答へるのであつたやうに、自分は、佛蘭西人のことは何も知らず、又佛蘭西人などは一向見かけ無かつた、と答へた。が、デニイソフが、自分の目的は佛蘭西人を殺さうとするのだといふことを説明して、佛蘭西人は一人もその村に止まつて居はし無いか、と尋ねるといふと、村長は、確に幾人かの「ミロダア」(掠奪者の訛)が来たには来たのだが、さういふ事に幾らか注意を爲したのは、テイシカ・シチエルバアトフばかりなのだ、と答へた。

デニイソフは、自分の前へティフォンを連れて來させた。そして、彼の活動を賞めてから、村長の前で、皇帝及び祖國に對する忠心のことや、祖國の總ての男の兒が各自の心の裡に抱いて居るに違ひ無い佛蘭西人に對する憎惡の念のことを、二言三言云つた。

『私どもは、佛蘭西人に別に酷いことを爲すたでは無えでがす』と、ティフォンは、確にデニイソフの言辭で威かされたらしい態で、云つた。『それは、ね、若い奴等や私がホンの少許と惡戯をやつたばかりなんですがすよ。掠奪者はね——私どもが、十二人ばかり殺したゞけなんだが、そ

の外にやア何も悪いことは爲無かつたでがす……』

次の日、デニイソフが、ボクロオフスコエを出やうと爲て居た時には、その農夫のことは全然忘れて居たのであつたが、ティフォンがデニイソフの部下の間へ入つて居て、彼等と一緒に行き度いと云つて居るといふことを聞いた。デニイソフは、隨いて來させても宜いと、彼等に命じた。

最初のうちは、ティフォンは、火を造へるとか、水を取つて來るとか、馬の皮剥を爲るとか、いふやうな荒い爲事を引受けて居た。が、彼は、直きに、不正規戰に對する非常な熱心と能力を表はしだした。彼は屢く夜掠奪物を探しに出るのであつたが、何時でも必定佛蘭西の衣服や武器を奪つて來無いことは無く、時には又佛蘭西人を捕虜にして連れて來るのであつた。

デニイソフは、ティフォンを賤役から離して、攻撃に出る時に彼を使ひ、哥薩克兵のなかへ彼を數へ込むやうになつたのであつた。

ティフォンは、馬に乗つて行くことを好か無いで、何時も徒歩で行つた、が、それでも、騎兵に後れ無かつた。彼の武器は、銃(それを彼は寧ろ冗談のやうに持つて居た)と、槍と、斧とであつたが、その斧をば、彼は、狼が齒を用ゐると——その毛の裡の蚤を捉るのも、太い骨

を噛むのも同じやうに、容易にやるのと——同じやうに、巧く使つたのであつた。ティフォンは、同じ正確で、その斧を揮つて丸木を割り、又は、その頭を捉へて、細い串を削るとか、七を刻るとか爲るのであつた。

デニソフの部下の間では、ティフォンは彼自身の流義の位地を占めて居た。何でも特に不愉快な、厭で堪まら無い事を爲無ければならぬ時には——例へば、泥濘に吸ひ込まれた荷馬車を肩へ當てるとか、泥沼から馬を後尾を持つて引つ張り出すとか、馬の皮剥を爲るとか、蘭佛西人の真中へ忍び込みとか、一日に五十露里歩くとか、いふやうな事を爲無ければならぬ場合になると——誰も、笑つて、それをティフォンに爲せやうと爲るのであつた。

『彼奴は何うしたつて大丈夫だ、悪魔だから、彼奴は頑丈な獸類なんだ』と、彼等は、何時もティフォンのことをいふのであつた。

或る時、彼が捕虜に爲た佛蘭西人が、ティフォンに短銃を打ち掛けた、そして、背部の肉の部分に傷を負はせた。ティフォンがその療治には——内外から用ゐた——露西亞酒の他何も使は無かつたこの疵が、隊ちうの最も可笑しがられた冗談の題であつた。そして、ティフォンは、衆皆の冗談に面白く應じたのであつた。

『おい、朋友、最早再と行る勿よ。腕背に爲つちまつたぢやア無いか』と、哥薩克兵等が笑つた、と、ティフォンは、故と悲しさうな顔を爲、怒つた態を装はうと齒を剥き出して、非常に可笑しい惡體で佛蘭西人を罵るのであつた。その事件がティフォンに及ぼした影響は、彼が、それからといふものは、滅多に捕虜を持つて來無くなつたことであつた。

ティフォンは、その一團の最も勇敢な、最も役に立つ人間であつた。誰も、彼程、攻撃の好機會を見付けた者は無かつた、誰も、彼程多くの佛蘭西人を捕虜にしたり、殺した者は無かつた。で、その爲めに、ティフォンは、何時も哥薩克兵や驃騎兵等の擲擧の的であつて、彼は、喜んで、その位地に就たのであつた。

ティフォンは、その前の日から、デニソフから、「舌」を捉へて來る爲めに、シャムシェーヴォへ遣られて居た。が、彼は、一人だけの佛蘭西人の捕虜では満足し無かつた爲めなのか、それとも、夜寝て了まつた爲めなのか、彼は、晝間佛蘭西人の真中へ忍び込み、そして、デニソフが丘の上から見た通りに、佛蘭西人に見付けられたのであつた。

(六)

デニソフは、佛蘭西軍がそれ程近所に居るのを見てから、到頭いよ／＼決心したらしいその次の日の攻撃のことを、小頭ともう少し長く話して居てから、馬の頭を引き向けて、乗り歸つた。

「さア、兄弟、行つて、身體を乾かさうせ」と、彼はベエティヤに云つた。

森番人の小舎の附近へ来た時に、デニソフは、止まつて、彼の前方の森を見た。短い上衣を着、木皮靴を穿き、カザン帽を冠り、肩へ銃を背負ひ、帯へ斧を挿した男が、兩側で長い腕をぶら／＼させながら、長い脚で、森の裡を、輕さうに大跨に歩いて來て居た。デニソフを見付けるといふと、その男は、急いで何物か、灌木の茂所の裡へ擲り込んで、鏢のグタリと垂つて居る、グシヨ濡れの帽子を脱つて、彼の隊長へと歩いて來た。

これがティフォンであつた。

彼の、切れの小さい眼のある、痘痕の、皺だらけの顔が、満足と快活な態とで、晴々として居た。彼は、頭を高く擧げ、そして、哄笑を抑へて居るかのやうに、デニソフを真正面に見た。

「おい、何處へ行つて居たんだ？」と、デニソフは云つた。

「何處へ行つてたもんですかい？。佛蘭西人を捉めえに行つてたゞね」と、ティフォンは、大膽に、速語に、皺喰れた、然かし、調子の好い低音で答へた。

「何故晝間忍び込んだのだ？。驢馬奴。おい、何故一人も捉へて來んのだ？」

「一人は捉めえるにやア捉めえたゞ」と、ティフォンが云つた。

「何處に居るんだ、其様なら？」

「私、眞最初に、曉明に一人捉めえたゞ」と、ティフォンは、言葉を續けて、平べつたい、尖の上へ反つた木皮靴を穿いた足を廣げて、踏ん張つた。「其奴を森へ伴れ込んだ。だが、其奴ア全然駄目だつたゞ。だもんで、私、今一遍行つて、今一人、もつと何うにか爲た奴を捉めえやうと思つたゞね」

「やア、悪黨奴、全く左様なんだ」と、デニソフは小頭に云つた。「何故其奴を伴れて來無いんだ」

「いや、伴れて來たつて何うなるべいかね？」と、ティフォンは、速語に、腹立たしさうに、言語を挾れた。「何の役にも立た無え奴だつたゞ。私、何様なのが、貴方がたに入り用なのか、知ら無えちやアあるめえし」

「やア、畜生……それで？」

「今一人捉めえに行きました」と、ティフォンは、話し進んだ。「私、斯うして森へ這ひ込んだだ、そして、臥て居ただ。唐突な、敏捷い舉作で、ティフォンは、何ういふ態にそれを爲つたのか見せる爲めに、腹這に臥た。「一人やつて来た」と、彼は言語を續けて、「私、其奴を斯う捉めえた」と、ティフォンは、敏捷く、軽く、跳びあがった。「大佐の所まで来う」と、私、云つただ。奴、烈え喚き聲を揚げやがった、で、四人やつて来やがっただね。劔を抜きやアがつて、私に、跳び掛かつて来た。私、斧で、斯う爲て、奴等に向つて行つただ。「何を爲やがるだい？」と、私、云つた。「死滅りやがれ」と、ティフォンは、腕を振り廻し、凄まじい響めつ面で胸を張り出して、云つた」

「うん、左様だ、お前が、川へ飛び込んで、奴等を旨くおつばかして了まつたのを、丘から見たのよ」と、小頭が、キラ／＼する眼を見張つて、云つた。

ベエティヤは、哄笑ひ度くつて堪まら無かつた、が、誰も彼も笑ひを堪へて居るのを見た。彼は、一體何ういふことなのだか解らずに、ティフォンの顔から小頭、それからデニソフの顔へと、速く見廻し續けて居た。

「とぼけるのは最早止せ」と、デニソフは、腹立たしさうに咳拂ひを爲て、云つた。「何故最初の奴を伴つて来無かつたのだ？」

ティフォンは、一方の手で背部を掻き、今一つの手で頭を掻いたが、不意に、彼の顔容が、晴した、痴愚のやうな、微笑に、緩んで、齒の一本抜けて居るのを見せた、その齒の無いことが、彼がシチエルバアトフ（齒抜）の綽名を得た理由であつたのだ。デニソフも微笑んだ、そして、ベエティヤは哄笑の快活な聲で噴飯したが、ティフォン自身もそれと一緒に、笑ひ出した。

「いや、奴は全然駄目だつただよ」と、ティフォンが云つた。「服装が甚く悪かつただ、何うして伴つて来られるものですか。それに、下等な奴だつただ、隊長殿。いや、奴は「俺ア、アナル（將軍の訛）の息子だぞ」と、云やがる、「俺、行か無えだ」なんぞとね」

「うん、貴様、獸類」と、デニソフは云つた。「俺が其奴を尋問し度かつたのに……」
「いや、私、尋問しましただよ」と、ティフォンは云つた。「奴は、多量は知ら無えと云ひました。ただ「俺方の軍は多勢だ」と、云ふですが、だが、衆皆可哀さうな奴等だ、唯だそれだけだ。大きい聲で怒號れよ」と、云ふですが、奴等衆皆捉めえられる」つてね」と、ティフォンは、快

活な決心した顔容でデニソフを見ながら、言語を結んだ。

「これ、とぼけた罰に、百甚く打つ筈してくれるぞ」と、デニソフは、厳しく云つた。

「怒りなすつたつて爲やうが無えだね」と、ティフォンは、云つて、「私、貴下の要るやうな佛蘭西人に逢は無えだつたからね。暗くなりせえすりやア、私、何様な態の奴でも捉めえて來ますだ、三人伴れて來ますだよ」

「うん、まア來い」と、デニソフは、云つた、で、森の番人小舎へ行くまで始終彼は黙まり込んで、腹立たしさうに、顔を顰めて居た。

ティフォンはその後を歩いて居た、そして、ベエティヤは、哥薩克兵等が、ティフォンと一緒に笑ひ、彼が灌木の茂所へ擲り込んだ一足の靴のことで、彼を嘲弄して居るのを、聞いた。

ティフォンの言語や微笑で起された哄笑が過ぎてしまひ、そして、ティフォンがその捕虜をば殺してたのだといふことが、不意にベエティヤに解るといふと、彼は不安な感が爲だした。

彼は、少年の捕虜を見返つた、と、彼の心に不意の苦痛が起つた。が、その不安はホンの一刹那續いたさきであつた。彼は、自分が今入つて居る仲間を辱かしめ無いものとなる爲めには、是非とも頭を高く擧げて、大膽な、勿體振つた風で、次の日の攻撃のことに就て小頭に尋くや

うに爲無ければなら無いのだと、感じたのであつた。

ドロオホフを探しに遣つた將校は、途中でデニソフを迎えて、ドロオホフの方は萬事宜くつて、彼自身も直きに來るといふ報告を爲た。

デニソフは、倏忽、少し快活に爲つた、そして、ベエティヤを傍へ招き寄せた。

「さア、君のことを話して聞かさない」と、デニソフは云つた。

(七)

莫斯科を出てから、ベエティヤは、兩親に別れて、自分の聯隊に加はつた、そして、それから直きに、大きい枝隊を率ゐて居る將軍附きの從將校を命せられた。

その任命を得てからといふもの、又、戦闘任務に服して居たその聯隊に加はつて、ヴィヤズマの戦に参加してから以來は尙一層、ベエティヤは、成人になつたことで非常に嬉しい昂奮を感じ、眞の豪勇を表はす機會を見通すまいといふ非常な配慮を爲て居るやうな状態で、始終居たのであつた。

彼は、自分が軍で見たり経験した總ての事を非常に面白く思つた、が、それと同時に、自分

の居無かつた所には、何處でも、最も眞正な、勇者的な功績が、その刹那に爲し遂げられて居るのであるやうな気がして居た。で、彼は、自分の居無かつた場所へと、何時も急いで行かうと爲て居たのであつた。

十月の二十一日に、將軍が、デニソフの隊へ誰かをやらうと思ふといふことを云ふといふと、ベエティヤは、將軍が不可ぬといふことの何うしても能き無い程感然な態で、自分を遣つて呉れと頼んだのだけれども、彼を遣ふことに爲つた所で、將軍は、ヴィヤズマの戦でのベエティヤの向ふ見ずの行爲を憶ひ起した、ベエティヤは、その時は、使を命せられたので路の側を乗つて行く筈であつたのに、佛蘭西人の砲火の下を戦線を横断つて乗つて、短銃を二發撃つたのであつた。その惡戯を憶ひ出したので、將軍は、ベエティヤは、そのデニソフが何様な事を企だて、居らうとも、決してそれに加はつては不可ぬと、特に言ひ付けたのだ。

これが、ベエティヤが、デニソフが、居て宜いのかと尋いた時に、赤くなつて、ドギマギした理由なのだ。

出發した時から、森の縁の小舎へ行き着くまで、ベエティヤは、自分の任務を確然と勤めて、直ぐ歸らうと、十分に決心して居た。が、佛蘭西人等を見、ティフォンを見、それから、攻撃が

確にその夜起るといふことを知るといふと、彼は、若い人々には極く有り勝な、一個の意見から他の意見へ急激に移つて了まうことを以つて、自分がその刹那まで非常に尊敬して居た將軍は、見すばらしい棒であつて、唯だ一人の獨逸人に過ぎ無いのだと、思ひ定めると同時に、デニソフも勇者であり、小頭も勇者であり、ティフォンも勇者であつて、困難の場合に臨んで、さういふ人々を棄て去るのは非常に耻べきことなのだ、思ひ定めたのであつた。

デニソフが、ベエティヤや小頭を伴つて、番人の小舎に達した時は、最早暗くなり掛けて居た。薄明の裡で、彼等は、鞍を置いた馬どもや、哥薩克兵だの、驃騎兵等が、空地に假小舎を建てたり、烟が佛蘭西人に見え無いやうな近くの窪地の中で、カツカとした火を造らへて居るのなどを見ることが能きた。

小さい小舎の入口では、一人の哥薩克兵が、袖をたくし上げて、羊の肉を切つて居た。小舎の裡では、デニソフの隊の三人の將校が、戸で造へた食卓を据ゑて居た。ベエティヤは、自分の濡衣服を脱いで、干かすやうにと兵卒等に渡して、直ぐ、將校等の食卓を据ゑる手傳を爲に掛かつた。

十分経つと、食卓の準備が出来て、口拭巾で蓋はれた。食卓の上には、露西亞酒と、ラム酒

の一壘と、白麵麩と、炙羊肉と、鹽とが、置いてあつた。

將校等と一緒に食卓に就き、脂ぎつた指で、肥つた旨さうな羊肉を裂きながら、ベエティヤは、總ての人々に對する優しい愛情の小兒らしい熱中の状態にあつた、で、その結果、他の人々も皆、自分が持つて居たと同なじ感情を自分に對して持つて居るのだと、信じて居た。

「で、何うでせう、ヴァシイリ・フオドロヴィイチ」と、彼はデニソフに云つて、「僕が貴下の所に一日居たつて、何でも無いでせう、何うですか？」で、返答を待つて居ずに、自分で答へた、「ねえ、僕は見付けろと云ひ付けられたんだ、で、今此で見付けて居るんだ……何卒、真中へ行かして呉れ給へ、真正の……僕は褒美などは何うでも宜いんだ……だが、僕の何うしても爲り度いのは……」、ベエティヤは、齒を噛み切つて、四邊を見廻し、頭を振り仰がせ、腕を振つた。

「真正の、真正の事へ……」と、デニソフは、微笑みながら、云つた。

「唯だ、何卒、僕が指揮が能きるやうに、幾人でも、全然僕に率させてください」と、ベエティヤは、言語を續けた。「え、貴下には、さう爲たつて何でも無いでせう？ あ、貴下、小刀が無いんですか？」と、彼は、羊肉の片を裂かうと爲て居た一人の將校に云つた。で、彼はそ

の將校に自分の衣囊小刀を渡した。

將校は小刀を賞めた。

「何卒、お持ちください。其様なのを未だ幾個も持つて居るんですから……」と、ベエティヤは、顔を赤くして云つた。「やア。いや、全然忘れる所だつた」と、彼は、不意に叫んだ。「素的な乾葡萄を持つて居ます、ね、種の一つも無い奴なんです。新しい酒保が來たんです、其奴は何でも上等な物ばかり持つて居るんです。僕はそれを十封度買つたんです。僕は甘い物が好きなんです。少許何うですか？……」で、ベエティヤは、入口に居た哥薩克兵の所へ駆け出して行つた、そして、乾葡萄が五封度入つて居るパン籃を持つて來た。「何卒、喰つてください」

「珈琲壺は要ら無いかね？」と、彼は小頭に云つた。「僕は酒保から立派な奴を買つたんだ。奴は上等な物ばかり持つて居るんだよ。それに、正直な奴なんだ。それが大切なことだね。僕は屹度君に送つてあげる。それとも、何うだね、君の燧石は耗つちまは無いかね、度々有ることなんだ。僕は少許持つて來たんだ、此所に有るんだ……」と、彼はパン籃に指し爲た。「百あるんだ。非常に安く買つたんだ。何卒、君の要るだけ取つて呉れ。悉皆でも宜いよ、實際……」

と、不意に、餘まり舌が走り過ぎたと思つて、ギョツとして、ベエティヤはバツタリ止まつて、顔を赤く爲た。

彼は、自分にはその他に何の失策も無かつたらうか、何うかと、考へやうと爲だした。で、その日の追想を大急ぎでやつて居ると、佛蘭西の鼓手の少年の姿が彼の心の前へ立ち上つて来た。

「吾々は斯ういふ風に愉快に爲つて居るんだが、彼奴は何様な心持で居るんだらう？。衆皆は彼奴を何う爲ちまつたんだらう？。何か食ふ物を遣つたか知ら？。彼奴に衆皆が酷いことを爲やし無かつたらうか？」と、彼は、思ひ惑つた。

が、燧石のことで餘まり饒舌り過ぎたと思つたので、彼は最早何にも云ひ得無かつた。

「彼奴のことを尋いて見たら何うだらう？」と、彼は、思ひ惑つた。「奴等は、自分が少年だもんだから、少年を慇然に思ふんだ、なんて云ふだらうなア。俺が少年だか、何うだか、明日奴等に見せてやるぞ。尋けば、耻かしくなるか知らなア？」と、彼は又思ひ惑つた。「なに、宜いや、構うものかい？」彼は、直ぐ、顔を赤くして、將校等の顔に笑ひが出て来るのを見やしまいかとドキ／＼しながら、將校等の顔を見守りながら、斯う云つた――

「捕虜に爲つた彼の少年を呼んで、何か食ふ物を遣つて宜いでせう……何うかすると……」
「うん、彼の慇然な小さい奴だね」と、デニイソフは云つた、ベエティヤのその注意が別段耻かしい事だとは思つて居無いことが明瞭であつた。「此所へ連れて来いよ。彼奴の名はヴァンサン・ポッスと云ふんだ。奴を連れて来いよ」

「僕が呼びます」と、ベエティヤは云つた。

「うん、左様して呉れ。慇然な小さい奴」と、デニイソフは繰り返した。

ベエティヤは、デニイソフが左様云つた時には、戸口に立つて居た。彼は、將校等の間を抜けて、デニイソフの所へ行つた。

「接吻させてください、君」と、彼は云つた。「あ、實に面白いな。實に宜いな」で、デニイソフに接吻して、彼は、廣庭へと駆け出て行つた。

「ポッス。ヴァンサン」と、ベエティヤは戸の側に立つて、叫んだ。

「誰にご用ですか、貴下？」と、聲が暗闇から云つた。ベエティヤは、その日捕虜に爲つた佛蘭西の少年に用があるのだと、答へた。

「あ、ヴェゼンニイかね？」と、哥薩克兵が云つた。

ヴァンサンといふ彼の名は、最早、哥薩克兵等に依つては、ヴェセンニイに、農夫等や兵卒等に依つては、ヴィセニヤに、變られて居たのだ。その名は、兩方とも、春——ヴェスナー——を暗示するものであつた、で、それが、その若い少年の姿に好く調和して居るやうに、彼等には見えたのだ。

「彼奴は彼所で火にあたつて居ります。お、い、ヴィセニヤ。ヴィセニヤ」と、聲々が、暗闇の裡で、笑聲と共に、次々に呼んだ。

「奴はなかく、食へん少年です」と、ベエティヤの傍に立つて居る驃騎兵が云つた。「吾々は今の先食ひ物を遣りました。奴は、飢えて居ましたよ、恐しく」

暗闇で、足音が爲た、そして、鼓手の少年が、跣足で泥濘の中をぼちや／＼やりながら、戸口へとやつて來た。

「あ、お前だつたね」と、ベエティヤが云つた。「腹が空てるかね？。怖がるなよ、誰もお前を何うも爲やし無いからね」と、彼は、耻かしさうに、親し氣に、少年の手に觸つて、云ひ足した。「お入り、お入り」

「有り難う」と、鼓手は、震えた、殆ど小兒のやうな聲で云つた、そして、敷居で、足の泥

を拭き始めた。

ベエティヤは、鼓手の少年に云ひ度くつて堪まら無い事が饒多あつた、が、彼はそれを云ひ得無かつた。彼は、入口で、少年の傍に立つて、ソワ／＼と動いて居た。それから、暗闇で鼓手の手を撃つて、握り締めた。「お入り、お入り」と、彼は繰り返した、が、それは、低い呬語であつた。

「あ、彼の兒に何か爲てやる事が能きなのだつたら」と、ベエティヤは、心の裡で云つて居た、そして、扉を開けて、少年を先に立たして、裡へ連れ込んだ。

鼓手の少年が小舎へ入るといふと、ベエティヤは、その少年のことを餘り多く氣に留めるのは自分の威嚴を下げることになるだらうと、感じて、少年から少し離れた所に坐つた。が、彼は、衣囊の中で、錢を手弄ぐつて、その鼓手の少年にそれを遣るのが宜からうか、何うかと、思ひ惑つて居た。

(八)

デニイツフは、幾干かの露西亞酒と羊肉とを、鼓手の少年に遣り、露西亞服を着せて、他の

捕虜等と一緒にやつて了まはずに、デニイツフの隊へ置けといふ命令を出した。ベエティヤの注意は、ドロオホフの来た事で、少年の方へは向けられ無くなつて了まつた。彼は、軍に居るうちに、ドロオホフの非常な勇猛や、彼が佛蘭西人に對して残酷であることなどの、饒多な物語を聞いて居た。で、ドロオホフが小舎へ入つて来たその時から、ベエティヤは、ドロオホフから眼を放すことが能き無かつた、で、彼は、頭を振り上げて、自分がドロオホフのやうな勇者と一緒にゐるのに耻かしからぬやうにと、だんく力味返つた態を装つたのであつた。

ドロオホフの様子は、その質樸なことで、ベエティヤには意外に不思議に思はれた。

デニイツフは、哥薩克兵の上衣を着て居た、彼は、顎髯を生し、それから、胸へ、奇驗な聖ニコライの聖像を、懸けて居た。彼の物の云ひ様全體、彼の一切の身振りが、彼が特別な地位にあることを現はして居た。ドロオホフは、それとは全く反對に、往時は莫斯科で波斯寢衣を着て居たに拘らず、今は、近衛の最も端然とした將校のやうに見えたのであつた。

彼は、顔を奇麗に剃つて居た、彼は、綬の付いたゲオルゲエフスキイ勳章を附けた近衛の綿の入つた上衣を着て、質素な略帽を、頭へ眞直に冠つて居た。彼は、濡れた外套を胸へ脱ぎ捨て、誰にも挨拶せずに、眞直にデニイツフの所へ行つて、直ぐ當面の事件に就て尋き始

めたのだ。

デニイツフは、自分のより大きい枝隊が佛蘭西の輸送隊に對して持つて居る計畫や、ベエティヤが持つて来た使命や、デニイツフが兩方の將軍に與へた返答などを、ドロオホフに話した。それから、彼は、佛蘭西人の陣地に就て自分が知つて居るだけのことを悉皆ドロオホフに話した。

「左様かね。だが、吾々は、奴等が何ういふ兵なのか、何れ程の兵數なのか、知ら無きやア不可」と、ドロオホフが云つた。「吾々は行つて、奴等を見て來無きやア不可。奴等が何れ程の兵數なのか知らずに、無暗に爲事に掛る譯にやア行かんね。僕は正式に事を爲度いのだ。さア、諸君のうち誰か一人、奴等の陣營で奴等を訪問しに、僕と一緒に行きませんか。餘分の制服を持つて來て居るんだがね」

「僕、僕……僕が行きます」と、ベエティヤが叫んだ。

「君が行くには、少しも及ばんだ」と、デニイツフは、ドロオホフに話し掛けて云つた。「彼者の方は、僕は何うしても遣ら無いよ」

「成る程」と、ベエティヤが叫んだ、「何故行つちや不可のですか？……」

「いや、行か無ければならん理由が無いのだから」

「いや、えい、失禮ですが……その理由は……その理由は……僕は行くんです、唯だそれだけですよ。伴れて行つて下さい」と、ベエティヤは叫んで、ドロオホフに振り向いた。

「勿論……」と、ドロオホフは、憤然して、答へて、佛蘭西の鼓手の少年の顔を見詰めて居た。

「君は、彼の小僧を長く置いて居るのね？」と、彼はデニソフに聞いた。

「今日、捉まへたのだ、けれども、奴何も知つて居らん、僕は隊へ置いてやることに爲たのだ」

「うん、それで、他の奴等は何うしちまつたかね？」と、ドロオホフが云つた。

「他の奴等を何う爲るものかな。受取を取つて、送つて了まつたのよ」と、デニソフが不意に赤くなつて、叫んだ。「で、一人理由無く殺したといふ覺の無いことを、僕は斷言し得るのだ。武人としての名譽を汚すよりか——僕は率直に云ふがね——それより、町へ、護送兵を附けて、三十なり三百なり送つてやる方が、何でも無いことぢやア無いか」

「此所に居る十六歳の少伯爵が、左様いふ上品なことを爲るのなら、それは、實に結構なん

だ」と、デニソフは、冷々とした嘲弄の調子で、云つた。「だが、君は最早其様な事を止さ無きやア不可」

「いや、僕は何にも云は無いんです、僕は唯だ何うしても貴下と一緒に行く」と云つてるだけなんです」と、ベエティヤは、耻しさうに、云つた。

「だが、僕や君は、朋輩、最早其様なお上品なことは止め無きやアならん時機だせ」と、ドロオホフは、デニソフを苛々させるやうな問題の話を爲るのが殊に満足であつたらしい態度で言葉を續けた。「何故君は、その少年を置いて置くんか」と、彼は云つて、「それは、君がその少年を慇然に思ふからで無くて、何だ。いや、吾々は、誰でも、受取が何れだけの價値しきや無いものだから、善く知つて居るぢやア無いか。君が三百人送るとする、と、三十人が艱然町へ達するんだ。奴等は飢えて死ぬか、途中で殺されて了まうかなんだ。だから、手取り早く此所で片付けて了まつた方が宜いぢやア無いか？」

小頭は、薄い色の眼を見張つて、賛成さうに、頭を頷かせた。

「それは僕の關する所では無い、論する要は更に無いね。僕は、人殺の罪を負ひ度く無いま

でなのだ。奴等は死ぬといふんだね。宜しい、死なせろ、唯だ僕が殺すのでは無いんだ」

ドロオホフは笑つた。

「奴等が僕を捉まへる機会は幾度もあつたんだ。だが、奴等が僕を捉へても——又、君のやうな武士的感情のある君を捉まへても——彼方の爲り方は少しも異ら無いんだ——一番手近な白楊の樹へ吊りさげるだけさ。」彼は止まつた。「吾々は爲事に掛ら無きやア不可、其様なことは左に右。僕の哥薩克兵に僕の包を持つて來させて呉れ給へ。僕は佛蘭西の制服を二つ持つて居るんだ。何うです、君と一緒に來るかね？」と、彼はベエティヤに尋いた。

「僕？。え、え、え、勿論」と、ベエティヤは叫んで、涙か眼へ出て來るまで顔を赤くして、デニイソフを一寸と見た。

ドロオホフが、捕虜の處分方をデニイソフと論じて居た間、ベエティヤは、再、前のやうな不安と神経的な急ぎとの感を覺えた、が、再、彼は、話されて居た事柄の瞭乎とした觀念を持つ間が無かつたのだ。「彼様いふのが、大人、而も、豪い司令者たちの考だといふのなら、其様なら左様なのに違ひ無い、その通りに違ひ無いのだ」と、彼は思つた。「所で、大切な事は、俺が奴に従は無ければならぬとか、奴が俺を勝手に命令で動かすことが能きるなど、デニイソフに思はしちやアならんことなんだ。俺は、何うしても、ドロオホフと一緒に佛蘭西の陣營

へ行くんだ。ドロオホフが行けるんだから、俺にも行けるんだ」

行か無いやうに爲せやうとするデニイソフの種々な努力に對して、ベエティヤは、自分も又事を正式に爲るのが好きで、向う見ずにやるのは嫌であるのだから、自分自身の危険などは何とも思は無いのだと、答へた。

「何故だと云へば、吾々が何れだけの兵數が彼所に居るのか確然知ら無ければ、何百人もの人々の生命に關ることなんだが、吾々の方は、何うなつても、二人だけで濟むんですからね、だから、僕は何うしてもこれを爲り度いんです、僕は、何うしても、何うしても行きます、止め無いでください」と、彼は云つた、「それは到底無効なんです……」

(九)

ベエティヤとドロオホフは、佛蘭西の制服とシャコ帽とで服装を造へてから、デニイソフが佛蘭西の陣地を見た森の中の空地へと乗つた、それから、森を出て、眞の闇の裡を、凹地へと下つた。坂下へ乗り着くといふと、ドロオホフは、自分に隨いて來て居た哥薩克兵等に、其所で待つて居ると云ひ付けて、自分は、橋の方へと、路を速い躍で乗つた。ベエティヤは、昂奮

で氣が遠く爲つた位で、ドロオホフの傍に隨つて、乗り進んだ。

「捉まれば、僕は生きて捉りは爲無い。僕は短銃を持つて居るんだ」と、ベエティヤが叫びた。

「露西亞語で云ふ勿よ」と、ドロオホフが、速い呬語で云つた、と、途端に、暗闇の裡で「誰だ」といふ誰何の言語と、銃のカチリといふ音が、聞えた。

血がベエティヤの顔へ突上つた、彼は、短銃を握つた。

「第六聯隊の槍騎兵」と、ドロオホフは、馬の足掻を速めせず、緩めせず、云つた。哨兵の黒い形が橋の上に立つて居た。

「合圖語は？」

ドロオホフは、馬を控へて、並足で乗つた。

「おい、大佐ジェラルは居るかね？」と、彼は云つた。

「合圖語は？」と、哨兵は、返答を爲すに、路を遮ぎつて、繰り返した。

「將校が視察に出て居る時に、哨兵が合圖語を尋く奴があるか……」と、ドロオホフは、不意に怒つて、云つて、哨兵へと真正面に乗り付けた。「おい、大佐は此方かと尋いてるのだ」

傍へ動いた哨兵の返答を待たずに、ドロオホフは、並足で、坂路を乗り上つた。

路を横断る人の黒い形を見付けて、ドロオホフは、その男を止めた、そして、聯隊長や將校等は何處に居るのかと尋いた。肩へ袋を負つて居た兵卒のその男は、止まつて、ドロオホフの馬の傍へ寄つて来て、手で馬を叩きながら、率直な、親し氣な風で、聯隊長や將校等は、もつと丘の上の、右方の、農家——兵卒は、それを小さい領主館と呼んだ——の廣庭に居るのだと、ドロオホフ等に、話した。

兩側から、燎火の周囲での佛蘭西語の談話の聞えた路に隨つてもつと彼方へ行つてから、ドロオホフは、領主館の庭へと向つた。門へ行き着くといふと、彼は馬を下りて、周圍に五六人坐つて、高聲で話し込んで居る大きい、赤々と燃えて居る火の方へと歩いた。一方の側に、大釜で何か煮えて居た、そして、尖つた帽子と青い上衣の兵卒が、火のカツと明つた裡に跪んで、擲杖で釜の裡を掻き廻して居た。

「料理は上手だな」と、火の彼方側の陰になつた所に坐つて居る一人の將校が云つた。

「彼奴は兎を逃げ出さして了まう」と、今一人が、笑つて、云つた。

二人とも、言語を止めて、ベエティヤとドロオホフの近寄つて来る足音の方を、暗闇を透し

て見た。

『今晚は、諸君』と、ドロオホフが、高い聲で、亮然と、呼び掛けた。

陰の所の將校の裡に動があつた、そして頸の長い將校が、火を廻つて来て、ドロオホフの傍へへ行つた。

『君だつたか、クレマン？』と、彼は、云つた。『一體何處に……』が、人違ひであるのに氣が付いて、云ひ了まは無かつた、そして、微弱に顔を擧めて、知ら無い人として、ドロオホフに挨拶して、何か用なのかと、尋いた。ドロオホフは、自分と自分の朋輩は、自分等の聯隊を追つかけて居るのだと、その將校に話し、それから、集團全體に向いて、將校等は、第六聯隊のことを何か知つて居無いかと尋いた。

誰も、ドロオホフ等に、それに就ても話すことが能き無かつた、すると、ベエティヤは、將校たちが、敵意のある、疑しうな態度で、自分とドロオホフとを見だしたやうな氣がした。五六秒の間、誰も何とも云は無かつた。

『肉汁がある積りで來なすつたんなら、最早遅まきですせ』と、笑を抑へた聲が、火の彼方から、云つた。

ドロオホフは、自分等は最早晩食を済まして來て居て、その夜未だ前方へ行く積りなのだと思へた。

彼は、笠を掻き混ぜて居た兵卒に自分の馬を渡して、長い頸の將校の傍で、安坐を掻いて坐つた、その將校は、ドロオホフから寸時の間も眼を離さ無かつた、そして、何といふ聯隊に屬して居るのかと、ドロオホフに再尋いた。

ドロオホフは、その間を聞か無かつたやうに見えた。何とも返答爲すに、短かい佛蘭西の煙管を衣囊から出して、それに火を點け、そして、自分等の前方の路には哥薩克兵等から襲はれる危険は無いだらうか、何うだらうと、尋いた。

『悪黨どもは、何處にも居りますよ』と、火の彼方から一人の將校が答へた。

ドロオホフは、哥薩克兵等は、自分や自分の朋輩のやうな落伍者どもに取つてのみ、恐いものであるのだ、と云つた、で、『彼は、奴等が大きい分隊を攻撃しやうとは爲得無いのだ、と想像して居ました』と、彼は、尋くやうに云ひ足した。

誰も返答を爲無かつた。

『さア、此度こそ去くだらう』、ベエティヤは、火の傍に立つて談話を聞いて居ながら、さう

幾度思つたか知れ無かつた。

が、ドロオホフは、止めて居た談話を又爲だした、そして、やがて、その大隊には何れ程の兵が居るのか、何れだけの大隊を彼等が持つて居るのか、捕虜は幾人なのか、遠慮無く尋じた。

露西亞の捕虜のことを尋いて居るうちに、ドロオホフは、云ひ足した――

「彼様な屍骸どもを引摺り廻るのは、實に可厭なことぢやア無いか。害蟲どもは銃殺するが宜いね」で、彼は、ベエティヤが佛蘭西人が、ドロオホフ等の變装して居ることを直ぐ覺るに違ひ無いと思つて、我にもあらず火から後へ退つた程の、異様な高い聲で笑ひだした。

ドロオホフの言語も哄笑も、何の答をも引き出さ無かつた、が、ドロオホフ等には見え無かつた(外套に纏まつて臥て居た)佛蘭西の將校が、起き上つて、朋輩に何か叫びた。ドロオホフは起ち上つて、自分等の馬を捉へて居た兵卒等に聲を掛けた。

「馬を渡すだらうか、何うだらう？」と、ベエティヤは、危ぶんで、我知らずドロオホフの傍へ寄つた。

兵卒等は馬を渡した。

「お眠みなさい、諸君」と、ドロオホフが云つた。

ベエティヤも「お眠みなさい」と、云はうと爲た、が、一聲も出すことが能き無かつた。將校等は叫き合つて居た。ドロオホフは、馬が靜然として居無かつたので、乗るのに大分手間取つた、それから、彼は並足で門の外へ乗り出した。ベエティヤは、ドロオホフの側に附いて乗つて、見返ることも爲得無かつた、が、その癖、彼は、佛蘭西人どもが追つ駈けて來るか、來無いか、見度くつて堪ら無かつたのであつた。

道路へ出て來ても、ドロオホフは、廣野の方へと乗らずに、その道路に隨いて、村の内へもつと進んで行つた。

とある地點で、彼は立ち止まつて、聞いて居た「彼だ、聞こえるかね？」と、彼は云つた。

ベエティヤは、露西亞語を話して居る聲々の音を聞き分けた、そして、燎火の周圍に、露西亞人等の黒い形を見た。再、橋に達して、ベエティヤとドロオホフは、前の哨兵の傍を通り過ぎたが、その哨兵は、一言も云はずに、不機嫌さうに彼方此方歩いて居た。二人は、哥薩克兵等が、彼等を待つて居た凹地へと出て來た。

「では、左様なら、又後で。デニイソフに云つて呉れ給へ、日の出頃、第一發でだ」と、ドロオホフは云つた、彼は去かうと爲て居た、が、ベエティヤはドロオホフの腕を掴んだ。

「いや」と、ベエティヤは叫んだ。「貴下は勇者だ。あゝ、實に立派だ、實に面白い。僕は非常に貴下を愛して居ます」

「あゝ、宜しい」と、ドロオホフは答へた、が、ベエティヤは放さ無かつた、そして、暗闇の裡で、ドロオホフは、ベエティヤが接吻して貰はうと、ドロオホフの方へ顔を寄せて來て居るのを、見とめた。ドロオホフは、ベエティヤに接吻して、笑つて、馬の頭を立て直し、暗闇の裡へ見え無くなつた。

(十)

ベエティヤが森の裡の小舎に達すると、デニソフは戸口に出て居た。彼は、非常な不安と、心配と、それから、ベエティヤを行かせたことに就て、自分自身に對するムシヤクシヤとで、ベエティヤの歸來を待つて居たのだ。

「安心した」と、彼は叫んだ。「いや、大安心」と、彼は、ベエティヤの有頂天な物語を聞いて、繰り返した。「笹棒な、君のお蔭で、眠そなつたせ」と、彼は云ひ足した。「いや、大安心、さア、眠給へ。朝までに、未だ一睡する間はある」

「え、……いや」と、ベエティヤは云つた。「僕は未だ眠むく無いんです。それに、自分でも分つて居ることなんですがね、僕は、眠入つちまうと、最早全然駄目なんです。それから、又、僕は、戦の前には眠無い習慣ですから」

ベエティヤは、最早少時小舎の中に坐つて、自分の冒險の詳細を心持好く追想し、次の日起るべき筈であつた事柄を現然と想像に浮べて居た。それから、デニソフが眠入つたのを見て、彼は、起つて、戸外へ行つた。

戸外は未だ眞暗であつた。雨は止んで居た、が、樹からは雫がポタ／＼落ちて居た。小舎の直ぐ傍に、哥薩克兵等の假小舎や、繋ぎ合せた馬どもの、黒い形が見えた。小舎の後には、傍に馬の立つて居る二輛の荷馬車のある所が、黒くボヤ／＼として居て、それから、凹地の方は、消え掛かつて居る火で、ポツと赤く爲つて居た。哥薩克兵等や、驃騎兵等は、衆皆眠て居るのでは無かつた、雨滴の落ちる音や、馬の秣料を噛む音と混り合つて、呟いて居るやうに思はれた低い聲々の音が聞えた。

ベエティヤは、門口を出て、暗闇で四邊を見廻し、それから、荷馬車へ行つた。誰か荷馬車の下で駢を掻いて居た、そして、鞍を置いた馬が、その周圍に立つて、燕麦を噛んで居た。

闇の裡で、ベエティヤは、自分の牝馬を見分けて、それに近寄つた、彼はその馬をカラバツハと呼んで居たが、それは、小露西亞種の馬であつたのだ。

「おい、カラバツハ、明日は、お互に善い働を爲やうな」と、彼は、云つて、馬の鼻の穴を嗅いで、馬に接吻した。

「やア、未だお眠なさら無いかね、旦那？」と、荷馬車の下に坐つて居る哥薩克兵が云つた。

「いや、だが……リハアチエフ——お前はさういふ名だつたね、えい？。ねえ、俺は今歸つて来た所なんだ。吾々は佛蘭西人を訪問して来たんだ」

で、ベエティヤは、自分の冒険の話のみならず、尙又、自分が行つたことに對する諸理由や、向ふ見ずに戦を開くよりも、寧ろ生命を賭しても、敵情を審かにした上に爲る方が宜いと彼が思つた理由やを、詳しく哥薩克兵に話した。

「いや、お眠むいでせう、少しお眠みなさい」と、哥薩克兵が云つた。

「い、や、俺は、慣れてる」と、ベエティヤは答へた「それで、お前の短銃の燧石は何うだね——耗つちやア居無いかい？。俺は少許持つて來てるんだ。要ら無いかね？。少許遣らうか」

哥薩克兵は、ベエティヤをもつと熟く見やうと、荷馬車の下から、頭を突き出した。

「ね、俺は何でも熟く考へて爲るんだ」と、ベエティヤは云つた「ね、何でも成り放題に爲て置いて、物の準備といふことを寸毫も爲て置か無いで、後で後悔する人が随分あるだらう。

俺はさういふ事が嫌なんだ」

「いや、ご道理」と、哥薩克兵が云つた。

「あ、今一つ、何卒、おい、お前、俺の劔を研いで呉れ無いか、俺のは、刃が鈍つて……」
「が、ベエティヤは虚言を吐くことが能き無かつた……「一度も研いだことが無いんだ。爲つて呉れるかい？」

「えい、爲りませう」

リハアチエフは起ち上つて、輻重の中をかき探した、そして、ベエティヤは、立つて、鋼銃と、研石の勇しい音を聞いた。彼は、荷馬車の上へかき上つて、その縁に坐つた。哥薩克兵は下で劔を研いだ。

「他の勇士たちは眠てるかね？」と、ベエティヤは云つた。

「眠てるのもあれば、眠て居無いのもあります、吾々のやうに」

「で、少年は何う爲たね？」

「ヴェセンニイですかね？。奴ア干草の裡へ潜り込んで眠て居ます。奴ア、晝間吃驚したんで、今は熟く眠て居ます。奴ア非常に嬉しがつてますよ」

その後、長い間、ベエティヤは静に坐つて、種々な物音を聞いて居た。暗闇の裡で足音が聞えて、やがて、黒い形が現はれた。

「何を研いでるのだ？」と、一人の男が、荷馬車の傍へ来て、尋いた。

「この旦那の劔だ」

「そりやア宜い」と、ベエティヤには驃騎兵らしく見えたその男は云つた。「杯が此所に置いて無かつたかい？」

「其所の輪の下にあるよ」

驃騎兵は杯を取つた。

「最早直き黎明だな」と、彼は、云ひ足して、欠伸を爲て、去つて了まつた。

ベエティヤは、自分が、道路から一露里の森の裡で、デニイツフの不正規兵の隊と一緒に居ることや、佛蘭西人から奪つた荷馬車の上に自分が坐つて居ることや、馬がそれに附けられて

居ることや、その下で哥薩克兵のリハアチエフが自分の劔を研いで呉れて居ることや、右方の大きい、黒いボヤ／＼とした物は、小舎であつて、左方の下の方の赤いクワツとした明りは、消え掛つて居る燎火であることや、杯を取りに来た男は、喉の渴いた驃騎兵であつたことを、知つて居たに違ひ無いと、誰も想像したらう。が、ベエティヤはさういふことは總て知ら無かつたし、又、知らうと爲もし無かつたのだ。

彼は、其所では現實のやうな物の何にも無い魔法の國に居たのだ。

影の大きい塊は、確かに小舎であつたかも知れぬが、又、地球の極く底へまで續いて居る洞窟かも知れ無かつたのだ。

赤い塊は火であつたかも知れぬが、又、大きい怪物の眼であつたかも知れぬのだ。

或は、彼は、實際今荷馬車の上に坐つて居るのかも知れ無いのだが、又、多分は、荷馬車の上では無く、恐しく高い塔の上に坐つて居て、若し、それから落ちれば、終日、若くは、一月の間も、地面へ向つて、落ち續けて居て——或は、永久に落ち續けて居て、何時まで経つても、地面へ達し無いのかも知れ無いのだ。

或は、荷馬車の下に坐つて居るのは、唯單に哥薩克兵のリハアチエフであつたかも知れぬが

又、多分は、それは、誰にも知られて居無い、世界での一番親切な、一番勇敢な、一番驚くべき、傑い人であつたかも知れ無いのだ。

或は、水を貫らひに来て、それから、凹地へ行つて了まつたのは、實際驃騎兵であつたかも知れぬが、又、或は、その男は、今消えて了まつたのかも知れず、全く消えて了まつて、最早全く居無くなつたのかも、知れ無いのだ。

ベエティヤは今例へ何様な物を見たにしても、それは、彼を驚かし得無かつたらう。彼は、何様なことでもあり得るやうな魔法の國に居たのだ。

彼は、空を凝視めた。空も又地と同じに魔法の國であつた。最早晴れだして居た、そして、雲は、星を隠して居た幕でも開けるかのやうに、樹の頂邊の上を飛び走つて居た。時には、雲が掃き去られたかのやうに見えて、その間に、晴れた黒い空がチラ／＼見えた。時には、さういふ黒い點々が暴風雨雲のやうに見えた。又、時には、空が頭上に、高く、高く上つて居るやうに見え、やがて又、手が達きさうに、低くなるのであつた。

ベエティヤは、眼を閉いだ、そして、コクリ／＼しだした。

枝々から、雫が落ちた。談話の低い吐聲と、誰かの軀の聲が聞えて居た。馬が幾匹か嘶いて

蹴合つた。

「オジグ、ジグ、オジグ、ジグ……」と、研石の上で劔が鳴つた、で、不意に、ベエティヤは、調子の好い音楽、或る聞いたことの無い、嚴肅に心持の好い神歌を奏して居る奏樂團を聞くやうに思はれた。

ベエティヤは、天性ナタアシャと、同じ位に音楽の才があつて、その點では、ニコラアイより負に上であつた、が、ベエティヤは、音楽の稽古を少しも爲て居無かつたし、又、音楽のことを考へたことも決して無かつた、それで、今不意に彼の心へ入つて來た諧調は、彼に取つては、非常に新しく、且心持の好いものであつたのだ。

音楽は、だん／＼亮然して來た。諧調は高くなつて、一つの樂器から他の樂器へと移つて行つた。其所では、音楽で謂ふ走法が奏されて居た、尤も、ベエティヤは、走法とは何ういふこととだか寸毫も知ら無かつたのだけれども、各の樂器——一つはヴァイオリンのやうなもの、他は笛のやうなものであつたが、ヴァイオリンや笛などより豊音が豊富で、豊然調子の好いもの——が、それ／＼の音を出し、それが、一曲調を終はつて了まはぬうちに、他の曲調に溶け込み、殆ど同じ曲調を始め、それから、第三、第四と移つて行くのだ、そして、皆が一つ諧

音に混り合ひ、再分れ、更に又、森嚴な寺院の音楽に混り合ひ、それから又、何か勝利の華やかな、勝誇つた歌に混り合ふのであつた。

『いや、勿論、俺は夢を見て居るんだ』と、ベエティヤは一人云つて、前へとコクリとした。『これは唯だ俺の耳の裡で爲る音なんだ。だが、俺自身の音楽かも知れ無いんだ。さア、今一遍、始めろ、俺の音楽、さア……』

ベエティヤは眼を瞑つた。と、八方から、さまざまの音が、遠方からかのやうに顫動し始め、奏し、分れ、再混り合ひだし、皆が合して同じ一つの心持の好い、森嚴な神歌に爲るのであつた。

『あ、實に好い心持だ。俺が満足するだけ十分ある、俺が好きだけで十分ある』と、ベエティヤは一人云つた。彼は、この巨大な奏樂團を指揮しやうと爲た。

『それ、徐に、徐に、それ』と、音が彼の云ふ通りに爲つた。『それ、此度は、高く、勢好くもつと、もつと陽氣に』

と、知られざる深所から、高まつて行く、勝ち誇つたやうな音が起つて來た。

『それ、聲ども、一緒になれ』と、ベエティヤが號令した。と、彼は、最初には、遠方で男

の聲々を聞き、それから、女の聲々を聞いた。その聲々は、韻律の整つた、勝誇つたやうな高調に高まつた。ベエティヤは、その異常な美しさに耽けるまゝに、畏怖と喜悦を感じた。

勝利の凱歌のやうな進行曲に混つて、聲々の歌や、枝々からの雫や、研石の上での劔のジグ、ジグ、ジグが聞えた、そして、再馬が嘶いて、蹴合つた、が、それは、諧調を亂しはせずに、反つて、その裡へ混り込んだ。

何れ程の間、それが續いたのか、ベエティヤには分ら無かつた、ベエティヤはその諧音を樂んで居た、彼は、その開始終、自分の享樂して居るのを不思議に思つて、その樂を頌つ者が誰も居無いのを残念に思つて居た。

彼は、リハアチエフの親し氣な聲で、起された。

『出來ましたせ、旦那、これちやア、佛蘭西人が眞二つに斬れまさア』

ベエティヤは眼を覺ました。

『いや、最早黎明だ、最早明るくなりだして居る』と、彼は叫んだ。

前には見え無かつた馬が、今は尾までも見えた、それから、葉の無い枝々の間から、水のやうな明るさが見えた。

ベエティヤは、自分を振り起し、跳び立つて、衣囊から一留取り出して、それをリハアチエフに遣り、それから、劔を振り廻して試めし、そして、鞘へ納めた。

哥薩克兵等は、馬を解いて、腹帯を締めて居た。

「や、隊長がお出でです」と、リハアチエフが云つた。

デニイソフは小舎から出て来て、ベエティヤを呼んで、出發の支度を爲ると云つた。

(十一)

薄明りの裡で、人々は、手早く、各自の馬を捉へ、腹帯を締め、そして、隊伍を造つた。

デニイソフは小舎の傍に立つて、最後の命令を與へて居た。その分隊の歩兵が、路を行進しだして、數百の足が泥濘の中をバチャ／＼やつて行つた。彼等は、見る／＼、黎明の前の霧の裡の樹立の間へ見え無くなつて了まつた。

小頭は哥薩克兵に何か命令を與へた。ベエティヤは、轡を捉つて馬を控へて、乗れといふ命令を熱心に待つて居た。彼の顔は冷たい水へ浸たので赤くなり、眼はギラ／＼して居た。彼は、寒氣が背部を走りくだるのを感じ、身體ちうに速い、調子の揃つた戰慄を感じた。

「おい、最早何も彼も宜いか？」と、デニイソフが云つた。「馬を持つて來い」馬が持つて來られた。デニイソフは馬の腹帯が緩かつたので、哥薩克兵に向つて腹を立てた、そして、馬に乗りながら、怒號りつけた。ベエティヤは鎧に足を掛けた。馬は、その癖通りに、ベエティヤの脚を噛みさうな風に爲た、が、ベエティヤは、自分の身體の重量などは忘れて了まつたかのやうに、鞍へ跳び上つた、そして、暗闇の裡を後の方から進んで來る驃騎兵等を見返つて、デニイソフの傍へ乗つて行つた。

「ヴァシイリ・フォドログイイチ、僕に何か任務を充て、くださいませんか？ 何卒……後生です……」と、彼は云つた。デニイソフはベエティヤの存在を全然忘れて了まつて居たやうに見えた。彼はベエティヤを見返つた。

「君に唯た一つ頼んで置く事はね」と、デニイソフは、荒々しく云つた、「俺の云ふ通りを守つて、決して出しやばら無いことなんだ」

途中も、デニイソフはベエティヤにはその上一語も云は無かつた、彼は黙まつて乗つた。森の縁に達した時分には、廣地では、少し明るくなり掛けた。デニイソフは小頭に何か叫び、と、哥薩克兵等が、ベエティヤとデニイソフの傍を乗り通り始めた。彼等が悉皆通り過つて了ま

うといふと、デニソフは、馬に拍車を當て、坂下へと乗つた。滑り、後部で沈み返りながら、馬どもは、騎者と一緒に凹地へと、すり下りた。ベエティヤは始終デニソフの傍に隨つて居た。身體ちう戦慄がますます烈しくなつた。

だん／＼明るくなるのであつた、が、霧が遠方の物を隠して居た。麓に達するといふと、デニソフは、見返つて、自分の傍の哥薩克兵に向つて頷いた。

「合圖だ」と、彼は云つた。

哥薩克兵は手を舉げた、と、一發の銃聲が鳴り渡つた。それと同一刹那に、前面を駆ける馬の足音や、八方からの叫聲や、もつと多くの銃聲が、聞えた。

馬蹄の最初の音と叫聲を聞くや否や、ベエティヤは、自分の馬の手綱を緩めた、そして、馬を鞭ちながら、自分に向つて叫んだデニソフには構はずに、前方へと駆けて行つた。

銃聲を聞くや否や、それが眞晝でもあつたかのやうに、不意にカン／＼明るい晝間のやうな氣が、ベエティヤにはした。彼は橋へと駆けた。哥薩克兵等は、前面を路に隨つて居た。橋では、ベエティヤは、後へ後れた一人の哥薩克兵に突き當つた、が、駆け進んだ。前面では、何か知らの兵等が——彼は、それを佛蘭西人だと想像した——右方から左方へと路を駆

けて居た。一人がベエティヤの馬の足下で泥の中へ轉んだ。

哥薩克兵等は、小舎の附近に群れて、何だか爲て居た。恐しい叫聲が群集の真中から起つた。ベエティヤはこの群集へと駆けた、と、彼が見た最初のものは、自分の胸へ向けられた槍を掴んで居る佛蘭西人の白い顔と震えて居る顎とであつた。

「萬歳……朋輩。我兵だ」と、ベエティヤは、叫んだ、そして、自分の早り切つた馬の手綱を緩めて、村の街を駆けて行つた。

彼は、前面で、銃聲を聞いた。哥薩克兵や、驃騎兵や、襜褕を着た露西亞の捕虜等が、道路の兩側から駆けて来て、何だか解らぬことを、聲高に叫んで居た。青い上衣の、帽子の無い、赤い、顰顔の、勇敢さうな佛蘭西人が銃劔を振つて、驃騎兵等を阻み止めて居た。ベエティヤが駆け寄つた時には、その佛蘭西人は最早斃れて居た。

「再、後れた」が、ベエティヤの腦裡を閃めき通つた、で、彼は、最も烈しい銃聲を聞いた地點へと駆けて行つた。銃聲は、彼が前の夜ドロオホフと一緒に居た領主館の廣庭から聞えて来た。佛蘭西人等は、垣の陰、木の生ひ茂つた庭園の灌木の裡に埋伏して居て、門に群れて居た哥薩克兵等を銃撃して居た。門へと乗り附けると、ベエティヤは、兵に何か叫んで居る

ドロオホフの、白い、緑がかつた顔を、煙の裡でチラ／＼見た。

「廻つて行け。歩兵が来るまで待て」と、彼は、ベエティヤが、彼の傍へ乗り附けた丁度その時に、叫んで居た。

「なに、待て？ …… 萬歳 ……」と、ベエティヤは叫んだ、そして、一瞬も止まらずに、彼は、銃聲が聞こえ、煙が最も濃かつた地点へと駆けた。

銃の一斉射撃が、ヒュウ／＼唸つて通る銃丸や、何物かヘドシリと當る音と共に聞えた。哥薩克兵等とドロオホフは、ベエティヤの後に隨いて、門から駆け込んだ。濃い、漂つて居る煙の裡で、佛蘭西人等は武器を投げ棄て、哥薩克兵を逆へやうと、灌木の茂所の裡から出て来るのもあれば、池の方へと、坂下へ逃げて行くのもあつた。

ベエティヤは、廣庭ぢうを駆け廻つて居た、が、手綱をば抑へては居すに、異様な態に兩腕を投げ擧げて居て、鞍の片側へとだん／＼傾で居た。馬は、朝の光の裡で、消え掛かつて煙つて居る火の灰の上へと踏み込んで、バタリと止まつた。ベエティヤは、濕つた地板ヘドシイリと落ちた。哥薩克兵等には、ベエティヤの頭が動か無かつたかのやうに、彼の腕や脚が速くビク／＼して居るのが、見えた。銃丸が彼の腦へ入つたのだ。

降服したことを告げる爲めに、劍へ手巾を巻いて、家から出て來た佛蘭西の主任の將校と對談してから、ドロオホフは馬を降りて、腕を突き出して倒れたきりで動か無いで居るベエティヤの傍へ行つた。

「最早駄目だ」と、彼は、云つて、顔を翹め、彼の方へと乗つて居たデニソフの方へと、門へ歩いた。

「殺されたか？」と、デニソフは、遠方からでさへ、ベエティヤの身體の横はつて居る、誰にでも分かる、疑ひ無く生命の無い姿勢を見分けて、叫んだ。

「駄目だ」と、ドロオホフは、その言語を云ふことが、自分には満足と與へるのであつたかのやうに、繰り返した、彼は、哥薩克兵等が急いで取り圍いて居る所であつた捕虜どもの方へと、速歩に歩いた。「助命無し」と、彼はデニソフに叫んだ。

デニソフは何とも返答し無かつた。彼は、ベエティヤの傍へ行つて、馬を下り、そして、震える手で、最早白くなり始めて居た、血みどろの、泥の潑ねかつた顔を、引繰り返した。

「僕は甘い物が好きなんです。上等の乾葡萄酒です、悉皆上げませう」といつた言語が、デニソフの心の裡へ出て來た。で、哥薩克兵等は、デニソフが、其所から離れて、垣まで歩い

て、それにつかまつた時に、出した犬の遠吠のやうな音に吃驚して、その方を見返つた。

デニソフとドロオホフが救つた露西亞の捕虜等の中に、ビエール・ベズウホフが居た。

(十二)

ビエールが入つて居た捕虜の隊は、十月二十二日には、莫斯科を出た時とは異つた軍隊や輜重と一緒であつた、けれども、さう爲ろといふ新たな命令が上官から出た譯では無かつたのだ。行進の當初の時に彼等の後に續いて居た乾菓の荷を持つて居た輜重の半分が、哥薩克兵等の爲めに奪はれてしまひ、他の半分は前方の方へ去つて了まつた。捕虜等の先方を徒歩で歩いて居た騎兵等は、一人も残つて居る者は無かつた、彼等は悉皆居無くなつて了まつたのだ。當初の時に捕虜等が前面で見て居た砲兵は、今は、ウエストファリヤ人の護送隊に護られた元帥ジュノオの非常な大きい輜重に變つて了まつた。捕虜等の後からは、騎兵の用具の輜重が来た。佛蘭西人は、最初のうちは、三つの隊團で行進して居た、が、ヴィヤズマからは一團に合つて了まつた。ビエールが莫斯科を出てからの最初の休止地で氣が付いた規律の弛んだことが今はその極點に達して居た。

彼等が行進した道路は、兩側に死んだ馬の屍骸が諸方に有つた。種々な聯隊からの落伍者の襁褓を着た兵卒等が、始終、行進して行く隊團に合し、そして、やがて、又離れて了まつたのであつた。

幾度も、徒な警戒が有つた、で、護送隊の兵卒等は銃を擧げて、撃ち、そして、逃げながら、相互に踏み付け合つた。それから、再、集まつて、原因の無いさういふ狼狽に就て、相互に罵り合つた。

一緒に行軍して居るさういふ三つの隊團——即ち、騎兵の輜重、捕虜の護送隊、ジュノオの荷物の輸送隊——が、その三つの部分の各々が、ドン／＼減つて行きつゝあるのではあつたが、それでも未だ完全な一つの團を成して居た。

最初は百二十の荷馬車で成り立つて居た騎兵の輜重のうちで、今は六十しきや残つて居無かつた、その餘は、奪られたり、捨てられたりしたのだ。ジュノオの荷馬車のうちの五六輛も亦、捨てられたり、奪られたりした。三つの荷馬車がダツツの軍團からの落伍者等の爲めに、攻撃されて、掠奪された。

獨逸人等の間の談話を傍聞きして、ビエールは、捕虜よりは、この荷物の列の方が嚴重に護も

られて居ること、彼等の戦友の一人の獨逸人は、元帥の所有物であつた銀のヒを持つて居ることが知れたので、元帥その人の命令で銃殺されたといふことを、知つた。

捕虜の護送隊は、他の二つの護送隊よりも尙一層減つた。莫斯科から出た三百三十人のうちで、今は百人も残つては居無かつた。捕虜等は、兵卒等に取つては、騎兵の輜重や、ジュノオの荷物よりも尙一層厄介な重荷であつた。

鞍や、ジュノオの食ヒが何か役に立つものなのは、彼等にも解つて居ることだ、が、何故寒くつて、飢て居る兵卒等が、歩哨に立つて、自分等と同じに寒く、飢て居て、始終途中で死んだり、路上に棄て、置れたりするし、又、場合に依り銃殺しようと云ふ命令を受けて居る露西亞人等を番し無ければならぬのかといふ理由に至つては——それは、全く理由の分からぬことであるのみならず、實に馬鹿々々しい可厭なことであつた。

で、護送隊の兵卒等は、自分等自身が困苦の裡にあるので、自分等の運命をもつと苦しいものに爲てはならぬといふ虞で以つて、自分等が捕虜等に對して感じた憐愍の情に打ち負け無いやうにしやうと爲て居るらしく、著るしい不機嫌と嚴重とで、捕虜等を扱かつた。

ドロゴブウスでは、護送隊の兵卒等は、自分等自身の輜重を掠奪する爲めに出かけて、捕虜

等を厩の中へ鎖ち込めて置いた、と、五六人の捕虜は壁の下を掘り抜いて、逃げた、が、彼等は直ちに佛蘭西人に捉つて、銃殺された。

莫斯科出發の際に極められた、捕虜の中の將校は兵卒等とは別に歩かせるといふ取り極めは最早餘程前に止められて居た。歩くことの能ざる者は皆一緒に進んだ、そして、三度目の行進の時に、ビエールは、カラタアエフと、カラタアエフをば自分の主人に爲た脚の彎つた、紫色がかつた灰色の犬とに再一緒に爲つた。

莫斯科を出てから三日目に、カラタアエフは、それで莫斯科で病院に入つて居たその熱病に再罹つた、そして、カラタアエフは弱つて行くに従つて、ビエールはその傍へ寄り無いやうに爲だした。ビエールは、それは何ういふ理由なのか分ら無かつた、が、カラタアエフが病氣になつた時から、彼の傍へ行くには餘程骨を折ら無ければなら無かつた。で、その傍へ行つて、カラタアエフが休止地で臥て居ながら屢く出した低い呻聲を聞き、病人のだん／＼強くなつた臭氣を嗅ぐといふと、ビエールは、カラタアエフから遠方へ離れて了まつて、彼のことは考へ無かつた。

牢獄であつた小舎に囚れて居るうちに、ビエールは、自分の智力に依つては無くして、自

分の存在全體に依り、生命に依つて、人間は幸福になるやうにと造られたものであつて、幸福は人自身の裡に在り、自分の天然の人的欲求を満すのに在るのであつて、總ての不幸福は、必要な物が缺けて居るが爲めに生ずるので無くして、それが餘計に有り過ぎる爲めから生ずるのだといふことを知つた。

が、今、行進のこの三週間のうちに、彼は今一つ新たな、心を慰める眞理を知つた——彼は、世の中には何も怖い物は無いといふことを知つたのだ。彼は、この世では、人間が何うしても幸福であり、全然自由であり得る位地は一つも無いと同なじやうに、又、人間が何うしても不幸であり、全く束縛されて居るといふ位地は決して無いものだといふことを知つたのだ。

彼は、苦痛にも、自由にも或る制限があつて、その制限には直きに達するものであるといふことを發見し、自分の家の薔薇の花壇の花片が一つ揉みくちやになつて居るのを見て苦痛を感じた人が、今、彼が濕つた全くの地板に眠て、片側が暖になると、片側が冷へ切つてしまふといふやうな場合にあつても、丁度同なじ度の苦痛を感じるものであることや、それから、彼が往時に、緊い舞踏靴を穿いた時の苦痛と、今腫れた所の一杯ある足で（脚絆は最早風に襪襦になつて了まつたのだ）全く跣足で歩いて居る苦痛とのその度は全く同なじなのだといふことを、

發見したのだ。彼は、自分が——それは、自分の自由意志からだ、想像して居たのだが——妻と結婚した時は、自分が一晚厩舎に鎖ぢ込められた時と、同なじ自由の無い状態であつたことを、知つた。

彼が、その後自分で苦痛と呼んだ總ての事のうちに——尤もその時はそれを苦痛だと感じはし無かつたのだが——一番苦しかつたのは、彼の跣足の足の腫居ることであつた。馬肉は甘くつて、滋養になつたし、鹽の代りに硝酸でそれへ附けた硝石の味が確に心持が好かつた、寒氣もそれ程では無かつた、行進中晝間は何時も暖であつたし、夜になれば燎火があつたし、それから、彼をさんぐに食つて居た蚤も彼を暖にさせる助になつた。唯つた一つ、最初の時分には、苦しいものがあつた——それは、自分の足のことであつた。

行進の二日目に、彼が燎火の傍で自分の足の水腫を調た時には、ビエールはそれでは到底歩け無いと思つた、が、衆皆が起つといふと、自分も跛を引きながら出た、そして、後になつて、暖つて來るといふと、痛を覺えずに歩いた、その癖、足はその晩尙一層甚くなつて居るやうに思はれたのだ。が、彼は、それを見無かつた、そして、何か他の事を考へて居た。

ビエールは、今始めて、人間の裡にある生存力の全體、及び、人間が本來持つて居る自から

救ふ力、即ち、餘分な蒸氣の壓力が或る一定の度を超えるといふと、その蒸氣を放出してしまふ蒸氣機關のやうに、注意を他へ移してしまふ方の人間にはあるものであることを、明に覺つた。

彼は、捕虜の百人以上が銃殺されたのであるのに、それがさういふ風に殺されるのを見やうともし無ければ、聞かうともし無かつた。彼は、カラタアエフのことは考へ無かつたが、カラタアエフは、毎日だんく、疾くなりつゝあつて、確に、他の捕虜等と同じ運命に陥ることは直きであるらしかつたのだ。ビエールは自分のことは、尙更何とも思は無かつた。自分の状態が苦しくなればなる程、自分の將來が恐ろしいものになればなる程、彼の心に起つて来る喜ばしい、心を慰撫せる考想や、記憶や、心象が、一層現在の窮境から獨立して居るものであつた。

(十三)

二十二日の眞晝時に、ビエールは、自分の足下や、道路の凸凹を見ながら、泥濘つた、滑る路を坂上へと辿つて居た。

始終彼は、周囲の見慣れた群集をジロ／＼見、やがて又、自分の足下を見るのであつた。

その群集も、その足も、共に彼のものであつて、彼には最早十分見慣れたものであつた。紫色がかつた、彎つた脚の、灰色の犬が、路傍を嬉しさに驅けて居た、時々、後脚を舉げて、満足と勢の好い表徴として、三本脚で跳び廻り、又は、腐肉に棲まつて居る鳥を吠へるのであつた。灰色の犬は、莫斯科に居た時より勢が好く、嬉しうであつた。八方に、種々な腐敗の度の、種々な動物——人から馬までの——の肉が横たはつて居るのであつたが、兵卒等が絶えず行進して居たので、狼がその屍體の傍へは寄り得無かつたので、灰色の犬は腹一杯食ふことができたのだ。

雨が、早朝以來降つて居た、で、始終今にも止みさうで、空が晴れさうに思はれたのに、直ぐ又、一寸小止の後で、雨は再もつと烈しく降つて来るのであつた。雨の全然浸み込んだ道路は、最早その上水を吸ひ込み得無いで、流が轍の跡の溝を流して居た。

ビエールは歩きながら、右左と見廻して、自分の歩数を數へ、三步毎に指で數取りをして居た。心の裡では、雨に向つて、彼は、「さア、又來い、降れ、降れ」と、云つて居た。

彼は、自分では、何にも更にも考へて居無いやうな氣がして居た、が、彼の心の深い奥の何處

かでは、嚴肅な、愚めになる何物かを考へて居たのだ。その何物かといふのは、カラタアエフとその前の夜話したことから生ずる最も微妙な、精神的な推論であつた。

前の夜の露營地で、消え掛つた火の傍で寒く爲つたので、ビエールは、起き上つて、もつと好く燃えて居る次の火へと、行つた。其所に、カラタアエフが、僧袍のやうな外套を頭から冠つて坐つて居た。今は病氣の爲めに弱々しくなつて居る彼の撓やかな、心持の好い聲で、彼は、ビエールには最早前方聞いたことのある物語を兵卒に話して居た。

それは、カラタアエフの熱が何時も大抵下る時分の、夜半であつた。そして、彼は、その晩は殊に快活であつたのだ。

火に近づき、ブラアトンの弱々しい、病人らしい聲を聞き、クワツと明るい火の光明の裡で、ブラアトンの感然な態様を見るといふと、ビエールは、心の裡に苦痛を感じた。彼は、この男に對して自分が持つた憐愍の心地が自分で怖くなつた、で、彼は其所を去り度かつた、が、何處にも行くべき燎火が無かつた。それで、彼は、ブラアトンを見無いやうに骨折りながら、その火の傍に坐つて居た。

「おい、君の熱は何うだね」と、ビエールは尋いた。

「熱は何うだと云ふのかね？。病氣を悲しむが宜い、それでも、神は人に死をお與へなさら無い」と、カラタアエフは云つて、直ぐ又、爲だして居た物語へと戻つた。

「で、さういふ風で、兄弟」と、彼は、瘡せた、白い顔に微笑を持ち、眼には特異な嬉しさうな光を持つて、言語を續けて、「で、さういふ風で、兄弟……」

ビエールは、餘程前にその物語は聞いたことがある。カラタアエフは、最早六度程その物語を話したのだが、それは何時でも特殊な嬉しさうな感情で以つて、話されたのだ。で、ビエールは、その物語を熱く知つて居たけれども、彼は、何か新しい物語でもあつたかのやうに、それに聞き入つて居た、と、カラタアエフがそれを話して居ながら確に感じて居るらしかつた抑へ付けた歡喜の心持が、ビエールにも傳染つたのだ。

それは、或る年取つた商人の物語であつた、その商人は、身持好く、神の律を守つて、家族と共に暮して居たのだが、或る時、金持の商人と一緒にマカリイへと旅を爲た。

一緒に或る旅舎へ泊つて、眠たのだが、次の朝になつて見ると、金持の商人は、咽喉を斬られて死んで居て、所持品は盗まれてしまつて居た。血まみれの小刀が、年取つた商人の枕の下から出て來た。その商人は、裁判せられ、笞刑に處せられ、鼻を斷り割られ——といふ風に、

カラタアエフの云ふのでは、總て法律の通りに——そして、重懲役に處せられたのであった。
『で、さういふ風で、兄弟』(ビエールが、カラタアエフが火の傍に居るのを見たのは、丁度物語が其所まで来て居た時であつた)『十年の餘、それから経つて了まつた。老人は牢獄で暮して居る。法則通りに、従つて居るし、何にも悪い事は爲無いで居たんだ。唯だ死ぬる時が早く、来るやうにと、神様に祈つて居たんだ。所が、夜になると、衆皆、罪人が、恰度、吾々が此所で斯うして居るやうに、集まるのだつたが、老人もその中に入つて居た。で、衆皆が、各自の罪や、神様に對して罪を犯したことを、話した。一人は、人の生命を取つたことを話した、又一人は、二人殺したことを話した、その次の奴は、何かへ火を放つたことを話した、又、その次の奴は、別に何の理由も無い駆落者だといふのだつた。所で、衆皆が、老人に向いて、何うした事の爲めに、お前さんは、斯うなつたのかね、老爺さん?』と、尋いた。『私が此所に來たのはな、兄弟たち』と、老人は云ひだして、私の罪の爲めでは無く、他の人々の罪の爲めだ。私は、人の生命を奪つたことは無し、吾々より貧乏な兄弟たちに物を遣つたことこそあれ、他人の物を奪つたことも無い。私は商人であつた、親愛な兄弟たち、私は大きい金持であつた。で、老人は、衆皆に詳しく話して、その事件の起つた次第を全然話した。『私自身のこととは、

私は最早悲しみは無し。神が私を苦め給ふのだ。が、唯だ實に氣の毒なのは、私の年取つた女房と子ども等なのだ。』さう云つて、老人は泣きだした。すると、商人を殺した、それ、その男が、その仲間の中に居たんだ。それは、何處であつたことかね、老爺さん?』何時、何月?』と、いふ風に、その男は、その事件を種々と尋きだした。その男の心が痛みだした。で、老人の傍へ行つて、斯ういふ風に——で、老人の脚下に平れ伏した。『お前さんは、私の罪の爲めに苦みを受けて居なさるんだ』と、その男は云つた。『全く眞實の話、この人は、罪も無いのに、何にも爲無かつたのに、苦められて居るんだ。兒どもたち』と、その男は云つた。『それを行つたのは私なんだ。この人の眠て居るうちに、枕の下へ小刀を入れたのは、私なんだ。勸忍してください、老爺さん、何卒』と、その男は云つたんだ。』

カラタアエフは止まつて、さも嬉しさうに微笑んで、漸になつて居る丸木を組み直しながら、火を見詰めて居た。

『老人は、神様、この男をお宥してください』と、云つて、だが、吾々は、誰も彼、神様の前では罪人なのだ』と、老人は云つた。『私は私自身の罪の爲めに苦しんで居るのだ。で、老人は、烈く泣いたんだ。何うだね、衆皆』と、カラタアエフは、云つたが、自分の物語の非常に善い所

と、肝腎の點が、これから話さうとして居る所にあるのであるかのやうに、彼の歡喜的な微笑がだん／＼晴々しくなるやうであつた。「何うだね、衆皆、その殺人犯者は、警官に自首したんだ。私は人を六人殺しました」と、その男は云つた（甚い悪黨だつたからね）、「だが、私が一番氣の毒に思ふのは、この老人です。何卒、私の罪の爲めにこの老人が苦しむを受けることの無いやうにしてください。その男は白状した。それは、書き留められて、書類は其筋へ送られた。その先方は餘程遠い所だつた。それから、裁判が始まつた。其所で、總ての報告が、手續通りに書かれた、いや、勿論、その筋の手で書けたんだ。で、それが皇帝の前へ出された。其所で、商人を牢から放して、何とか賠償を極めて、それを遣れといふ命令が皇帝から來た。その書面が來たので、衆皆は、老人を探し始めた。カラタアエフの下顎が震えた。だが、神様は、最早夙くに老人をお宥しなすつたんだ——老人は死んで居た。全くさうであつたんだ、衆皆」と、カラタアエフは、物語を終はつた。そして、黙まつて微笑みながら、自分の前方を長いこと見詰て居た。

その物語そのものでは無く、その神祕な意味や、その物語を爲て居るうちカラタアエフの顔で輝いて居た歡喜的の喜悅の、その喜悅の神祕な意義が、今、臍氣にビエールの心に満ちて、その心を喜ばしたのであつた。

(十四)

「列らべ」と、聲が不意に叫んだ。

捕虜たちや、護送の兵卒等の間に、快活なさめきがあつた。そして、祭式のやうな、嚴肅な何物かを待ち設けるやうな様子が現はれた。大聲の號令が八方で聞えた。善い馬に乗つた奇麗な服の騎兵等が、左方から速足でやつて來て、捕虜の周圍を廻つた。何の顔も、高官の人々の近づく時には何時でも見られる神祕的な様子を帯びて居た。

捕虜等は、ゴチャ／＼と寄り圍まつて、片側へ推し遣られて了まつた。護送隊の兵卒等は隊伍を整へた。

「皇帝だ。皇帝だ。元帥だ。公だ……」で、清潔な騎兵等が乗り通つてしまふか了まは無いうちに、馬車が六匹の灰色の馬に轆かれて、轟いて來た。ビエールは、三角帽を冠つた人の、落ち着た、奇麗な、肥つた、白い顔をチラと見た。

それは元帥のうちの一人であつた。